
転生人生 【極悪の葱】

シュマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生人生 【極悪の葱】

【NZコード】

N2055P

【作者名】

シユマ

【あらすじ】

転生人生、第一段！前作を見ていても大体大丈夫！

主人公はネギに憑依しています。主人公がかなりイベントをスルーするかも・・・まあ、バトル薄めのほのぼの系だと思われます。

キャラ設定や世界観【随時更新・ネタばれを含む】（前書き）

これは作者の脳内設定の一部なのでコレを元に他の作品などを批判したりしないで下さい。この設定はあくまでこの小説を楽しむためのスペースなのであしからず。

とりあえずネギとウェールズの人達を追加。
マホラ教員とエヴァを追加。
ウェールズとマホラ追加
2-Aを追加、8番、13番

キャラ設定やら世界観【随時更新・ネタばれを含む】

初めに

この物語は稀有な能力を持ち、奇妙な人生を送る、凡人が主人公です。

+++++

ネギ・スプリングフィールド

この物語の主人公であり、主人公に最も相応しくない人物。自らの持つ、能力により輪廻転生を繰り返す。

性格、元々備わっていたネギ少年の善良さと転生者が持っている自分本位な悪性により、ネギは良心的な小悪党みたいな感じに、例えるなら綺麗なジャギ様。

彼（転生者）の能力、【先天的遡性性質】　彼の魂の影響を持つ因子（つまり前世の彼）の人生を追体験し、記憶や経験を得ることができ、現在は17人の彼の生を覚えている。

ネギの能力、郭海皇（超が付くほどの武術家、中国拳法そのもの）技術、と魔法。

ネギの得意な魔法属性は風と水、攻撃魔法より補助魔法を重点的に覚えている。

得意技は音速で振るう【羅刹拳】

本来のネギ少年はうっかりが多く、ファザコンで誘導されやすい男の子です。主人公ってよりトラブルメイカーなヒロインみたいですね。

+++++

アンナ・コーリエウナ・ココロウア 通称アーニャ
この物語のヒロイン、面倒見がよく、お節介もある。とても明るい性格をしており、ときより熱血になる。おしゃま、でも今は色気より食い気でハイティーとお菓子が大好き。

ネギに対しては自分のほうが年上だと思っているが、ネギのほうが優秀だと確信しているため、割と素直、ネギのことを頼れる友人と見ていて、淡い恋心が芽生えている。

火の魔法属性に天性の才能を持つており、得意技は全身から業炎を放つ【アーニャ・ビックバン】

アーニャはツンデレ幼馴染、作者的にGJです。

+++++

ウェールズ ネギの故郷、イギリスのど田舎、でもこの近くに魔法世界へのゲートがあるため、魔法使いが多く隠れている。研究者や隠遁生活の魔法使いの楽園? ここにあるメルディアナ魔法学校はアリアドネー、マホラなど各地の教育、研究機関と提携している。

スタン爺さん、村の長的人物。ネギやアーニャを可愛がつており、ネギを置いていったナギに強い不満を持っている。適正魔法属性は風と土。

ノーギル・スプリングフィールド、メルディアナ魔法学校の校長でネギの祖父。ネギやアーニャを猫可愛がりをしており、一人に対

してホイホイ魔法（古代語魔法や殲滅魔法）を見せびらかすように教えた。アーニャが此処まで強くなつたのはこいつのせい。適正魔法属性は炎と風。爺馬鹿。

クリス・コロウア、アーニャの祖父。日々、暮らしを樂にする魔法を研究している人。三日天才（三日間、頭が良くなるがその後一ヶ月幼児退行する。）やお掃除、洗濯、畠仕事、紙飛行機をどこまでも飛ばす魔法等を開発した知る人ぞ知る新魔法研究の第一人者。村でも有名な変人。マッドサイエンティスト。

ドネット・マクギネス、ノーギルの秘書。ネギ様ファンクラブの会長、彼女のベットの枕元にはネギ（馬鹿ネギ時のあどけない笑顔）の写真が飾られており、ネギがまほらにいつてからさらになぎへの情愛が燃え上がっている。危ないお姉さん。

ネカネ・スプリングフィールド、ネギの従姉妹。ネギ様ファンクラブ親衛隊隊長、ドネットとは違い、萌えネギよりも普段のネギを好んでいる。魔法学校を卒業して、ネギと一緒に暮らすように、学校で働きながら生活を送っている。姉馬鹿。

コロウア夫妻、夫リック、妻ローズ。心優しい人達で果樹園を営んでいる。リックは娘婿でクリスにボロボロにされながらも何か和解し結婚した。一人はよくピンク色の空間を作り出すのでアーニャはよくネギのところに。万年新婚夫婦。

+++++

マホラ学園都市 1890年ごろに建てられた魔法学校としては歴史が新しい学校。本来は西洋魔法使いがアジアの術者に対する拠点だった。しかしマホラ内部にMMの介入や日本の術者の工作によ

り危機感を募らせ、学園都市を築き、一般人を置くことによつて表向きに活動できなくした。

図書館島、戦中の戦火に巻き込まれないよう世界中の貴重な書物を集めたらしい・・・が完全に魔法使い達の趣味である。現在も表裏問わず集められた書物は増加の一途を進んでおり、それに伴い図書館島の増築が進んでいる。増築をしているものに關しての噂はありません。

近衛近右衛門 マホラ学園都市、学園長。かつては世界でも五本の指に入るほどの古豪、その力はいまだ衰えずさらに老猾さを増している。あの長い頭は彼の豊富な知識が詰まっているらしい。陰陽道と西洋魔法を組み合わせた全く新しい術を使つらしい。愉快犯。

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェル 吸血鬼の真祖にして最狂の魔法使い、600年の叡智と戦闘経験はまさに怪物的、彼女自身は才能はたいしてなかつた筈（後天的な真祖だから）最強の凡人、合気柔術の達人で人形遣い。適正魔法属性は氷と闇。ナギに惚れていて罠に掛けられた可哀相な人。ナマハゲ。

高畑・T・タカミチ マホラ女子中等部の英語教師で美術部顧問、GHOで活動しており出張を頻繁にしており、新田先生からはあまり良いイメージをもたれていない。苦労人、作者は忙しすぎて白髪になつたと思つてた。学園最強の魔法先生と呼ばれている、彼の真骨頂は居合い拳でもカン卦法でもなく、エヴァとの戦闘訓練や実践で培つた洞察眼である。デスマガネ。

新田先生、女子中等部で3年の学年主任、進路指導部長をしている生徒想いな先生。規律に厳しく、学校内で怒鳴る姿はもはやマホラ名物、しかし決して理不尽に起つるようなことはせず、物分りが

良い。ホワイトデビル。

源しづな先生、女子中等部で英語科の教師をしており、ネギの副担任兼指導教員である。1974年6月28日生まれ、寅年、蟹座のA型。趣味はドライブ、好きなものはざるそばと日本酒、嫌いなものはタバコの煙。ショタ疑惑有り、酒豪でカラミ酒。バスト99の乳神様。

+++++

2 - Aの生徒。

神楽坂アスナ、出席番号8番。強気、バカ力、お人よし、熱血と主人公属性を持ち、魔法無効化能力を持ち血筋もラスボス？である最初の魔法使いの末裔っぽい。目はオッドアイで武器も精神の高ぶりで強くなると完全に主人公である。ネギま！では重要な位置におり、物語の鍵になる人物。好きな人は高畑先生。美術部所属。バカレッジ。幼女時代はポスト綾波。

近衛このか、出席番号13番。マホラ学園の学園長の孫にして、関西呪術教会の長の一人娘、極東最大の魔力量を持ちその価値は計り知れない。親の意向で魔法については聞かされておらず、とても危険な立場に置かれている。ネギと同じく影響力の強い親を持ち、その身内故に命を狙われている。たぶん大人になつても不自由な生活を送りそうなキャラNO - 1。

趣味は料理、占いとかオカルト。お嬢様だけど家事が得意。京都弁はカワイイ。

ネギです。毎日、朝3時半から釣りをしています。改定

謹わん、おほいんほんぢわです。このたひほじの転生人生をお選びありがとうございます。この作品には多量の原作ブレイク、超展開、キャラ崩壊が含まれますのでお気をつけ下さい。お口に合いませんでしたら、プラウザバックをするのが宜しいかと、ではお楽しみ下さい。

えっ？ハンターの方ですか？・・・ネタ切れです。

イギリスはウェールズの森の中、静かな湖からこんにちはネギ! スプリングフィールドです。いまボクは朝釣りの真っ最中です。なんでそんなことしているかつて?ボク両親が蒸発したんです。ボクの面倒はアーニャの親御さんの口コロウア夫妻が見てくれて、でも作ってくれる料理には野菜が多いので、タンパク質が取りたいのと修行を兼ねています。

なんで修行するかつて？実はボクが4歳になつたら悪魔に村が襲われるみたいで。なんで知つているのかつて？ボクが転生者だからです。

修行しても無駄じやないかって？ボクには昔から不思議な能力があつてその名も『先天的遡性性質』です。説明すると前世とか前世より前の記憶やら経験を得ることができる。いわゆる強くて？——ゲームです。

ボクの前世には郭海皇というすごい武術家がいて、その人の業を再現できれば、何とかなると思います。あの人、153歳まで生きましたからね、その分経験値がすごいです。

「ネ～～ギ～～！～！」

「あつ、アーニャだ。」

朝から元気ですね、やっぱり子供は風の子ですね。ちょっと頭に寝癖がありますよ、ボクはいつこうだらしないのがすうぐ厭になるんですよ。

「おはよーまつたく、ネギは朝早すぎよー家のおじいちゃんがまだ起きてないわ！」

「おはよう、アーニャ。ほら、後ろを向いて髪を直すから。」

手櫛で直そうとするボクに櫛を渡してくるアーニャ、ボクが直す」と前提で来ましたね？ そうそう、アーニャのおじいさんはクリスさんっていうんですよ。それにしてもませてますね、やっぱり女の子は成長が早いですね。

「それで今田は釣れたの？」

「ええ、6匹も釣れましたよ」

一時間程で釣れましたから、大量といつていいですね。

「そう、はい！朝ごはん！持ってきたから。」

「いつもありがとうございます。ローズさんには頭が上がらない・・いつもと作り方が違いますね。もしかしてアーニャが作ったのかな？」

「そりやー悪いー！」

「いえいえ、美味しいですよ。いやー、アーニャをお嫁さんに貰う人は幸せだなあ（味が薄くて中のレタスとかがはみ出でます、でも4歳でここまで出来たら将来は有望そうですね。）」「不味いとはいこませんが、美味しいはありません。でもアーニャが此方の一挙一動を注視していくので、ちょっと意地悪したくなりますね。」

「あ、ありがと、私も食べよつかな・・・ってもう無いじゃないのー。」

「わあ、帰つて一度寝に入らつひとつ。」今日はクリスマス爺さんのところでも行こうかな？

「ひょっとー・ネギ！全部食べる」と無口でした。

「ああ、アーニャも一緒に寝ます？」

「うえつーね、ネギがどうしていつぱり寝てあざなうこともないわ・・・。」

「そりですか・・・。」そんな、ネギ＝スプリングフィールド、3歳の秋のことでした。

「う、ちゅうとー待ちなきことー・ネギー！置いてかないでよー・まとめに入らないでー。」

ネギです。毎日、朝3時半から釣りをしてます。改定（後書き）

うへへ、性慾りも無く書くものを増やす、駄目作者、シユマです。
今回は短めです、次回は、悪魔襲来を予定しています。

改定事項はネギの会話文に「」をつけたこと表現の訂正です。

クルミパンの味つても田様みたいだって、どんな味でしちゃうね 改定

陣九郎さん、マジカッコいい！あのHondelingはやっぱり雪之丞に乗り移ったんですかね？私としては元の陣九郎の方がいいですけど。

どうでもいいことです、レディス4のクリスマスツリーの達人のセンスは無いですが、この作品は、ファイクションであり実際の団体、個人とは関係ありません。

「」の作品は基本的にネギ君の一人称でお送りしますよ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今日から悪魔襲来とかマホラとかのために魔法を習おうと思います。

「スタンお爺さん！」

まずは、スタン爺さんから教わるとしましょう。とりあえず共通の話題でスタン爺さんに話しかけますか。

「おお、ネギじゃないか、どうしたんだ？」

「ボクのお父さんって、どんな人だったんですか？」

「ナギのことか・・・アイツは昔からやんちゃでな。・・・・・・

・・・・・

+++++

「まつたくーあの悪がきときたら、ついのオレンジを盗みおつたんじやーけしからん！」

「へー、そうなんですか（よくいる悪ガキだったのか、でも魔法の才能はずば抜けていたと。）・・・わつこえはスタンお爺さんって昔、何をしてたんですか？」

「どうか数え年で10歳くらいには家出して、日本に辿り着くとか恐ろしい限りです。

「ワシか？・・・何でいつたらいいんじやろつな、若い時は用心棒の真似事をしていて、その時ばあさんとあつたんじやが・・・・・・」

+++++

「それでメガロメセンブリアでドラゴンの討伐の功績で賞金をもらって、それを結婚資金にしてここに家を建てたんじや！」

「わー、すごいですー！ ドラゴンを倒したんですか？」

「それはな、ワシのオリジナル魔法の土柱結界で動きを抑制して、石柱呪縛方陣を使って動けなくしたところを、風神石槍でドンじや

！」

「すごいです！ 他にはどんな魔法が使えるんですか？」

「の人、かなりすごいんだな。タイムマンでドラゴンを撃墜か、ホントに後衛の魔法使いだったのか？」

+++++

「そんなに使えるんですか！・・・いーなー、今のボクに使えるの何か無いですかね？」

見事なまでに攻撃一色、補助魔法とか無いんですね？」

「うーん、何かあつたかのうへ、うじゅ、じゅんなのはどうつかのう。」

「

+++++

「今日はありがとうねー、スタンお爺さん！」

「はつはつは、なんのなんの、また教えてやれりつ、ネギは物覚えが速いから教えがいがあるわい。」

「うんー、分かったよー。（うーーん、まだまだボクの技量が足りないなあ。）」

教えてもらったのは魔法学校を卒業してから学ぶ高度なものばかりだった。

「ノーギルお爺さん！ボクの・・・以下略。」

「クリスお爺さん！ボクの・・・以下略。」

+++++

・・・いろいろ、覚えましたね。これくらいあれば、何とかなりそうです。えーっと、この魔方陣を刻んだ、石を村を中心にして、どれくらいがいいかな？

半径5キロメートルの円状に置いていこう、石の感覚は100mぐらいでいいか……あつ、石が全然足りないな。拾つてこよ。

「ネーギーーもう夕方なので、何処にいくの?」

「おや、『近所のココロウアさんちのアンナ・コーリエウナ・ココロウア、いつも元気で明るくて活発、そして今年から魔法学校に入学する。おしゃまな熱血バーニング少女じゃありませんか。』凄い勢いで笑顔のアーニャがやつてきたのでついつい説明口調に。・・。

「・・・なんでそんな、説明口調なの。というか私つて熱血なの?」

「だつて氣合とか根性とかよく言つじやないか。ボクは好きですよ?」「う、レッドーみたいな、熱い雰囲気。」

絶対戦隊ヒーロー物ならレッドになる素質を持つてると思つ

「そ、そ、うー!(好きー!今、私のこと好きって言つたー!)」

「それで、アーニャは何しに來たんですか?」

おーおー、顔を赤らめて初初しいことで、どうかこのまま大きくなつてくれないかな?

「ほらーこれこれ、すういでしょー。」

「ああ、杖じゃないですか。ところとは遂に魔法が解禁か、おめでとうアーニャ!」

いい笑顔だ、でもボクももう杖持つてるんだよね。何故か家に落ちたから、多分ボクの祖父辺りだと思つけどね。

「うふ、うふふふふ、ふふん！ プラクテ・ビギナル・アールデスカット！（で、出来た！ 良かつたあー、調子に乗って試したけど、まだ10回に1回くらいしか出来ないのよね。）」

「わー！ 杖の先に火が出た！ すゞいぞ、アーニャ！」

とりあえず、アーニャの頭を撫でる。最近、なにか発見したり気づいたことがあつたら、アーニャを褒めることにしてる。

えーっと、昨日は杖貰つてなかつたから、今日でつけたのか、あれ？ ボクは4日ぐらい掛かつたんだけどな、アーニャって実はすごいのかな？

「えへへ、あとね。ママが今日は入学のお祝いをしてくれるらしいから、ネギも呼んできただって！ 今日はなんと！ 七面鳥があるのよ。」

「なん・・・だと・・・！？」

七面鳥ですと・・・あのよく海外のパーティーに出る、あの鳥なのか！ これはお呼ばれされなければなりません！ いきますよー！ アーニャ！

「じゃーーー主役を置いてくんじやなーーー！」

+++++

アーニャが杖を貰つてそれなりの時間が経ちました。

アーニャが魔法学校について早1年、アーニャがくつついでこない生活にも、もう慣れてスタンお爺さんから教わった、土柱結界（超劣化版ですけど）を何とか敷くことが出来ました。お爺さんは数

時間で出来るそうです（ボクは数ヶ月掛かりました。）

「これで何処から攻めてこられても即座に気づくことが出来ます。気づくだけですが、それで十分です。ボクは瞬動ができます（なぜならボクの前世の一人が郭海皇だから身体を動かすことにに関しては超一流です）」よつて、かなりの速さで駆けつけることが出来ます。

えーとここの、ちょっとボクが使える魔法や特技を確認しますね。スタンお爺さんからは補助系魔法を教えてもらいました

土柱結界（未完成）、魔法の射手・土の一矢、風の一矢（物理系なので強力！）、魔法の罠・土縄捕縛（「コレも物体があるから有効）、魔法の射手・戒めの風矢（直線的なので避けられそう）、風花・武装解除（撃つを裸になる夢の魔法！）、夢読み（寝てる人の記憶をみますよ）、風精召喚（分身の術）、吹け一陣の風（かなりの突風）、戦いの歌（身体強化ですね）、眠りの霧（睡眠薬・・・）、封魔の術（魔封波ですね）、風花風障壁^{バリア}（^{シールド}）、風楯です。

僕自身はこんなことが出来ます。

消力（シャオリー、完全に脱力することでダンプに撥ねられても無傷です。）

攻めのシャオリー（シャオリーを攻撃に廻すこと）で、すごい攻撃力に。）

瞬動（よくある移動能力、足から氣を出すことで一瞬で動くこと）が出来る。空中でもできますよ？）

こんなところですかね？じゃあ後は、悪魔襲来まで待つとしますようか

ネカネ・スプリングフィールド、従姉妹で魔法学校に通っていて月に一度帰ってきます）が帰ってくる日にならうかという時間帯、

少し遠目の山（村の様子が見える距離）に6人の魔法使いがやってきました。どうやら其処から動かないみたいで。行ってみますか。

・・・・・五人でした。どうやら一人大きな荷物と間違えたみたいですね。此方には気づいていません、どうやら完全な後衛の人みたいです。動きはテキパキとしていますが、戦闘者ではないです。にしてもいい表情ですね、憎しみと怨念を含んだ顔してたり、無表情だったり、笑ってたりしますね。

当身！×5、ふう、裸に剥いてやりましょう！・・・これは・・・ほほう・・・でかつ！・・・へー・・・なかなか・・・さて、魔法媒体とか魔道具やら奪つたところで庫のこの人達の記憶を読ませてもらいますか。

夢読み！

ううん、唯の傭兵か・・・こつちは？・・・お父さんに恨みがある人か・・・こっちも、恨まれてますねえお父さんは・・・この人はと・・・ん？殺すことが生きがいですか・・・おお、最後の人はメガロメセンブリアの工作員ですか。

なるほど目的は、ナギ一派の掃討、人質の確保、ネギ少年の精神誘導その1か、エグイですね。ん、どうしまじょうか？殺したら、後が面倒ですし、かといって相談する人も・・・・この大きな魔力は！

「お～～い！ここで何か無かったか？（このガキは誰だ？）」

おおっほう！ナギ＝スプリングフィールドですよ！

「ちよつとお父さん！助けて！」

「・・・ネギか？大きくなつたな！（やべー、氣づかなかつたぜ。）」

（ ）

「この怪しい人達どうしましよう？」

・・・汗を搔いてる、もしかして分からなかつたのかな？なんだか、頼りないな。

「なに！もしかしてこいつらが・・・げふんげふん、じゃあこいつらは俺が持つてくから・・・紐かなんかないか？（・・・口元がアリカに似てるな。）」

「魔法の罠・土縄捕縛×5！」んなんでどうでしょ？？あつ、強化しておきますね。ピピピッと、あとなんか皆に言つておくことはありますか？」

ボクが魔法を使ってすぐ驚いている様子、スタン爺さんの話では全然魔法を覚えなかつたらしいから、自分の子供の頃と比べてるのはかな？

「・・・なんかいう事か？うへ～ん（魔法使つてるし！俺が使えない魔法、使つてるし！アリカ・・・俺たちの子は立派に育つてるぞ！性格はどうちにも似てないがな！）」

「あつ、去年は近所のアーニャが魔法学校に入学したし、来年はネカネ姉さんが卒業しますよ。ノーギルお爺さんの柿も今年になつたし、スタンお爺さんも魔法論文で賞を貰いました！」

クリス爺さんも論文出せばいいのに・・・でも暮らしを助ける魔法が研究したいだけだからいいのかな？

「へえ、あの嬢ちゃんがな・・・ネギはもう入学してんのか？（しつかりしてるな。）」

「してませんよ？ 魔法は村のお爺さんやお婆さんで教わってます。学校は来年ですね。」

補助魔法を重点的に教えてもらつてますね。でもやつぱりクリス爺さんの変てこな魔法が一番習つのが好きですね。あー、ネギ君じやなかつたら、クリス爺さんの魔法だけでよかつたのに。

「未だなのか、あれ？ 学校？ なにか・・・思い出せそうだが・・・。（学校、金髪、ガキ、子供、ストーカー、幼女！）ああ！ 思い出した！ やつちました・・・どうしようか・・・（俺は表に出れないし・・・仲間も簡単には動けない・・・かといつてその辺の奴じや・・・そうだ！）なあ、ネギ頼みたいことがあるんだがいいか？」

「はい？ 何ですか。」

やつと思い出しましたか・・・そうボクが学校やら子供の話をしたのは全てエヴァンジョリンの呪いについて思い出してもらつたのです。

「日本に行くようなことがあつたら・・・この・・・どこにいたかな・・・ん・・・おお、これこれ！ コレを麻帆良学園にいるエヴァンジョリン？ つて奴にやつてくれ。これの使い方は、この杖にこの呪文を書いた紙をつけて、相手の身体に杖で触れる、そして《彼のものの罪を赦さん今地獄から解き放たれよ》って唱えるんだ、じやあ俺はいくから、後この杖はやる！ じやーな――！」

なにやら急いで帰つていきましたが、これでエヴァ解放フラグですね。

それにも呪いを解く方法が手に入るとは、まあいいか。これ

で彼女に対する手札が手に入ったということです。

もうこんな時間か、帰ろううつと。

クルミパンの味つても口様みたいだつて、どんな味でしょうね 改定（後書き）

2話更新！次回予告！

魔法先生ネギま！ 魔法学校入学！

アーニャの初恋！

馬鹿ネギ参上！の三本です。

改定しました。

今回は私のターンよー 改定

12月1日はモンハン3rdの発売日ですね。でも私のPSPはRAN機能が壊れていてソロプレイしか出来ないんです。だから新しい子を買うままでお預けですね・・・そういえばクック先生がでないのか、寂しいですね。さて3rdのゆつくり実況プレイが早くうつされるのを待ちながら、私はキーボード打ちますか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

メルディアナ魔法学校、講堂。構内はシンツとしている。聞こえるのはメルディアナの校長、ノーギルの挨拶が朗々と響いている。

「（校長つたら、話が長いのよねえ、ネギはつと。）」

アーニャが見回すと新入生の座っている所、その最前列に座っていた。

「（・・・田をつぶつて、もしかして寝てる？）」

ネギの頭がカクンつとなつて、今起きたようだ。その姿に多くの女性がキュンッとなつていた。勿論、アーニャも例に洩れず、ときめいていた。

「（うう・・・あの慌てて涎を拭う感じ、なぜかしら胸が熱くなるわ。）」

そしてまた校長の話が続くとまたネギの皿がとりさりとしてきていた。

「（・・・なにか様子が変ね・・・なにかあつたのかしら？）」

まだまだ、校長の話は続く、ネギのつとうとがアーニャに移ったかのようだ、アーニャも黙りこなしてしまった。

+++++

アーニャ2歳、今日は両親に連れられて村の祭りに参加した。この村には、子供が少なく、アーニャと同年代の子はネギしかいなかつた。

「スタンせん、ジーもこつもお世話になつてこます。」

「おお、『クロウトセニシヤニカ、オツー・ソツウのお嬢さんは娘さんか？』

「ええ、アンナヒニコモシヘ、モラターニヤー！」挨拶なさい。
「ほんにちはーあーにゅうでーこまかー！」

「元氣でここに来じやな・・・おー、ネギもこひに来なをー。」

村の顔役であるスタンが近くで本を読んでいた、小さな男の子に呼びかける。ネギと呼ばれた子はよたよたと覚束ない歩き方で此方にやってきた。

「何ですか？スタンお爺さん。（はあ、マジでネギ少年かあ）。どうしようかな、原作に係わりたくないな～。でも行かなきゃ駄目なんだろうな・・・はあ。（」

「やれやれ、この子はナギ達の子供でネギとこうじゅうじゅ、ネギも挨拶せい。」

「えーっと、ネギ＝スプリングフライードです。べつも宣しくお願いします。（誰？）」「

「宣しくね、ネギ君。いやー利発そうな子ですね。
「そうじゅるー！ナギと違つてこい子でな。ネギはアーニャちゃんと遊んでなさい。」

「わかったよ。」

ネギはスタンが座つている椅子の隣に本を置いて、近くに置いてあつた、食事が乗つた皿を持つてアーニャの元へ近づいていった。

「ボクはネギってこうんだ、確かアーニャちゃんだったよね？（うわー、かわいいなあ。）」

「ネギ？変な名前ね！アーニャでいいわ！」

「ははは、よく言われるよ。アーニャは元気だね。（トントンショーン高いな、でも子供じゅくして・・・癒される）」

一人でいろいろなテーブルをわたつて、食事を取りながら祭りの様子を見て周つていった。

「それでね！その料理が臭いのよ。」

「へー、そなんだ。・・・アーニャ、後ろ向いて歩いたら危ないよ。（クリスつて人、日本通だな。フナ寿司作るとは）」

「平氣平氣！まだ一回も転んだこと無いんだから、あ！」

後ろ向きで上を向いたアーニャが木の根っこに足を取られて、バランスを崩してしまひ。

「危ない！（フナ寿司か・・・この身体での臭い受け付けるかな？というか納豆すらあやしいな。）」

「キヤ！」

倒れそうになつたアーニャを助けようとネギが自分に引き寄せるも支え切れず倒れてしまひ。ネギの上にアーニャが倒れこみ、ネギの肺から空気が洩れる。

「うわー。」

「ちよつと、ネギ大丈夫！？」

「あいてて、大丈夫だよ。ふつ、ほら上を見てよ。（痛かつた・・・そんなにこつち見ないでくれよ。とりあえずイイ話だなーふうにしてみるか）」

「・・・一番星。」

「ふあ（いけないいけない、ちょっと寝ていたわ。懐かしい夢を見たわね、ネギと初めて逢った夜があ）」

+++ +

「ふあ（いけないいけない、ちょっと寝ていたわ。懐かしい夢を見たわね、ネギと初めて逢った夜があ）」

アーニャが夢の余韻に浸っているとどうやら校長の話も終わり、新入生代表のネギが挨拶をしていくところだった。その柔らかな笑みを携え、軽快な調子で言葉を発するネギは輝いて見えた。

+++ +

入学式が終わって、一日ほど経ちようやく、ネギの荷解きが終わつたようだ。ここメルティアアナ魔法学校では、親元を離れ寮生活をするのが一般的で、学校自体が余り大きくなく生徒数も少ない、その代わりかなりの実力者の先生が教えている。

「ネギー！ 入るわよー。（昨日は荷解きを手伝つた後、直ぐネギは勉強し始めたのよね。三日で学校の範囲を終わらせるつていつたけど、魔法歴史学、魔法倫理学、鍊金術、薬草学、基礎魔法学、数学に国語、社会に理科、家庭科とかもあるのに、たつた三日で覚えきれるのかしら？）」

部屋に入るとネギが机で突つ伏していた。机には各種教科書、紙束が散乱していた。どうやら勉強したまま寝てしまった。

「全くだらしないわねえ、ほらネギー起きなさい！（寝顔も可愛

いじやない・・・) 「

アーニャは机で寝ていたネギを揺すり、その後床にまで落ちていった教科書やらノート、プリントを拾い、部屋を片付けていった。

「うるさい・・・。」

「・・・(なにこの生物! 可愛いってモンじゃないわよ! 卑怯だわー)」

「あー! も? わーい! あー! もだ。」

起きてアーニャの存在を確認したネギはいきなり抱きついた。

「な、な、なあ! いきなり、何すんのよ! ちょっと離しなさい! 」

「はーい! 」

「(なんかネギが馬鹿っぽいわね) なんでそんなことになつてんの?」

「なにが?」

「何がつて・・・。」

アーニャが幾ら質問してもちゃんとした答えが返つてこない、まるで年下の子供の相手をしてくる気がした。なんとか話を聞きだしたことをまとめると。

「つまつねギは二日間頭が良くなるけどその後一ヶ月悪くなる魔

法を使ったのね？」

「うん、そーだよ？ ねえねえ、だっこして？」

「べ、別に構わないわよ。」

「わーい！あーいやだいすきー！」

「うう、鼻が、（入学式に居眠りしたのは寝不足だったからな
のね・・・でもあのネギがこんな事するなんて以外ね・・・あっネ
ギの匂いが。）

その後一ヶ月、アーニャの顔から笑みが消えることは無かった。

今回は私のターンよー 改定（後書き）

うーん、ラブコメ特有の甘酸っぱさが出せたかどつか・・・まあ、一度と萌えネギは無いと思います。

改定元アート話をぶち壊すネギの心のうちを追加

友達がモンハン3rdを買いました、そのプレイを横目で見たんですけど、すごくやりたくなりました。どうしようか、私のPSPは壊れてるんで新調しないと・・・でもそしたらエルシャダイが買えないし、ディスガイア4もやりたい！くそー、困りました。というか、3rdG・・・ホントに出ないんでしょうか？

II II II II II II II II II II

メルディアナ魔法学校、講堂にて。

「（現在、ボク、ネギ・スプリングフィールドは卒業式を迎えて
います。何故、こんなことを説明するのかといふと、校長の話が長
いんですよ。だから軽く今までのこと回想しておこうかな」と。（）

静かな講堂では、校長ノーギルの話と父兄の泣き声や、ネギに
対しての行かないで～という声がヒソカに聞こえていた。

「（ボクが馬鹿といつが幼くなつた後、いろいろありましたがま
とめねど。）」

「（いろんな先生やら大人の人に魔法について詳しく聞いたり、勉強については習熟済みなのですから飛ばして、生活やら戦闘の補助に役立つ物を中心に覚えてきました。）」

「（ずっと前にお父さん 蒸発していたナギ・スプリングフィールドから貰った、杖と札、実は物凄い物だったらしく、ドネット・マクネギスさんと調べたところ、この杖は世界樹の枝から作られたものでかなりの魔力を保有していて魔法媒体としてはかなり優秀らしいです。札の方は、回復やら補助に長けているクリスさんに聞いたんですけど、かなり複雑な回路をしており、殆どの呪いを解くことが出来るし熱く語っていました。どうやら物凄い術者が作ったようで、あのお父さんには作れないと満場一致で断言されました。）

講壇の隅からマクギネス女史が熱い目でネギを見つめている。彼女はある馬鹿ネギ（ファンクラブの人には、萌えネギの目覚めといわれている。）騒動でいたくネギを気に入り、そのままファンクラブを結成、会長としてネギを視か・・・見守っている。

「（次に淫獣ことオゴジヨ妖精、アルベール・カモミール君と出会ったんですが、彼は犯罪者なんですよね。なのでちゃんと罪を償つてから頑張つてもらおうと思って、身柄を引き渡しました。でも彼とは使い魔契約をしたので一日少しだけ、念話でお話しすることができます。真動物？になつて帰つてくれたら、アーニャに頼んで下着を融通してあげようと思います。盗みはいけませんよね？）」

校長のノーギルが熱く、生徒の今後の展望について語っている時、アーニャはネギの試験について考えていた。なぜなら、ネギはとっくに飛び級をしまくつてもう卒業している筈だからである。アーニャはロンドンで占い師をすることで去年終わつたが、ネギは日本で先生をする筈なのだが、先方の都合で延期されていた。そして今年、準備が終わつたようで今日が卒業式という運びになつたのだ。

「（タカミチ、高畠＝ト＝タカミチとは拳で殴りあつた友達で、最初はボクがフルボツにしてたんだけど、段々と強くなつて中々いい勝負できるようになった。やっぱり居合い拳に工夫とかしてあげたのが効いたのかな？）」

「（最後にアーニャのことだけど、いやーすごいね。あの子はスポンジみたいに教えたら、すぐ吸収するから七年の教育課程を4年で終わらせて、広範囲梵焼殲滅魔法である燃える天空を不完全でも使えるんだから、魔力さえ増えれば今でも使いこなせるみたいです。彼女は火の属性に対して天性の才能があるみたいでオリジナルの魔法も多数持つっています。魔法のコントロールもうピカイチですしね。）」

+++++

はい！麻帆良学院です。えつ？卒業式ですか、その後は校長室で卒業試験の説明をされて、そのまま此処に来ました。準備は2年前には終わつてるので、本来の来日より前、学校が冬休みで休みの時に来ました。どうしてかつて？教師をやるんですよ？授業の引継ぎをしないといけないので速めに来ようかと思いましてね。

「ネギ！早く行くわよ！」

冬休みであるため、学生の乗車率が低い電車から降り、アーニャがネギをせかす。

多分、ウホールズという田舎にいたから田に映るもの全てが珍しいのだろう。初めて切符を買ったアーニャがそれを失くさないよう握りしめたり、改札でうまく券が入らず、ガシャンとなつた時のアーニャの慌てようつときたら・・・癒される。

英雄の子供とかメガロメセンブリアの老害達とか完全なる世界とか、いつそのこと全てを捨てて日本でアーニャと暮らしたい。そんなことを顔に出さずに応える。

「はいはい、分かりましたよ。」

そうそう、アーニャですが、付いてきちゃいました。まあ、いいんですけど、たぶんボクの代わりに原作ポジション（図書館員とか）に着くんじゃないかと、ボクですか？平和主義者なんです。

あつ！あそこにはタカミチですね。ちょいびといいで、学園長のところに案内してもらいましょうか。

「・・・ねや？ネギじゃないか、予定より来るのが早いね？」

「！」んこちは、タカミチちゃん…」

「いつも、元気だね。アーニャちゃんは。」

「タカミチ、学園長のところに連れて行つてよ。」

タカミチ・・・しばらく見ないうちに老けたな・・・。

+++++

麻帆良学園都市、ここは世界でも有数の教育機関でありながら、その実態が外部に殆ど知られていない不思議な場所。此処は国家権力の力の及ばない、治外法権地である。

世界樹を中心とした都市設計、住民の多くが学生であり、各種学

校、研究機関が多数存在し、最先端の技術がそこら中に使われている。

図書館島を代表とする、情報の宝庫、コレを狙つて忍び込む物も多い。本来、世界樹の調査・研究のために西洋魔法使いが所有した土地で、（勿論、世界樹の重要性は日本の術者も知っていたが）その後、麻帆良は西洋魔法がアジアに対する重要な拠点として、要塞化された。

その女子中等学校、学園長室。ここに最高の魔法使いと最狂の吸血鬼が会していた。

魔法使いの名は近衛近右衛門（このえ・このえもん）裏でも有名な魔法の扱い手でその独自の魔法概念と卓越した技術は他の追随を許さない、世界でも五本の指に入るであろう魔法使いである。

吸血鬼の名はエヴァンジエリン・A・K・マクダウェル、600年の歳月を生きる歴戦の魔法使いであり、幼女。真祖の吸血鬼で元600万ドルの懸賞金を掛けられた極悪人であり、幼女。地方ではなまはげのように呼ばわりされており、幼女である。

「なんだジジイ、なんか用なのか。（もしかして吸血活動しているのがばれたか？それとも私のなみのりピカチュウが目的か？）」

「エヴァンジエリンには、少し頼まれ」としてもらおうと思つての。」

そういうて、窓の外を見る学園長。エヴァは不機嫌そうにソファーに座っている。そこでドアがノックされる。

ガチャヤ

「学園長室、お話ししたいことが……。」

おー、此処が学園長室か……え、なにアーニャ?・・・あの化け物?あれはね、ぬらりひょんといつて日本の固有の生き物なんだよ。

「高畠君がね、少し待ってくれるかの。ヒュウタに話しがあるんじや。」

あつちで、ソファーにどつきと座っているのはもしかして……ヒュアンジーリン?すうじこ可愛いな~・・・いてて、靴ふむの止めてよアーニャ。

「ジジイ、詰まらん事なら帰るぞ。(なんだ?ポケモンの交換か?)」

「待て待て、もう怠ぐではない。・・・のべ、ヒュウタ。最近、なにやら忙しそうじやないかの?」

「何のことだ?私は貴様の話を聞いてやるほど暇だぞ。(ぬ、ばれていののか・・・私がモンハンに嵌つて授業をサボタージュしているのが・・・。)」

「ふむ・・・一週間後、ネギ・スプリングフィールドが来る。」

学園長室が沈黙に包まれる。喉が詰まつやうな重い空氣の中、学園長は続ける。

「ヒュウタには彼と手合わせしてもういたい、エリザベスか?受

けてくれるかの。」

「・・・・・。」

「あのですね、学園長・・・・・」「だまつとれ、今ワシはHヴァと話しておる。」・・・・・。」

完全にぱくべりに気がついてないね。こんなシーン原作にあつたかな？学園長とHヴァンジョンの密談・・・・・あつてもおかしくはないか。

「どうこうつもりだ、試練だとこいつのか。（ホントになにを考えているんだか）」

「然り、彼の先行きの為の糧になつてほしい。」

「・・・・私にメリットが無いな、断らせて貰ひ。」

「受けでもらえれば、試練の内容はHヴァに任せよう、勿論邪魔はしないが、絶対に殺してはならぬ。」

「・・・・潰れてもいいのか？まだ、ガキなんだろう。」

「それまでの器だった、それだけじゃね。」

「いいだらうー受けでやる、口を出すなよー勿論、魔法先生の横槍も無しだ！」

Hヴァがニヤついた笑みを浮かべ、立ち上がり、学園長が後ろを振り返る。

「ほつまつほ、頼んじゃ……つほ？」

「あのですね、学園長。実はもう此処にネギはついていて、此処まで一緒に来たと伝えに来たんですが……。」

「宜しくお願ひします。ネギ・スプリングフィールドです。なんだか良く分からないですけど、戦うみたいなんでお手柔らかにお願いしたいです。」

「うわー、お人形さんみたいですね。絶対、シンデレキャラですね。友達になれるかな？」

「ふん！貴様がナギの息子か……手加減はせんぞ（顔はナギに似ているが性格は全然違つな）」

「あのサインもらえますか」

伝説の真祖のサイン、希少性抜群ですね……アーニャーそろそろ戻つてこーい

「な、なぜだ！（サインだと！？クソ！……初めてのサインか。練習しておけば良かつた、うつ緊張して手が震える。筆記体でいいかな？）」

「あ、此処にネギ君へつて書いてください！」

「う、うむ。……こつか？（ふう、何とかなった、家に帰つたら練習しておいつ。）」

学園長の目の前では、完全にネギのペースにはまり顔が上気しているエヴァと田を輝かせて喜んでいるネギ、その後ろで茫然自失し

ているアーニャがいた。

「彼がネギ君なのかね？といつか何処から聞いて・・・。」

「エヴァへの依頼なら最初から・・・。」

「な、なんてこつたい。」

学園長は頭を抱え、これからどうじょうか考えていた。

魔法先生は見たー学園長の企み（後書き）

またかのタイミングで来日、学園長は驚きますよね。次回も学園長室からお送りします。

改定したぞえ

先に生きると書いて先生、ボクは転生者だからセーフだね

ぬるp・・・いや、なんでもない。

いやー、遂にテストが終わって執筆再開ですよ！？そしてさうしてやつと私の中のネギ像が定まつてきました。なので改定改定・・・今回のテスト、高校生活で最悪の出来でした。初めて赤点をとるかもしれません。みなさんもしっかり備えましょうね。

ガツ

現在、ボクはエヴァンジエリンの機嫌を取りつつ、彼女の性格、癖、性癖、頭の回転などを見ている。先に断つておこう、ビビットでいるわけではないと

「マクダウルさんつてす」こ肌が綺麗なんですね。」「髪もキラキラと輝いて、黄金のようですね。」「その田、まるで南国の海のように碧く透き通りますね。」「

「貴様、私をたばかつているのか！」 「そ、そうかー」 「ふふふ、ナギの息子が私を・・・。」

といった感じで段々と態度が軟化していった。最初のサインで混

乱させて、煙に巻いてお帰り願おうとしたら、学園長がボクがいる理由を聞き始めて、彼女が正気に戻つたもんだから、さー大変。ものじつつい殺氣でアーニャが青褪めて、今にも倒れそうになつたから、こうやって機嫌を取らうとしてる。

「はあーはっはっはっはー…そ、うかそ、うか！ふふふつ貴様の名前はなんとこ？」「

「ネギです、これからお願ひしますよ。マクダウホールさん。」
よし、超上機嫌だ。

「ふんー。エヴァでいいぞ、なんなら様でもつけてみるか?」

「またまた」、冗談が上手いんだからエヴァ様は！」

はいけない。

「ふふふ、冗談だよ。ネギ、依頼されたからには手加減しないぞ？」

「それこそ冗談じゃないですよ。手加減されて」「ちがう」「ちやつたら、面白くないでしよう?」

「やる由にちは此方がおつて知らせる。せいで首を洗つて待つておくんだな！あつーはっはっはっはー…………！」

よし、何とかなった。わざわざおひるごはんが、学園祭に聞か
ないとな。じつくつとね。

+ + + + +

「（（：。））ガクガクブルブル」

「アーニャ～、よしよし大丈夫だよ。怖い人はいなくなつたからね・・・ボクは学園長と話があるから、タカミチと気分転換に遊びにいきなよ。」

まるで子猫のようになれるアーニャ、落ち着くまで抱きついていたいけど、先にこっちを済ませないとね。

「ネ、ネギ。僕は仕事があるから・・・。」

「タカミチ・・・久しぶりに遊ぼうか？」

「アーニャ君、行こうか。」

「（（：。））ガクガクブルブル」

+++++

ボクは近距離が最も得意とする、魔法戦士タイプだ。学園長はどんなに優れていようと中距離で力を發揮する魔法使い、つまり彼が何かをする前に首を飛ばすことができる。

「学園長、無闇に動くと死にますよ。」

魔力を乗せた衝撃波で学園長の顎鬚を刈る、勿論彼に当てず喉元で風を感じさせて霧散させる。

「むう、そんな怖い顔せんでも・・・。（いやはや、高畠先生からも聞いておつたが・・・）までの使い手か・・・ノーギルが二ヤニヤしていた筈よ。」

そのあと、極めて平和的に会話し、交渉した。ボクって平和主義者だからね。

「ボクは学園内のアパートで一人暮らし、アーニャは女子寮で寮生活。ボクは高畠先生の代わりにマホラ女子中学校で一年A組の臨時担任、担当教科は英語でA・B・C組を担当する。アーニャはボクと一緒に生徒として2年A組に飛び級留学生として編入する。給料は一般職員の70パーセント、但し手当を十分につける、夜の警備にはボクもアーニャも参加しない、これで宜しいですね、学園長。」

学園長と向かい合ひて口これまでの交渉で決まったことを確認する。

「ほつほつほ、いいじゃねつ。問題は無い、それでネギ君に相談があるのでじやが・・・。」

「なんですか？」

「どうじやるうつ・ワシの孫のこのかの婿に「それでは、失礼します。」「つれないのう。」

ネギが出て行つた学園長室、学園長は一人考える。

「（ネギ・スプリングフィールド・・・交渉中に一度も隙を見せなかつたの、彼は自分という物をしつかりと持つておる。MMの元老院らが何をしようとも搖るぎはせんじやろつ、となると彼の周りに注意すれば・・・恩も売れて此方に有益かの。）

+++++

ファミレスで喋っていた二人と合流して、今タカミチがどのくんを教えるのとか、ボクが担当する生徒について話し合ひ。

「タカミチはこの神楽坂アスナつて子のことばつて思つてるんだ？」

「アスナ君かい？ そうだな、守るべき人、妹みたいなものかな。あつエヴァのことだけど、きっと授業サボると思うけど、彼女にも事情があるから、一度話しておいたほうがいいよ。」

「ナギ関連だろ？」

エヴァの問題については先にかけた本人から頼まれているので知つていて。

「知つてゐのかい？」

「まあね、アーニャはさつきから生徒名簿を食い入るように見てるけど、気になる子でもいるのか？」

「この子・・・ネギに似てるような、そりでないような・・・。」

アーニャが見つめていたのは、超鈴音チャオ・リン・ジョン

「そりなのかい？（性格的には似てる部分もあるかな？）一人共優秀だしね。」

原作でネギ少年の子孫と自称していた女の子だな。・・・口調？ああ、ここはウェールズじやないから、言葉づかいに注意してくる人がいないからね。ローズさんはそこそこ厳しかったから。

あと少ししたらボクも教師か・・・まじまじに頑張りつつ

先に生きると書いて先生、ボクは転生者だからセーフだね（後書き）

私は今日も元気アマリリスです。よつばと新刊が出ましたね・・・
と一ちゃん×風香・・・どっちもいいキャラしてるんで構いません
が、あの作者さんでは明確にくつづくという表現をしなさそうです
よね。

次回、魔法先生ネギま！主人公は動かない！

教師初日、力カルーの導き

今回の作者の略名はお休みです。

学園長とエヴァに会つてから、数週間後、ボクは女子中等部の先生達に挨拶したり、タカミチから授業の引継ぎをしたり、ボクが臨時教師（表向きは教育実習生）としてマホラに来るのを反対していた新田先生を説得（何故か学園長ではなくボクが・・・。）し、学園長等、魔法先生たちの取り成しもあり、なんとかしたりした。

ボクの歓迎会では、いろんな先生達（大学部の教授や高等部のバツ1古典教師、黒人数学教師、ダンディ世界史教師など）と話してしたり、彼らの人となりを観さて・・・しつたり、酒に酔つた人たちを見て楽しみました。

ちなみに休み中に来たせいで、かなりボクの噂が広まつているらしく街中で「もしかして・・・。」や「うちのクラスに来ないかな～」などが聞こえます。

「ちよつと...ちよつとでいいがい。」

「すみませんが、事務所を通してから来て下さい。」

途中でパパラッチにストーキングされた

+++++

始業式がつつがなく終わり、ボクが教育実習生として2・Aを受け持つということが分かった時はすげことになつたらしいが、それは別の話し。

ボクは今、アーニャと源しづな先生（ボクの指導教員兼副担任ですよ）と一緒に2・Aの教室に来ています。そして僕らの視線の先には、教室の引き戸に挟まれた黒板消しに、隙間から見える連鎖トランプの紐がある。

「どうじょうつか？」

「どうなさるんですか、ネギ先生？」

そんな目で見られても引っかりませんよ。しづな先生……いや、あらあらじやなくて。

「引っかかつてきまつら皆喜ぶんじやないの？」
「ん、わかつて引っかかるのも嫌なんですよね。

よし決めた！

+++++

ぐふふ、はつやつくこないかなー！あの子供先生がひつかつて

慌てるのがはやくみないんだよ！

あつ！自己紹介が遅れたけど、ボクは鳴滝香^{ナルタキ・フウカ}だよ。あの黒板消しや他のトラップを仕掛けたのはボクと妹の史伽^{フミカ}なのさ！

仕掛けている途中でいいんちょ（雪広あやか、ショタロン）に止められそうになつたけど、アスナ（神楽坂アスナ、オジコン）とカズミ（朝倉和美、パパラッチ）がなんとか説得して、いいんちょはくねくねしていた。

「あつーーーーーせつかくのトラップがー！」
「あつーーーーーせつかくのトラップがー！」

「お、お姉ちゃん、大きい声で言つぱれちやうよ。。。。」

「お、お姉ちゃん、大きい声で言つぱれちやうよ。。。」
「お、お姉ちゃん、大きい声で言つぱれちやうのかな！？」

+++ +

決めた！作戦は特攻だ！

まず、ドアを開けて黒板けしが落ちきるまでに素早く中に侵入！

ドアに設置してある足を引っ掛け紐をジャンプで飛び越え！

上から落ちてくるバケツをスライディングでかわす！

そして最後に後ろから飛んできた吸盤付きの矢を避け、教壇に飛び乗る。

「あつ——！せつかくのトラップがー！」

「お、お姉ちゃん、大きい声で言うとばれちゃうよ……。」

おつと、犯人らしき声が聞こえたぞ。下手人は鳴滝姉妹か……。原作もこの二人だったかな？家に帰つたら、おさらいしどうかな。

教壇から降りつつ、恐る恐るびくびくと小動物チックに近づいてきた二人を視界に収める。

「犯人は貴方達ですね？」

うなづく一人、その二人にそつとあるものを装着させる。

「うえ?
風香には犬耳ダックスフンド

「あう？」

史伽には鼠耳シマリスを付けてあげました。

恐らくボクに起こられると思った二人は、突然の事に混乱している様子です。

「貴方達には授業中、コレをつけて貰います。次、何かやつたら尻尾をつけますよ。いいですね。」

ボクが席に帰るように手を振るとすゞすゞと戻つていく一人、さあやつとホームルームです。まあ、一時間目は英語に変えて頂いたので時間は気にしなくとも大丈夫ですが。

「皆さん、おはようございます。今日から皆さん、2・Aの担任を臨時で受け持つことになりました。ネギ・スプリングフィールド

です。若輩の身ですが、どうぞ宜しくお願ひします。」

「うやうやしくさまでやり取りを緊張感を持つて見ていた為、反応が遅れているみたいですね。

『可憐……』

「わっ！耳が、一気に皆が近づいてきました。ちなみに鳴滝姉妹や魔法生徒、超一味、ヒュアとかの半分ぐらいの生徒はこちらをじつと観察してきます。

「血丸ーーん！静かにしてくださいね。ほら、席に戻つて……。」
「ほん、ええ実は留学生が来てます。じゃあ、アーニャさんはいつて来て下さい。」

教室のドアを開けてアーニャが入つてくる、その顔はちょっと緊張していく・・・かわいい、しづね先生はトラップを片付けてくれている。ホントにすみません。

「あ、アンナ・ゴーリエウナ・ハロウカです！アーニャって呼んでトモコーよ、ヨロシクお願ひします！」

癒されるう・・・わて、また騒がしくなってきたので静かにしないといけませんね。

教師初日、カカルーの導き（後書き）

アーニャをアンナに変更しました。誤字修正（^_^） オイシイです。

教師初日、カオスティメンション

作者はパワーを溜めている。

ホームルームでボクとアーニャが適当に受け答えした後、チャイムが鳴り、そのまま一時間目に移った。

「それでは皆さん、お待ちかねの・・・・・・・・ 実力テス
トです！！」

『いえーい！って、ええーーーーーーーーーーーー』

皆さん、良いリアクションしますね。先生は嬉しいです。

「制限時間は35分、配り終わつたら始めてください・・・行き渡つたようなので、スタートです！」

ぐふふ、このリストは新田先生の監修の下で作られた一品。これで英語に関しての能力は駄々洩れですよ。まず初級者レベルが3割、中級者レベルが4割、上級者レベルが2割に残りが上級者レベルの英語標記の数学です。最後のはチャオさん用のお遊び要素みたいなモンです。

「分からぬのがあつたら、どんどん飛ばしてくださいね。最後の問題は、ホントに難しいですよー。」

「一二一〇」満面の笑みを浮かべて、皆がどれほど進んでいるか見て周る。バカレンジヤーとポストバカレンジヤーは難しい顔をして

問題に取り掛かっている。

しかし、エヴァはやらずに机に突っ伏しているので、発破を掛け
る意味合いをこめて、爆弾を落とす。

「ちなみに20位から最下位の人には、バッジゲームとしてさつき
の耳をつけて貰います。」

瞬時に起きて答案に取り掛かるエヴァ、その目には焦りが浮かん
でいるのが見える。流石に闇の福音と在りうものがあれを装着する
のはプライドが許さないらしい、他のメンバーも心なしかスピード
が増したように見える。

でも折角だからエヴァには猫耳（黒猫）を是非装着してもらいた
いなあ

+++++

「そこまでーー。はい、皆さんお疲れ様でした。チャイムまで休ん
でていいですよ。でも立つて歩くふんは構いませんが静かにお願い
しますよ。」

一気にだらける人やテストについて話している人、一ちらを睨む
人や楽しそうに見てくる人など様々だ。

「「ネギセンセー。」」

「おや、風香さんに史伽さんですかどうしたんですか？」
ケモノ耳が似合つてとてもキュートです。

「いやね。この耳いつまでつけてたらいいのかなって。」

「これはうつかりしてました。この授業が終わったら教壇の中の紙袋に入れて置いて下さい。ああでも気に入ったんなら、差し上げますよ?かわいくて似合つてましたから。」

「（か、かわいいって！？）・・・遠慮しておきます。」

「（ほ、褒められちゃいましたー）・・・やめて置きますう。」

「そうですか？残念ですね。」

ふむ、少し頬が紅潮しますね。さつきので嫌われてはいよいうで安心しました。

+++ +

その後、他のクラスの授業や授業の準備予習、昼休みは会議に当たれ空き時間に昼食をとる。時々やってくる生徒達の相手をしながら授業のプリントの案を考える。帰りのホームルームで掃除当番を確認し、教室の清掃を手伝つ。

あつとこう間に放課後になってしまった。今日は初めてにしては良かつたな、後は明日の準備かな?とかなり充実した一日を思い返しながら先のことを考えているとボクの元に2・Aの生徒がやってきた。

「おっ！ネギ先生みつけ！後で2・Aのクラスにおいでよ、ネギ先生の歓迎会するからさー！」

「ええ、分かりました。ちょっと待つてください、春田さん一緒に行きましょうか。」

一見、笑っているがこっちに對して一定の距離を置いて観察して

きている。桜咲さんやクーフェイさん、長瀬さん、龍宮さんはこちらを推し量ろうと少しだけ気配が洩れていたが、彼女らとは違つてもそういう気配を隠すのが上手い、まあ力 자체が弱いのもあるが、工作員としては一定の実力を示すことができる様になる・・・のかな？

なにか忘れてる気がするけど・・・なんだつたかな？

+++++

美空と同じようにネギを探して歓迎会に誘う任務を受けた人物が校外を探していた。オレンジの髪を鈴の付いたヘアバンドでツインテールにした気の強そうな女の子が機嫌悪そうに歩いていた。

まつたく、あのネギってガキどこのよ！・・・高畠先生、ホントに担任じゃなくなつちゃつた。確かに用に何回か出張してたし、最近は特に忙しそうだつたけど・・・それでも会えなくなつちゃつのは・・・。

それもコレもネギつてガキのせいね！私の恋路のお邪魔虫！あー、ホントにみつかんないわね。他の皆は見つけたのかな？

・・・あそこで大量の本を持つてるのは本屋ちゃん？なんであるな階段の端っこを降りてるのかな？危ないじやない、手伝わないと！

「本屋ちゃん！ちょっと待つて！」

本屋ちゃんがこつちを振り向こうとして・・・。

「ふえ？」

バランスを崩した！

『神楽坂アスナ』は咄嗟に助けようと今まさに落ちていく『宮崎のどか』の腕を掴み、のどかを庇うように抱き、階段から落ちていった。

+++++

アスナは身体に響く痛みと自分の名前を呼ぶ、悲壮な声で意識を覚醒させた。

「（あれ？ 私、どうしたんだろ・・・）つづ？！」

「！？ 神楽坂さん！ 大丈夫ですか！？ 動かないで下さい、頭を打つてるかも知れませんから！」

先に目が覚めたのどかは、自分の下敷きになつてているアスナを見て顔を青褪めさせて、必死に彼女の名前を呼んだ、混乱しているのにもかかわらず揺するなどの行動をしなかつたのは日頃の読書の賜物だろう。

なんとか自身の能力を頼りに現場を特定して急行したもののが、の目に入ったのは、ひたすら謝り、アスナに大丈夫かと聞いているという、生命の危機をすっかり忘れていたからだ。

ネギは急いでいた。本当にさつきまで、のどかが階段から落ちるのどかとそれを気にしないで相手の心配をするアスナであった。

「（・・・セーフー、どうやら無事みたいですね。念のために神楽坂さんの体調を見ると見せかけて治しておきましょつか）【シユブニ・グラ・シユマ・ゴラス 治^{クーラ}癒】」

ネギはアスナに近寄るを目を開けさせ、手を差し出し指が何本に見えるかとか体調についてそれっぽく聞きつつ、治癒を行つた。

ネギ自身は事故の瞬間を見ていないが、周りの状況を見てある程度の推測を立てた。

「（散乱している本、神楽坂さんの下にあるようですから、多分神楽坂さんが掴んだことによつて一瞬だけ落ちるのが遅れ先に落ちた本によつて衝撃を吸収されたのかな？でもこんなに軽傷なのは、神楽坂さんが単に頑丈だったからでしょうね。）」

正解だつた。その後、歓迎会にて楽しい時間を過ごし、生徒からさん付けは堅ぐるしいと注意され直したが丁寧な言葉遣いだけはネギの趣味半分肉体からの癖のようなものなので直さなかつた。

+++++

春日美空は部屋で今日のことを思い出していた。まず新しい先生と留学生のこと、一人共自分より魔力量が多く感じ才能があると感じたこと。

ネギは茶目つ気があり気が合いそうだと思います、アーニャは真面目だからかつたら楽しそうという印象を持った。

ネギの授業への姿勢は子供のものではなく、大人みたいにテキパ

キとしていたこと。そして彼の身体能力はかなり高いことに気がついた。アスナを治療する時の魔法の隠蔽の技術、殆ど分からなかつたが、彼が触れていくうちにアスナの顔色が良くなっていたからきつと魔法を使ったことに気がつけた。

「ことからネギの実力は高く、付き合いやすい性格をしているが英雄の息子なのは明白なので、なるべく自分が関係者とばれないように気をつけようと誓った。

「それでもアスナを見る本屋ちゃんの目は恋する乙女って感じだつたな。」

明日から楽しみなことが増えて wktk が止まらない美空だった。

教師初日、カオスティメンション（後書き）

なんとのどかのフラグを建てたのはアスナでした！ネギのどの人
は残念、アスのどですよ。作者がネギま！で好きなのはチャオとか
美空とかチャチャゼロです。いいたいことは分かりますね？多分こ
の3人は優先的に出番が貰えます。

どうでもいいのですが、水嶋ヒロ著のKAGEROUのアマゾ
ンでのレビューが面白すぎます。作者的にはヴェルタースオリジナ
ルの下りが凄いツボでした。

案外真面目に勤めてます。

【ミスティックステア】――――――



表情豊かな瞳 時々エロい、特徴的な語尾（～でシユノまシユ）、かわいらしい動作（触手ウネウネ）、不遇の性能やはりシユマゴラスは究極の萌えキャラであるといわざる得ない・・・。

そしてさつき友達が来て執筆中のコレを見られかけた、マジで危なかつたです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

マホラ女子中等部、2・Aの教室、3時間目英語の授業前の休み時間である。教室の中が緊張で包まれている。隣の人と話すもの、本を見ているがページが進まないもの、机に突っ伏しているもの様々だ。

【キーンコーンカーンコーン】

授業の開始を知らせるチャイムがなる。ゴクリと誰かが喉を鳴らした。教室にネギが入ってくる。早速、先日のテストの結果を発表するようだ。

「え〜、テストの結果を発表する前に皆さんにお知らせがあります。テストの成績が悪かった人に対するバッゲームの対象者は基本

的に三人、前回テスト中にいっただのは冗談です。それでは一位から発表します。取りに来て下さい。」

ネギの発した3人という言葉に多くの人が安堵し、バカレンジャーである五人、クーフェイ、長瀬、綾瀬、佐々木、神楽坂はもしかしてといつ希望が湧いてきた。

「チャオさん！凄いですね、満点ですよ。」

皆がやつぱりと思つた。

「あはは、ナカナカ面白い問題だつたヨ。ネギ先生。」

「次も楽しみにしてて下さいね、チャオさん、では2位の人です。」
ネギの発言を聞き、このバツゲーム付きのテストが今回限りではないことを悟つた2・Aメンバーであった。

+++++

テストの発表もいよいよ大詰め、途中普段は下の方にいた人物が浮上してしたり、記号問題で大量得点を貰つた人物も居た。

「さて残りは27位から31位ですね。では発表します、27位はユエさん！28位はアスナさん！29位はまき絵さん！30位はクーさん！31位が楓さんです。いやー、アスナさんは記号問題で得点を稼ぎましたね。まき絵さんと3点差ですよ。」

佐々木、クーフェイ、長瀬はテスト用紙と共にケモノ耳を渡された。

「えへへ、馬鹿でごめんね、ネギ先生。」

佐々木には白くてふわふわに垂れた耳のスタンダードプードルの耳。

「アイヤー、アスナに負けてしまったアルカー。クーフェイには黒くて丸っこいパンダ耳。

「日本語が出来れば十分でいいやるよ。」

長瀬には茶色くて先の丸まつたタヌキ耳が渡され、その後も普通に授業が行われた。

・・・少しばかしがつて貰わないと面白く有りませんねと思うネギだった。

+++++

ホレ薬騒動？大浴場で巨乳比べ騒動？そんなのアパートで暮らしているボクにはかんけいありませんよ。そうそう、この前のテストでアーニャは4位でした。流石にチャオさん、ハカセさん、アヤカさんを超えるのは難しかったようですね。

ボクが着任して8日ほど確かそろそろウルスラのドッジ部が喧嘩を売つてくるはずなんですが・・・なんで正確に分かるかつて？ほらボクの存在感が薄い能力で前世を振り返りましたから、のどかさんみたいに忘れてると大変なことになるかもしませんしね。

「ネギせんせえ～、ここが分かんないよ～。」

「ああ、分かりました。今行きますよ、まき絵さん・・・これは

b e 動詞 + 過去分詞なので受動態です。～されるといつ訳をするので、この場合は私は彼に驚かされたという訳になります。

今ボクは補習の人と勉強会をしています。やつていうところは女子寮のロビーに机を置かせてもらっています。あ、許可は貰つてしますよ（学園長に。）皆さん部活もありますし、夜道を歩かせるわけには行きませんからね。

「ネギ先生、ここがよく分からぬいでござるよ。」

「はいはい、楓さん・・・ってコレは数学じゃないですか！英語やつてくださいよ。コレはですね、ここに補助線を入れると分かりやすいですよ。」

楓さんが持っていたのは数学の教科書、どうやら明日出でられるらしい、でもだからといって答えをそのままいつても身に付かないのでヒントを『』えている。

「ネギ・・・先生、ここが分からないのよ！悪い！」

「ちよつと待つてくださいね。これは・・・order + 人 + t o動詞の原型なので、人に～するのを命じるとなります。あとは自分で考えて下さい。」

「た、高畠先生が私に・・・。」

おお悶えてる悶えてる、やっぱりこう反応がいい人ですよね。2 - Aの人は結構動じない人が多いんでからかいがいが無いんですね。ちなみに愛すべきバカレンジャーの皆さんに補習の勉強に使うプリントは個々に興味をそそるような感じにしています。

例えば、アスナさんにはタカミチを使った文にしたり、ユエさん

には哲学的にしたり、クーさん、楓さんは過去の武術家の話にしています。まき絵さんはボクについて書いています。なんでもまき絵さんはこんなにボクに好意的なんでしょうか？

あとは皆さんに単語の宿題を出してつと・・・それと授業ではこんな宿題を出しています。自分の日記を英語で簡単でいいから最低2行書かせてています。それで日記にコメントを返してあげるんですが・・・英語は三単位、週三回でも31人分ですから、かなり大変です。それにアヤカさんはすりつい張り切るんで2~3ページで書いてくるんで返すのが難しいですよ。

「それでは皆さん、今日もお疲れ様でした。また英語の授業がかった日に集まりましょうね。」

『バイバイ！ネギ先生！』

それから補習ですが、英語の小テスト（前の授業にやつたことを3~4問くらい）毎回やつてるんで、基本的にバカレンジャーだけが対象なのですが皆います。ええ、さすがにエヴァさんや長谷川さん、チャオさん、ハカセさんはいませんが、マナさんやさよさんまでいます。全員で28人（アーニャを足している）。・・・多くないですか？

案外真面目に勤めてます。（後書き）

次回は多分他視点です。誰にしようかな？選り取りみどりですか
らね。

カメラをーん、どこ行くんですかー

サムソンの利益 2011年度の予想決算く特許侵害による賠償金額
・・・大丈夫かサムソン？自業自得だけさ

昼休み、ネギが職員室で授業の準備をしているとそこへ、佐々木まき絵と和泉亜子が飛び込んできた。

「うわああ～んせんせー～～～～～」

「ネギ先生～～～～つ！」

「どうしたんですか？」

どうやらデジタル部イベントは今日みたいだ。でも高校生との揉め事はちょっと前からあつたみたいですね。

「こ、校内で暴力が…。」

「見てくださいこのキズっ！助けてネギ先生っ！」

どうやら擦り傷や肌が赤くなつた程度なので、一人に保健室に行くよう指示し、校庭に向かうことにする。

+++++

「それっ！女子高生アターック！」

「あつ！」

「うう、痛いよ。なんでこの人達はこんなに突つかかってくるんだろ？？」

「ふふふ、わかった？あんた達中等部なんて私達高等部に比べたら、おこちやまなのよお子ちゃま！」

・・・むむ、す、スタイルなら負けてないよ。多分・・・。

「Stop a quarrel right now! 『今すぐに喧嘩を止めなさい！』」

「うわっ！びっくりした。ネギ先生だ、あんな大声出せたんだ・・・。なんていつたんだろ？ちょっと怖かつたな。相手も驚いてる、特にネギ先生の迫力で三つあみの人は涙目だよ。

「その制服はウルスラの生徒ですね？このことはシャークティー先生に連絡させてもらいます。」

ネギ先生の脅しが効いたのか、リーダーっぽい人が顔を青褪めさせて帰つていきました。というかネギ先生、制服だけでどこかの生徒か判別できるの？

「アキラさん、大丈夫ですか？お怪我はありませんか？」

「大丈夫だよ、ネギ先生。」

一連の騒動で立ちすくんでた、私の心配をしてきた。・・・せつ
きまで頼りないとか思つて、ちょっと気まずいかも・・・。

「そうですか？具合が悪くなつたらスグに保健室に行つてくれださいね。それでは失礼します。」

「ああ、うん分かつたよ。」

今度なにがあつたら相談しに行こつかな？

+++++

職員室、もう昼休みが終わろうとしていた。受話器を片手に書類
をみているネギ、その後ろから半透明な少女が覗き込んでいた。

「ええ、そうなんですよ。やつぱりこの辺だけりをつけた方がいい
いと思いますよ？・・・はい、ありがとうございます。それでは後
ほど。」

ネギが良い笑顔で話しているのは横目で見ながら、半透明な少女、
白縛靈である《相坂さよ》が数日前のことと思い出していた。

+++++

それはいつもの様に放課後、教室でペン回しをしていた時のこと

だ。確かに最近は子供先生が赴任してきたりしてクラスに変化がつたが結局は自分に何も影響をもたらさなかった。

半ば期待したのだが、その分落胆が大きかった。生前の記憶も無く、自分が何をしたいのか誰なのかが今もっとも知りたいことの一つであった。まあ、自分の名前はずいぶん前に知ることが出来たのだが。

『（・・・暇ですねー、誰か話し相手が居ればいいんですけど・・・たまに見えても逃げられたり、追いかけられたりしますからなんでしょう？）』

さよが教室でボーッとペンを縦横無尽に廻していると廊下から歩き音が聞こえてきた。軽い足取りで近づいてくる靴のカツカツという音がなぜか無性にさよを焦らせた。

『（はわわわ、だ、誰でしょ？だ、大丈夫何も私は怒られるようなことはしないし、第一誰にも見えません。）』

さよは自分で思つたことに軽くショックを受けた。そして遂に教室の戸が開いた。

入ってきたのは最近話題の子供先生、ネギ・スプリングフィールドであった。

「・・・あついた。」

それだけいふとネギが真っ直ぐさよの所にやつてきた。

『（あれ？なんで目があつてるんだろ。）』

「てい。」

ネギがさよの額に手をやつてペチンとこう音がした。

『（なんで私にさわれ・・・あ、私の記憶が甦つてくる。私は相坂小夜、肺を患つて人生の殆どを病院で過ごして、最後には病室でひつそりと・・・最後に考えたことはナンだつたかな、両親への感謝？違う・・・周りに対しての恨み？違うそんなんじゃない・・私が欲しかったのは・・。）』

「さあ、相坂さん。記憶が戻つて混乱してるとも分かるんですけど、質問していいですか。」

『何ですか？（私が欲しかったのは何？）』
「なぜ成仏できないんですか？」

ネギの冷徹な目がさよを冷静にさせた。彼の優しさの欠片のない、その目が彼女の過去を思い出させた。昔、私の容態を見ていた医者の冷たい目、話すことが少なかつたけど、他の人、看護師たちの同情交じりの目に比べたら、ずっと良かつた。

私が終わる前日、少しだけその医者と話すことができた。私が俯いて泣いていると医者が、悲しいかと聞いてきた。私は、もつと皆と話しがしたかった、友達が欲しかつたと医者にいった。医者は、話しが長そうだから後でそつちに行くといつて看護師に呼ばれていった。

『・・・ネギ先生、私の話し相手になつてくれますか？』

「話しが長そうだから、仕事を手伝って下さい。」

ネギ先生が医者の顔に余りにもそつくりでの時、思わず笑つてしまつた。

+++++

前を見るとそこにネギ先生の顔がありました。いつもの人を安心させる笑顔、でも私はこの笑顔の裏に潜む悪い顔を知っています。だつてあの後、何で記憶を元に戻したか聞いたら、死人に能力が効くか試しただけで成仏したら後が楽だし、しなくてもたいして問題無いって切り捨てられましたよ。

「ちよさん、次の体育の時間は面白くなりそうですよ。」

残酷で優しい嘘吐きな先生、私の欲しいものは貰いました。毎日、忙しそうな先生。深夜、遅くまで何かを研究している先生。朝、早くから不思議な運動をしている先生。貴方の欲しいものは一体何なんですか？ネギ先生。

+++++

屋上に行くと昼休みに揉めていたという高校生が居た。アスナとアヤカが食つて掛かつていつた。私は隣にいる見習い魔法使いの美空を見ると目を逸らされた。

「（なんで田を逸らすのよー。）」

「（だつて絶対面倒事じやんー私、そりこいつのこらないからー。）

私から離れようとする美空の腕を掴み一撃打へ。

「（私にバレルーチことまほくにネギにはばれてるのよ。）

「（・・・マジ〜。）」

美空が口ロレタ人形のようにギギギッと振り向いた。そして嘘だと言つて欲しい目をしてきたが、首を振る、だつてネギだもん。天才中の天才と呼ばれてるのよ？私が校長に習つて必死に練習したのを見ただけで覚えちゃうのよ？やつてらんないわよ、まあ攻撃魔法はなぜか覚えないで魔法の理論や構成をひたすらやつてたけどね。

「（噂をすればネギと・・・誰？。）」

「（し、シスター・シャーケティー！？）」

ネギと屋上にやつてきた浅黒い肌のシスターを見て美空の頬が引あつた。どうやら知り合つてしまふ、彼女から隠れるよつて私の後ろへ周つた。

しかしそんな抵抗も虚しく美空は発見されて連行されていった。しょうがないからそそくさと壁際に寄つていぐ《長谷川千雨》からどうなつてゐるかを聞くことにした。

「（千雨、どうなつてんのコレ？。）」

「（こいつがくんじやねえよー。）」

千雨は手でシッシッと振るうが私が離れる様子を少しも見せないので諦めたようだ。私が2・Aで一番中がいいのは多分千雨だろう、だって千雨が秘密にしているネットアイドルという秘密を知つてしまつたからだ。別に私は悪くない部屋の壁が薄いのが悪いのだ、大体隣から、ちうですうキラッとか聞こえてくるのが問題なのだ。あんなのが聞こえたらそりや見に行つてしまつだろう。にんげんだもの、しょうがないよね？

「（ちつ、なんだかネギ先生が仕組んでたらしくてよ。高校生がこっちに来るみたいだから高校の方に連絡をとつて、2・A丁度良く屋上でやららしい情報流して誘導、で高校と中学の交流・レクリエーションだつてよ。）」

「（人数は同じ11人か・・・。）」

「（あーあ、ネギ先生露骨に勝ちにきたな。どうやつたか知らないうがクーフェイと長瀬、桜咲までがいやがる。）」

「（そんなに？）」

「（ああ、クーフェイは中国武術研究会の部長だし、長瀬は忍者以外の何者でもない、桜咲に至つては常に帯刀してゐるんだぞ？恐ろしいまでに武闘派じやねえか。）」

あ、チャイナダブルアタック？で一人ぶつ飛ばした。でもネギが見に行つたから大丈夫よね？・・・ドッジ部（笑）とか言われてるけど、身体強化した私でも出来ないわよ。本当に一般人なのかしら？

ホントに非常識な学校ね。でも悪くないわよ、毎日が刺激的だし、
ネギもいる。・・・千雨諦めなさい、貴方もかなり非常識よ？中学
生ハッカーって大概な存在よね。

カメラさん、どう行くんですかー（後書き）

ちょっとぴり垣間見たネギのワルっぽさ、ネギは自己中心的な子です。でも自分を大事にしません、どうせ転生するので・・・。三點リーダーって文字数も稼げて素敵ですよね。

これってPCで打つても携帯で見れるから携帯小説に分類されるんでしょうか？いつかオリジナル小説が書けるようにここで腕を磨きます。

「ううすると凄く感じるネギ先生

今年もクリスマスは中止らしいですね。リア充爆発しろボソツ。

マホラ女子寮、大浴場「涼風」、この温水プールのように広々と
大きなお風呂場でとある話しがされた。

え―――つ――最下位のクラスは解散――

「ホントなの、いのかー！」

「そうなんや。今日、ネギ先生の元におじ・・・学園長から手紙がきて、詳しく述べてわからへんけどな、なんでも次最下位を取つたクラスは解散になる上に、特に成績の悪かつたもんには、小学校からやり直しらしいえ？」

「ち、ちよつと待つでね——！」

「そんなの嘘よ―――！」

「そない言われても、うちかて今のクラス結構面白いしバラバラなんのは嫌やわー、何とかならへんの?アスナ。」

「でも本當になるので」
「ざるか？拙者たちは義務教育の身、流石

に学園長といえど國家権力には逆らえないでござれりや。」

「義務教育つてなにあるかー？」

「ふえは後で教えたるから、今はだまつといてな？楓あまいでのウチらのクラスにはネギ先生つていう明らかに不法就労者があるんやで？」

「・・・・。」

一気に現実味を帯びた問題に一同の顔が青褪めた。重い雰囲気を振り切るように、沈黙を破ったのは綾瀬だった。

「……」はやはり……あれを探すしかないかもです……。

「

+++++

綾瀬が提案したのは、図書館島・深部に存在するという、読めば頭の良くなる「魔法の本」を探し出すというものであった。余りにも怪しい話しだったが、もはや他に手段が想いつかない一同は藁をも掴む思いで食いついたのであった。

「水、冷た！」

「この裏手に私たち図書館探検部しか知らない秘密の裏口があるです。」

図書館島の裏側、湿地になつてゐる遺跡部分を抜け、わりと大き

な門の前についた。

『2・A図書館島探検隊バカレンジャー』

「『J』れが図書館島・・・初めて来たアル！」

「古、静かにするで『J』れるよ。拙者たちは内密にしたんで『J』れるう？」

「でも大丈夫かな、下の階は中学生部員立ち入り禁止で危険なトラップがあるらしいけど・・・。」

「私たちはそれでも止まっちゃいけないのよ。」

アスナがカツ「よく言つたるけど、理由は情けないことやで? あー、ウチも緊張してきたわ。」

見るからに重厚なドアが物々しい音を立てて開いていった。その音にビクッとしてしまった。

「『J』の図書館島は明治の中頃、学園創立と共に建設された 世界でも最大規模の巨大図書館です。」

「『J』には一度の大戦中戦火を避けるべく世界各地から様々な貴重書が集められました。」

「蔵書の増加に伴い地下に向かつて増改築が繰り返され 現在ではその全貌を知るものはいなくなってしまったと云われています。」

「しかし近頃の噂のマホラ七不思議に追加された、図書館島の謎の司書や図書館深部・楽園の噂、最深部に棲む龍の噂、今回の魔法書など情報が散乱し始めています。」

「限りなく怪しい話いや真実味の有るものまで、『J』に十数年ほど

で何十倍にも膨れ上がっています。」

「昔、マホラには世界中から武術家が集まる大会がありました。そして規模が縮小される前年、ナギ・スプリングフィールドなる人物が優勝しています。」

「繋がる時代とスプリングフィールド、まるでネギ先生を試すかのように時期を合わせて流れた今回の噂 図書館島・・・ここに何があるのでしょうか?」

図書館を進んでいる間、ゆえが語りだす、歴史に始まり、噂そしてネギ先生絡みの話。ゆえは何かを感じ取っているみたいだ。

「ゆえちゃん、何でそんなことまで知ってるの? (噂話が多いから朝倉みたい・・・。)」

「ネギ先生です。ネギ先生の完成した精神構造に疑問に思つたからです。10歳、しかし数え年なので9歳です。世に天才、奇才かずあれど、それは頭が優れているだけです。いうなれば 超人、そうネギ先生は超人です。・・・さてそろそろ見えてきましたよ。地下二階、私たちが中学生が入つていいのは、ここまでです。」

天井から地下深くまで埋め尽くされた膨大な量の本は数えるのを一瞬で諦めてしまうほどである。

「うあ～～～～ちよつと信じられない量ね。」

「ゲームのダンジョン見たいアルね。」

「あいあい、ミノタウルスとかが居そりでござる。」

「そりやねー、普通だつたら学校の図書室だけで十分やもん。」

「ふふふ、血が滾つてぐるデス。」

全員がうつらちゅうりする中、余りの光景に放心していたまき絵がなんとなく近場の本に手に取つた。カチヨツと何かが作動する音と。

「あ、まき絵さん、貴重書狙いの盗掘者を避けるために罠が沢山仕掛けありますので気をつけ下さい。」

遅すぎる綾瀬の警告をまき絵は聞いた。

+++++

ゴヒ殿の話を聞いて考えさせられたでござる。確かにネギ先生があそこまでスマーズに授業を行つていたり、人に接する時の態度は子供とは思えないでござる。

まき絵殿の無用心な行動、ゴヒ殿の遅い警告、トライップの作動音、考え事をしていた拙者は一瞬反応が遅れてしまった。

不味いと思つたとき、後ろから風が吹いて矢が逸れ、本棚に刺さつた。カツカツと最近聴き慣れた軽快な足音、「レはネギ先生でござる。先生が迫つてくる、ゆっくりとした足取りで近づいてくる。周りに混じるかのような特殊な気配、忍びである拙者が接近に気づかなかつたことに冷や汗が出る。

「おや、皆さんこんな夜更けにどうしたんですか？・・・もう少し時34分、とつぶて寮の帰宅時間を過ぎていますよ。」

「ネギ君ー怖かったよーー！」

「まき絵さん、ひやんと先生を付けて下せー。」

「ネギ先生・・・どうして口元にいるんですか。」

「それは此方が聞きたいんですけど・・・丁度ここので手伝って下せー。」

じゅやらネギ先生がここにいたのは、偶々だそうでござる。ネギ先生はいつも口元でテストやプリントの資料を集めたり、過去のテストやプリント、生徒のノートまであるらしく、授業が終わって暇があつたらここで探してゐみたいでござる。

その後、一時間ほど資料集めを手伝わされたでござる。この中で運動が苦手な人がいなくてよかったです。常に走り回って資料を探してるので、普段運動しているまき絵殿や口元がホームグラウンドについていろいろ口元殿とこのか殿もばせてているでござる。

それにしても、描画たちのためにこんなに頑張つてこるのは、描画たちときたら・・・皆も申し訳ない顔をしてこんでござる。

「なるほど読むだけで頭が良くなる魔法の本ですか・・・持つてますよ。」

「ホントー? 流石ネギ先生!」

「はー、コレですよ。」

そういうて皆に手渡されたのは教科書と参考書でござった。みんなのキラキラした目が一気に、ああやつぱりって目に変わったでござります。

「それから、あとコレが寮を抜け出してきたバツのプリントです。期末までにやつて置かないとケモノ耳+尻尾+ケモノビキニの刑ですから頑張つて下さい。」

ネギ先生が告げた無情な言葉に焦つた我々、プリントに必死に取り組み放課後の補習もしつかり受けたでござる。テストの結果でござるか? とりあえず全員赤点が無かつたのは初めてで殆どが60点ぐらい、英語は80点台と異様な点数が取れ、本当に自分達か疑つてしまつたでござる。

・・・流石に3徹は限界で・・・ござる。

毎年じつに凄く感じじるネギ先生（後書き）

毎年の異常気象に政治不安、これから日本はどうなるのでしょうか？

でもそんなことより小説読もつぜー！

じつやつて他視点で書くとネギが凄いこと、そして噂を流した学園長の思惑に乗らないネギ、凄く真実に近づくユエ、おばかなまき絵とクーフォイ、あと今後楓視点は無くなると思われます。なぜなら面倒だから、そして書いて楽しかったこのかは出番増えるかな？

次回からエヴァ篇、田舎せ全キャラ視点！

番外編 春休みの様子、へつぽこ剣士の場合

今回の話の視点主は桜咲刹那です。半デコやらサイドテールが特徴の侍ガール。お嬢様ラブな彼女の春休みです。

II II II II II II

早朝、朝靄で視界が遮られる中、私は認識障害の結界を掛け、夕凧を振るつ。剣先が乱れる。私の集中を邪魔するのはネギ・スプリングフィールドの存在である。

初めは噂で聞くくらい、次は私たちの担任となり、機敏な動きを目にした。しかし警戒に当たらぬ力量だと当たりをつけていた。だが長瀬から彼の尋常ではない力量を知らされてから彼をそれとなく観察してみると、

愕然とした。足運び、重心の動き、隙の無い佇まい、気配の操作、動きの一つ一つが威嚇と警戒を含んでいた。遠くから気配を断ち、様子を窺っていた私見て微笑んだ時は身体が震えてしまった。何故気づかなかつた！長瀬に言われるまで違和感さえ感じなかつた。それ程の差があつたのか？違う緩んでいた、元気なお嬢様を見て、こが安全だと思い込んでいた。

今一度、彼に問わねばならない、お嬢様に仇なすものかを。

春休み、普段忙しいネギ先生を私の私情で引き止めるのは周りに迷惑を掛けるし、お嬢様にも害が及んでしまう。だから長期休暇ま

で焦る私の心を押し殺し待つた。そして生徒の相談と称して、彼に問うこととした。

+++++

小会議室。

「それでどうしたんですか？休み中に聞きたいことがあるんだな

て。」

装飾の少ない、簡素な個室で私とネギ先生は向かい合っていた。人の良い笑顔を貼り付けて、その仮面の裏で私を観察している。こうして近くで見なければ分からなかつた、最初から疑つて掛からないとも出来なかつた。

「率直に聞きます。貴方はお嬢様、近衛このか様の敵ですか。」

「・・・何が言いたいのか図りかねますね。」

ネギ先生の目は冷たく、先ほどから毛ぼども変わらない表情が私の意図を正確に把握しているのがわかる。ならば正面から行こう、余計な小細工は無用だ。相手が格上であるうとにのちゃんのためなら・・・。

「答えて貰いましょう、貴方が敵で無い証拠を。」

「みよんなどとを言ひ、斬ればわかると。」

ネギ先生の声色は、瞬時に首筋に当たた夕凪の刃を恐れず変わら

ない。

「いいでしょう。ボクに勝てたらボクが知る限り、全てのことを話しましょう、その代わり。」

「その代わりに私が負けたとき、私を好きにして構いません。それで宜しいですか。」

「降りかかる火の粉は払わないといけないね。悪い子にはお仕置きだよ、【シユブニ・グラ シュマ・ゴラス 土柱結界・無限封鎖陣】」

ネギ先生が呟くと景観が変わる、白い空間がどこまでも続く世界に。先生は私から離れたところに立つており、歴然とした差を感じた。何度か西洋魔法使いと退治してきたが、先生と比べると素人も良い所、先生は無詠唱で指導キーと呪文すら聞き取れないほど急速で高度な術を開発したのだから。

「ここは元の場所の位相空間、だから幾ら暴れても大丈夫だし、この結界は認識阻害が組み込まれてる隠蔽もしつかりしてるから邪魔も入らない、まあ教育してあげましょう。」

「行きますー。」

身体と夕凪に鬪気を漲らせて、正面から切り込むーと見せかけて瞬動（足から氣を放出すること）で一時的に加速する）で背後から斬りかかる。

「まづは指一本ー。」

視界が回転する、胴体に衝撃が走り、ぶつ飛ばされる。空中でなんとか体勢を立て直し、着地する。

痛い、太刀を持つ右中指が反り返り折れている。折れた指を無理やり直すとネギ先生を見る。さっきのは、知っている、合気だ。

「次は足を貰ひや。」

私が攻めあぐねてこるとネギ先生が驚異的な速さで接近してきた。

「斬空旋！」

私の苦し紛れの牽制、見えないはずの飛ぶ斬撃が避けられる。

「百烈桜華斬！」

「【シユブニ・グラ シュマ・ゴラス 風塵の鎧】」

近づいてきた先生に自分の周りを円状に無数の斬撃を飛ばすも先生の周りの空氣の層に阻まれる。

完全に隙の出来た私の腕を先生は掴み、私の右足の膝に足の裏を押し付け躊躇無く破壊する。そのまま、後ろに投げられそうになり、虚空瞬動で叩きつけられそうになるのを避けつつ、距離を取る。

もはや移動もままならない、私は賭けに出ることにした。気を極限まで高め、

夕凪に氣を溜める」とで帶電させる。

「いいでしょう、受け立ちましょ。最後にその心を折ります。

」

先生の威圧感が増し、見る間に魔力が腕に集められてるのが確認できる。畏怖と同時に感謝した。今の私なら先ほどのように不意を突かれれば、敵わないだろうしかし先生は私の土俵で真っ向から打ち破るつもりなのだ。

先生が動き出す、先ほどより遅く滑らかな体重移動、全てを拳に全てをのせるかのようだ。先生が私の間合いに入る。

「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！！」

「羅刹拳」

私の全力の一撃が打ち破られた。視界を覆っていた紫電の閃きは先生の一撃で霧散し、衝撃波でぶつ飛ばされ、ひしゃげた腕を視界に納めると私の意識はそこで途切れた。

+++++

「んあ・・・。」

私が起きた時、私は保健室で寝かされ、隣りに先生が夕日の光で赤く染まっていた。

「ああ、起きたみたいですね。はい、これ宿題です。春休み中に全部やること、いいですね。ボクに負けたんだから次のテスト期待していいですよね？じゃあボクは夕飯の買い物があるので帰りますね。」

先生はそういうと大量のプリントを渡して足早に部屋から出て行つた。プリントを捲つてみると全ての教科の1～2年のまとめプリントでとても春休み中で終わる量ではなかつた。

「・・・困つたな。」

プリントの表紙には『バカレンジャー + ポストバカレンジャー用』と書かれていました。

春休み中、必死にプリントに取り組む私がいました。

実は大してなネギ先生

中二成分注入！くつ左手が・・・皆！画面から離れてみてくれっ
！クソ！力がつ！勝手に！

ボクがネギ少年になつて9年、
ボクはいつものように瞑想に耽る。

ボクの能力【凡百の遺志】は偶然発現したものだ。前世を追体験し過去・前世の己の経験と記憶を得る、もしくは他人の前世の記憶を溯らせる。大して凄い能力ではない、ただボクの記憶と経験が次のボクに受け継がれるだけだ。

ボクは才能があるわけではない、今だつてネギ少年の才をフルに使つことが出来ない、ただの凡人でしかない。

ぼくたちの人生は天才との戦いだつた。武道でも、学問でも、政治でもだ。僕たちは敗れてきた、ただ一つも勝利は無い。なぜなら僕たちに負けたものは眞の天才ではないからだ。そしてボクはまだ出会えていない眞の天才に・・・自分の届かない領域の存在に出会えていない。

ボクの能力【凡百の遺志】が発現したのは必然だ。ボクより前のボクが望んだこと・・・僕達の執念の賜物だからだ。これは天才を打ち破る為の呪い、だから探さなければならない、眞の天才を。

あるときのボクは中国で生まれた。鋼の身体を持ち、幾多の戦争を駆け抜けていった。自らの持つ剛の力では、真なる理合いに勝つことが出来なかつた。齡100を越えて理を手に入れた。そして真なる剛に出会い敗れ、たかだか20ほどの子供が自らの持つ技術に追いつき越した。ボクはあらゆる武を蒐集し、完全なる武への道半ば死に臥した。

そのときのボクにも肉親、家庭、守るべきものがあつた。だがボクは力の信望者で全てを切り捨てて力を欲した。力は偽者だつた、理を得るために力を捨てた。日に日に力を失つて往くのを感じ涙した。

真なる剛は暴力の申し子だつた。遠い昔、自分が切り捨てた肉体よりも強靭な肉体を持ち、自分が悠久の時を経て得た理も持ち合わせていた。羨望と憎しみが渦巻き、それすらも真なる剛には無力だつた。

何時のボクも破れてきた、そして勝つ日を夢見てきた。弱者が勝つ日を。

ボクにとって武術や魔法、知識は勝つための技術・道具でしかない、一生を費やしたものといつても拘ることはない。

死は恐ろしくない、それよりもこの怨念が無くなつてしまつまうのが恐ろしい。

「ボクは」「私は」「俺は」「ワシは」「あたしは」「己は」「
我は」

この身は非才のものなれど、ぼくたちは諦めない、幾多の己の屍を踏み締めて。

『勝つまで諦めない。』

+++++

アヤカさんに家庭訪問とか散歩部に案内されるイベントをカツト、大して変わらなかつたからね。このかさんのお見合いは彼女を連れて行つて学園長に直談判したけど、まあ別に気にすることはない。

「いれでどうですか？」

「45点、何が言いたいか全然分かんないかい。」

『それでネギ先生は何がしたいんですか？』

アーニャとさよにボクの秘密、転生者であることをばらした。なんとかつて？ わよとアーニャが実は裏で繫がつてたんだよ。まったく、わよ アーニャから学園長からの手紙はバレルは、噂を煽つてバカレンジャーの危機感を煽ろうとしてたり、ボクの寝顔まで撮られてたなんて・・・どうでもいいか。

「うーん、多分宿敵とはその内遭えると思つから、それまでゲームとか仕事とか魔法の研究かな？」

「まさかこじんなに年上とはね・・・ネギって結婚したりしてたの？」

「ボクはまだしていないけど、前世だとしてたねえ。」

これは嫉妬かな？かわいいけど、どうしようかな？ネギ少年の近くにいるだけで結構危険なんだよね。ん~、面倒だな。なんとかなる気がするからいいか？

『【凡百の遺志】ですか？なんか微妙ですね。幻想殺しどのほうが良くないですか？』

「これはこれで便利なんですよ？いつでも思い出せるから一回読むだけで十分だからね。」

わかつたないな~、幻想殺しは天才側の能力じゃないか。ボクの積み重ねがものをいうのが、凡人っぽくつていいんじゃないかな？

「・・・執念とか言つてた割りに、結構どうでもよさげじゃない？」

「いやいや、最重要事項ですよ？でもなんかボクの転生人生がほぼ無限っぽいから後回しでもいいかな？って思つてるだけだよ。」

『結局どうでもいいじゃないですか』

+++++

『3ね――――ん！――A組み――――ネギ先生！』

「はい、皆さん今年もワロシクお願いしますね。それでは出欠を取ります。」

原作どおりまき絵さんがいませんね。4月に外で寝てるとか、風邪を引かないといいですね。

「！」のあとは、身体測定がありますので急いで着替えて下さいね。では終わります。」

ネギが教室を出て職員室に向かおうとする前方から保険委員である《和泉亜子》が慌ててやつてきた。どうやらまき絵が見つかってようだ。

「せんせえ―――大変やーまき絵が―――！」

「亜子さん、廊下を走ってはいけませぬよ。」

『まき絵がび―――したつて―――。』

「眞ちゃんはしたないですよ。ほひ、まき絵さんのことはボクに任せ教室に戻つてください。」

うーーん、みんないい身体してるなあ、楓さんとか日本人のスタイルじゃないな。うん。

+++++

保健室のベットで気持ち良さそうに寝ているまき絵を見て、やっぱりバカは風ひかないのかな?と失礼なことを思つたりした。

首筋から微かに感覚が鋭いものに分かる程度の僅かな魔力の残照がある。どうやら原作剥離はしていないようだ。

「それでしづな先生、まき絵さんの容態はどうなんですか?」

「それが特に外傷もないのに、本当に外で寝てしまったのかも知

れませんね。桜通りで見つかったそうですよ。」

「そうなんですか、ありがとうございます。」

しづな先生のボクを見る目が妖しい・・・この人もショタコンなのか？歓迎会のときも彼氏（タカミチは狙ってるようだが。）はないようだつたし、気をつけたほうがいいな。こっちに巻き込んだら見捨てるしかないからね。

さてエヴァンジエリンは真なる暴力の持ち主か、ただの獲物か

実は大してなネギ先生（後書き）

前世未確認 + 前世確認済み（内郭海皇160年）+ 主人公が何回
か転生してるのでその分の経験値 + ネギの才能（・主人公が扱えない
い才能）＝今のネギ
なので大体ネギは戦闘力1000くらいで頭打ちですかね？まあ、
強者に対抗するための武術だからラディッシュくらいが丁度いいです。
ヤツテヤルデス

噂の吸血鬼は金髪幼女

最近は他の人の小説を読んで色々と無理ゲーな最初から地味に詰んでる話しが書きたくなつたんですが、見たい人がいれば考えてみたいと思います。例えば、恋姫無双で主人公献帝とか。

今回はアスナ のどか ??? 視点です。ばればれですけどね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

マホラ学園、桜通り、満月の光の下、夜桜が幻想的な情景を作り出していた。神楽坂アスナ、近衛このか、綾瀬ユエ、早乙女ハルナ、宮崎のどかが桜通りの近くの道を歩いていた。

「吸血鬼なんてホントに出るのかなー？」

「あんなの『デマ』に決まってるです。まだ春休みに流れた噂のネギ先生が何処かの王子様だったって奴のほうが信じられます。」

「だよねー。」

話しあは吸血鬼からネギ先生へ変わり、そして買い物をするものとそのまま帰るものとへ別れることになった。

「じゃあ先に帰つててね、のどかー。」

「はーー。」

集団からのどかだけが離れたいつたとき、アスナの脳裏に身体検査をしていた時のことが甦った。

『もー、吸血鬼の噂なんてでたらめに決まってるでしょ。そんなことよりも早く並びなさいよ。』

『ズバリ！吸血鬼の正体はチュパカブラやー。』

『そんなのが日本にいるわけ無いでしょ！大方、どじやの変態でしょ。』

『その通りだな神楽坂アスナ、噂の吸血鬼はお前のような若くでイキのいい元気な女を好んでいるらしい十分気をつけることだ・・・。』

いつも授業をサボったり、行事も殆ど参加しないマクダウェルさんがわざわざ警告してきたのだ。でも今までの被害者はまき絵を除いて大人しい女性を狙つたものだ。マクダウェルさんの言い様はまるで私を吸血鬼の樽から離れさせようという意図を感じる。

「このかー私、本屋ちゃんと一緒に帰るからー。」

「あ、アスナーー！」

思えば、ユエちゃんが図書館島で言っていたこと、ネギ先生が事件の基点になつてしているのでは？という話しだ。まき絵はうちのクラスだった。本屋ちゃんは今までの被害者と性格が似ている。嫌な予感がする。

+++++

「エ、ハルナ、このかさんそしてアスナさんと別れた私は一人で暗い夜道を歩いています。はあ、アスナさんと今日もあまり話せませんでした。話そうと思うんですけど、彼女の前に立つただけで上がつてしまつて上手く喋れないんですよね。・・・あ、桜の花びらが・・・。

「あ、といひことは桜通り・・・。」

「う、朝吸血鬼が出るらしい噂を聞いてから通らないでおこうと思つてたのに。か、風が強いですね。急いでいましょう。歌えれば気が紛れるかな?」

「！」、「こわくない〜〜〜 こわくないです〜〜〜絶対にこわくなんかないかも〜〜〜」

《ざわつ》、桜の木々が揺れる。普段は美しい桜が今日にかぎつて不気味に空恐ろしく感じる。《ザザザアツ》、大きくうねる音が生き物ようにのどかの心を圧迫する。

私が桜のざわめきに驚き周りを見回していると街灯の上に黒い影を見つけた。

「ひつ。」

「27番町崎のどかか・・・悪いが少しだけその血を分けでもうつよ。」

影は顔を歪めると「カヨコのマントがはためか」のビカヒ
襲い掛かる。

「ちよつとあんたー何してんのよー。」

「神楽坂アスナ？」

+++++

いい月だ・・・満月なら私も少しほは戦える。ふふふ、今日の獲物
は誰かな？

あれは同じクラスの宮崎か？まあいい、またぼーやに残す証拠に
なるからなー！アハハハ！完璧だ！

「27番宮崎のじかか・・・悪いが少しだけその血を分けてもら
うよ。」

ククク、怯えているのか？楽しいな、コレこそ私だ！コレこそダメ
ークエヴァンジエルだ！あんな生温い地獄のような場所ではいつか
狂ってしまうかも知れないからな。そのためには宮崎、血を貰うぞ。
何少しばかりチクッとするだけだからな。

「ちよつとあんたー何してんのよー。」

「神楽坂アスナ？」

なぜコイツが来るんだ？ぼーやなら分かるが、といつか貴様は脣
間齧しあるうがバカかこいつは？まあ・・・こいつの血も美味そ

うだからいいか。

「そんなテレフォンな飛び蹴りなんぞ【氷櫃】」

私の氷の櫃があのバカを弾きかえ・・・『バギギキン』なにい！？あぶな！」

「大丈夫！本屋ちゃん！まったくあんたあ・・・！」

なんなんだ？私の魔法の櫃が破られたというのか・・・しかしあつきの魔力反応はなんだ、直接触れていないのに破壊されたのか？

「マクダウエルさん！さつきのは一体！？って変態はマクダウエルさんだつたの！？」

「誰が変態だ！私は吸血鬼だ！ふんつ貴様の血も頂くぞ『魔法の射手・氷の十矢』。」

「本屋ちゃん！」

神楽坂の後ろの富崎に当たるよう調節し、打つ当たつても小石くらいなので痛いで済むだろう、アイツのバカ力は知っているからな。

『パシュ』魔法の射手はアスナに当たる前に溶けるように消えていた。

「あれ？痛くない・・・。」

「貴様はレスキルを保有しているのか」

間の抜けた声を出しあつて・・・しかしあのレアスキル、もしかして魔法を無効化しているのか？だが魔法物質まで分解するとなるとかなり強力だな。ぼーやが来たときのため、伏せていた茶々丸だが丁度いいな。神楽坂を捕獲してもらおうか。

「茶々丸、神楽坂を押さえろ。」

「分かりました、マスター。」

「絡繹さん！？くつ、離して！」

いきなり後ろから羽交い絞めにされて驚いているな。私は神楽坂に近づき、奴の首筋を出し噛み付こうとする。神楽坂も抵抗しようとするが、関節を極められているので無理に動くことが出来ない。

「さて頂こうか・・・ふう、まだ招待状は出していないぞ？ぼーや。」

「こんばんは、マクダウエルさん。いい月ですね、さぞかし血が騒ぐでしょう？どうします、私は構いませんよ。」

「ネ、ネギ先生！」

さつきまで目を瞑つて僅かに震えていた神楽坂が少しだけ戦意を取り戻してまたもがき始める。茶々丸が私に判断を仰ぐように見つめてくる。

「帰るぞ、茶々丸。」

「宜しこので~。」

「まだやるの早い、焦つてもここにひとあるまー、じゃあなば
一 も。せ

「はー、やよひなひ。」

ふん、精々首を洗つて待つておくことだな。次の停電の日が待ち
遠しいよ。

噂の吸血鬼は金髪幼女（後書き）

ちなみにですが、のどかは襲われた時点で氣を失っています。ギリギリ、アスナに助けられた記憶がありますがね。

つまりのどかフラグは立つてますよ、アスナは。

それとアヤカの話と散歩部の話はうちのネギだと上手く話しが作れないんでその内氣が向いたら加えますね。

次はアスナを説得して、対エヴァ用の作戦の複線を入れておきます。（話の展開を）誰か看破する人がいると思います。

黄金魚釣りは運ゲーそつ信じてやまない自分がいます

「いやありました。スゴク欲しいです・・・。笛があまりにも強化されていて笛吹きハンターとしてはちょっと強くしそぎのようになります。笛の微妙に使いにくさが良かつたんですけどね。

アスナ視点から始まりますよ。

II II II II II II II II II II

『いや助かつたらしい、多少まだ恐怖で膝が笑つてゐるけど立つことは出来た。ネギ先生は本屋ちゃんを背負つと私たちを寮に送つてくれるみたい。

「大丈夫ですか、アスナさん。」

「う、うんまだ足が震えるか?」
「……………」

普段なら私の口調を察めて来るんだけど、今はして来ない（どうやらこの少年に気を使われてるみたいだ。さっきのとは、勿論マクダウェルさんが吸血鬼だつたことだ。実際に私は襲われてるし（首を突っ込んだともいう）、聞いてもいいはず・・・だよね？

「マクダウホールさんのことですか？彼女はですね、真祖と呼ばれる不死の吸血鬼で600歳のおばあちゃんです。優しくしてあげて下さいね？」

「600歳！？・・・あんななのに？」

「ええ、ボクと同じくらいに見えますよね。」

正直、年のほうがびっくりしたわ。600年前ってことは室町くらい？・・・普通に話されたけど、そんなにあつさりいっていいの？

「そんなに意外そうに見ないでくださいよ。アスナさんは魔法を無効化するんで記憶を操作できませんし、説明しないと納得しませんでしょ？他に何か質問はありますか。」

「記憶の操作って・・・それは後で言いとして魔法の無効化ってなんなのよ？」

「読んで字の如く魔法を無効化するんですよ。僕たち魔法使いの力をね。」

魔法使いについて聞くと私が思っていたものとはかなりズレがあるみたい。まず魔法は秘匿されるべきもので洩らしたものはオコジョにされるらしく、そして知ってしまった人物は記憶を消されると止めされること。魔法を使って犯罪を犯すものがいて、それを処理するために表向きはNGO団体に所属している人がいること。

魔法は万能ではないこと、魔法には法則がありかなりややこしいこと。魔法には才能の個人差が大きく、また大体の魔法使いが凡人の域を出ず、稀に恐ろしいほどの才能の持ち主が生まれること。

「ネギはどうぐらい使えるのよ？」

「イージス艦ぐりこなら何とか落とせると想います。」

私がまっさか～と笑い飛ばそうとしたが表情がマジだった。魔法使いってそんなに強い存在だとは思わなかつた。大体、ドラクエの魔法使いのメラ程度かと思つたら、ゾーマ様クラスだつた。

「えっと、マクダウエルさんはどうぞくらべ？」

「ボクがぶちスライムだとしたら彼女は闇の衣付きのゾーマ様ですね。」

「それって最強つことじやない、なんでこんな所にいるのよ。」

「それはここが世界でも有数の魔法使いの拠点だからですよ。そろそろ着きますね、ではここでさよならです。また明日会いましょう。」

「ああ、うん。それにしても本屋ちゃん起きないわね。」

「クフフ、そうですね。」

なんかスッゴイ怪しい笑みを浮かべて去つていつた。絶対なんかしたわね。アイツの方がマクダウエル・・・エヴァちゃんより恐ろしく思えるわね。優しくしろか・・・エヴァちゃんの嫌そうな顔が目に浮かぶわね。

+++++

ネギ・スプリングフィールド、大戦の英雄ナギ・スプリングフィールドの息子で魔法学校を飛び級を重ねて主席卒業した天才、そして今年私たち2・Aの担任教師になり、特に問題を起こすことなく真面目に勤め非常に優秀な教師である。

チャオと比べても遜色ないほどの人物です。そんな彼と相対した夜、今まで未知であったものを知りました。マスターはそれを恐怖であるといいました。恐怖は極めて原始的な感情であり、非常に強烈な感性らしいです。どんなに優れた存在でも命を脅かされた時に絶対感じるらしいです。

私の場合は、彼の接近をマスターに伝え、彼と目が会った時、一時的に原因不明の思考機能停止が起き、それを見たマスターが彼の戦力を見ずに撤退しました。

なぜ私がこんなことを考へてゐるのかといふと・・・。

「ケケケ、オマエ馬鹿ダロ。」

「動けないくせに生意氣だねゼロは。」

「動ケタラ今スグ微塵ニシテヤルゼ、ケケ。」

マスターの看病を頼んだはずのネギ先生が姉さんと遊んでいるからです。一人がPSPというもので和気藹々としているのも、姉さんがネギ先生の膝に乗つてるのも構いませんがマスターがどうしてるのか聞かなければなりません。

「ランゴスタハ絶対二許サナイゼ。」

「マヒの間にひっかかったね。」

「ネギ先生、マスターはどうしたんですか。」

「エヴァならソファーで寝ながら黄金魚釣ってるよ。あ、それと風邪治つたぽいから。」

それは私が薬を置いにいく前にいつて欲しかったんですが・・・。

+++++

今日は日曜日、マクダウェルさんと向かい合つたのが先週の火曜日、どうやらアスナさんがマクダウェルさんに親しくしてくれて相手も戸惑っているみたいですね。襲つた相手から近づくだなんて、ふふっ！あの時のマクダウェルさんの顔は見ものでしたよ。

「意味はないけど効果はあつたみたいです。」

アスナさんは2・Aの中心人物ですから自然とクラスの面々に弄られてストレスが溜まっています。しかも昨日はマクダウェルさんのオタクにパパラッチやら早乙女さんやら多くの2・Aメンバーが訪れたようでかなり疲れてしまつたようで風邪を引いたらしいです。なんで知つてるかつて？今、彼女の枕元にいるからですよ。

「・・・・・・信仰、北、董色、冥王星・・・・さて起こしますか。」

寝苦しそうにうなされてるマクダウェルさんを優しく揺り起こす。

「うう、ネギだけは入れないでくれ……。」

「起きろ、マクダウエル」

「ぐへっ、何だ！ なにが起こった！」

「まったくネギの何処が駄目なんでしょうが。それよりも聞きたいことがあるんでした。」

「で何時やるのか、決まりましたかマクダウエルさん。」

「なんだボーヤか・・・クシュー！ そうだな一日後に学園のメンテで停電になるから・・・クシュー！ その時だな・・・クシュー、クシュー。」

「【大天使の息吹】」

「おお、長年の苦しみから解放されたぞ！」

くしゃみがウザイので治してしまいましたが、気にしなくていいでしょう。さて、マクダウエルさんの招待状の内容は、学園のメントの時間20時～24時、学園と外界を結ぶ橋で待つとのことでした。

「風邪も花粉症も昨日の疲れ、肩こり冷え性その他諸々全てが解消されてしまった・・・やっぱり治癒系の魔法も研究しておべきだったな。」

「ではボクはこの辺で。」

ボクの目的も達したので帰ろうとした所、マクダウルさんに服の袖を？まれる。機嫌の良さそうな彼女はどうやら暇ひとい。

黄金魚釣りは運ゲー。そう信じてやまない自分がいます（後書き）

うん、なんか駄目でした。何度も書き直してコレです。つ、次は
大丈夫ですよ・・・多分。
次回、幼女捕獲です。

チャイルドプレイ

そうそう、原作でこのかが手すりを上るシーンがありますがあれはこのかの履いてるのがエア・トレックシユーズだかららしいです。見つけて見たらいいですよ？ちなみに7話の登校の時です。

マホラの学校内、外部と隔絶されたコンピューターがあるところに一人の少女がいた。暗闇の中でPCに向かう機械的なフォルムをみせて いる少女と隣りで暇そうにして いる小柄な少女。

「どうだ?

『チキツチキチキ、キューインカタカタ』

「想定通りです。サウザンドマスターのかけた【登校地獄】の他にマスターの魔力を封じている結界があります。この結界は学園全体に張られており、大気中にある魔力を消費しています。主にマスターと世界樹の魔力で賄われています。他には認識誘導の暗示も含まれています。」

「ちつ！十年以上氣づかなかつたとはな・・・大体魔法使いが電氣を使うなんぞ・・・いや茶々丸も魔法と科学の結晶だつたか。茶々丸を創つたチャオには呆れるよ、しかしアイツがいなければこうして氣づくこともなかつただろうな。」

「・・・マスター、本当に先生と戦うのですか？」

「ああ、じじいからの依頼もあるしな。それに私もボーヤに興味がある。正面から来るにしろ搦め手で来るにしろ楽しめそうだ。何をしてくるんだろうな、トラップに誘い込んで私を無力化するか？茶々丸がいるから無意味だがな。」

「（ネギ先生が来た日、マスターは楽しそうでした。ですが姉さんまで楽しそうにしていたことが気がかりです。）マスター、先日から姉さんの姿が見えないんですが・・・」

「チャチャゼロなら別荘で戦いの準備をしていろが。」

「姉さんも出るんですか？」

「ただの子供じゃないからな、今夜が楽しみだよ。」

+++++

学園内のアパート、208号室、ネギの住んでいる部屋。学園のメンテで夜、停電が起るので寮から出ないよう厳重注意をした後、ネギとアーニャそしてアスナがネギの部屋にいた。ネギは魔法を知っているアスナが暴走しないように役割を与えて動きを抑制しようと、今夜の作戦を教えるために部屋に来もらつた。

「ボクがマクダウエルさんを対処するから、アーニャは茶々丸さんをお願い、アスナさんは寮から生徒が出ないよう見張つてね。」

「うん・・・でも本当にネギはエヴァちゃんを抑えられるの？強

いんでしょう。」

「ネギなら大丈夫よ。それよりウチのクラスの連中がでるかもしれないんだから、任せたわよ。」

「・・・魔法使いつてちびっ子しかいないの？」

「マクダウェルさんに聞かれたら怒られますよ。」

+++++

午後八時、年二回のメンテのために停電になつた。曇り空は普段より学園を暗くし、言いようもない不気味さをかもしだしていた。

「封印結界への電力停止、予備電力に切り替わりました。予備システムへハッキング開始・・・成功いたしました。全て順調、マスターの魔力がコレで戻ります。カウントします・・・321、気分は如何でしょうか。」

『うむ、すこぶるいいぞ。MAXとはいかんがかなり戻ってきた。後はボーヤをのして吸血するだけだ。』

「普通に頼めば受けでもらえるのでは？」

『封印に関してはボーヤにもう話してるし、勝ち負け関係なく呪いの解除に手伝ってくれるそうだ。だが勝つて吸つたほうが気分がいいんだ。』

「そうですか、それでは健闘をお祈りします。引き続き私は電力が戻らないように監視しております。それから姉さんも頑張ってください。」

『ケケ、ネギノ生首ヲモツテキテヤルゼ。』

「姉さん、それは事件ですよ。」

+++++

マホラと外界を結ぶ境界の橋、人工の光が失われ、雲から覗く空から月が顔を出していた。弱い月明かりの下に人影が3つ。

「おまえはノコロウア・・・ボーヤはどうした。」

「スグに分かるわよ。というか貴方のパートナーは茶々丸さんじやなかつたの。（大丈夫、大丈夫。マクダウェルさんはネギが何とかしてくれる、私は人形を抑えればいいだけ・・・。）」

「ケケ、ナカナカイイ目ヲシテルジャナイカ。抉リ取リタイゼ。」

「それはっ！」

少しイラついたエヴァンジェリンがアーニャに問い合わせようとしたところ、突然この場から消えてしまった。残った一人は顔色を変えず、見詰め合っていた。そろそろと凶器を出す、チャチャゼロと手にグローブを嵌めて手を握り感触を確かめるアーニャ。

「貴方は驚かないのね【魔法の射手・光の5矢】（ほつ、マクダ
ウェルさんが消えたわ、最初に会つてから苦手なのよね）
『ビシュシュ！』

「ケケ、見テタカラナ。」

アーニャが牽制の魔法を打ち込むが簡単に切り扱われてしまつ、
チャチャゼロの手に握られている大型のナイフが鈍く輝く。

「なんでマクダウェルさんに黙つてたの【フォルテス・ラ・ティ
ウス・リリス・リリオス風花武装解除】（何を見てたのかな？動け
なくなつたら聞くしかないわね）」

「ケケケ、面白ソウダッタカラダゼ。」

「貴方のマスターじゃないのかしら【フォルテス・ラ・ティウス
リリス・リリオス炎の鞭】（なんで広範囲の魔法を回避できるの
！？）」

アーニャの武装解除を動きの緩急で避けて、チャチャゼロが切り
込む！だが飛び込んできたチャチャゼロを火の鞭で打ち払うと距離
を取るアーニャ。

「イイ動キスルナ」

「【フォルテス・ラ・ティウス・リリス・リリオス火精召喚・剣
を執る戦友15柱・打ち棄てよ】（予想以上に強い、あんまり貯め
がいるのは打てないわね）」

「ケケケケ、ジャマダゼ！ナンデ逃ゲルンダ？」

「別に時間さえ稼げばネギが何とかするでしょ。それに貴方はマクダウェルさんからの魔力がないと動けないしね【フォルテス・ラ・ティウス・リリス・リリオス 火球の連弾・9門】（動きが速過ぎ！接近戦じゃ勝ち目が無い！）」

一定の距離を保ち逃げていくアーニャ。そのアーニャが退きながら出した火の精霊の分身を切り伏せながら追いかけるチャチャゼロ、分身は時間を僅かに稼ぎ距離を詰ませない。それでも変わらず追いかけるチャチャゼロに向けて放たれた9発の火の玉、大きさはチャチャゼロよりも大きい。

『キイイイン！』

『パツパパン！』

「少シハ真面目ニナツタカ？」

チャチャゼロがナイフを一振りすると不可視の剣撃が火球を切り裂き破裂させ、咄嗟にアーニャが張ったシールドも貫通して首のスグ真横を切り裂いた。

「・・・今のは一体何（うつそ・・・中距離、飛び道具も持つてるなんて）」

「ケケケ、剣閃ツティウンダゼ。オラ！モット楽シマセロー！」

『キン！』

「タカミチの居合い拳くらいね【フォルテス・ラ・ティウス・リリス・リリオス 爆爆】（ちょっ、タカミチより速い！）『ドオオオ――ン！』

チャチャゼロの無数の剣撃は、アーニャの手前で爆発した衝撃波でそらされた。

「ケケ、甘エゼー！」

いつの間にかアーニャの後ろに回りこんでいたチャチャゼロが慈悲な一撃を下そうとしたところ《スカツ》っと外してそのまま落ちていき《ポテツ》という音がした。

「……」「御主人。ソリヤナイゼ、モウ少シ粘ツテクレヨ。」

「どうやら形勢逆転みたいね！さあ、ネギが何をしたかキリキリ白状してもらおうかしら！（ひつ――！危なかつた！最後、完全に反応しきれてなかつた！）」

終始、冷静に対処しているように見えたアーニャは内心ビビッていた。

チャイルドプレイ（後書き）

ザ・難産、実はアーニャの戦闘力は2000くらいあります。だつて燃える天空をぶつ放せるし、たぶんその辺のオリ主くんぐらい捻じ伏せるかも・・・このアーニャのテーマは弾幕はパワーだぜ！ですのでいたしかたないかと。

余談ですが原作よりタカミチが強いです。活躍できるかは私の腕次第ですがね。

化けの皮が剥がれ始めた今日この頃

今年もガキつかの笑つてはいけないシリーズを見ます。その前に今は人気力士が大集合SPを見てますがシリエットでわかる里田まいはすごいな、なんでわかるんだ?

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

灯りの無い、真っ暗な部屋。静かな部屋にネギが立っていた。その手にはカードが握られ、部屋の床に捕縛用の魔方陣が描かれていた。

「召喚! エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル!」

「つーなんだ!」

部屋に一筋の光が発生する。悲鳴と共に現れたのは扇情的な下着のようだ、露出の多いHロイ服装をした少女だった。

「むつー! ボーヤかって、なんで貴様が私を召喚できるんだ!」

飛び掛ってきたエヴァンジェリンを華麗に避けて、少し離れるネギ。その手にあるカードを見てエヴァンジェリンが答えに迫り着く。

「お、おい・・・その手にあるのは契約のカードかー! といつ」と

は貴様、私と仮契約を結んだのか！」

明らかに動搖したエヴァンジェリンがネギを見る。

「シユブニ・グラ シュマ・ゴラス【風花・武装解除】【かの者の力を奪い捉えよ・土柱封印】【残酷なる海に囚われしものよ 忌まわしく恐ろしい旧きものよ 大いなる水の牢獄をつくれ ルルイ工の館】！」

「のはー服がっー魔力がっー身動きもー！」

何氣に魔法きわどいデザインの服を着ていたため、下着をぶつ飛ばされ、光る魔方陣が動きを阻害し、首に毒々しい水の首輪をされ、捕まってしまったエヴァンジェリン、一気にピンチになり涙目であった。

+++++

エヴァンジェリンはかなり焦っていた。飛行用のマントやリマントにつけていた魔法媒体や下着をぶつ飛ばされ、幾何学的な魔方陣が檻となり、極めつけは首にされた禍々しい液体は魔力が空になるまで吸い続けて、詰んでしまっていたからである。

「な、なあ、ボーヤ。どうやって仮契約をしたんだ？」

「昔にオゾジョ妖精だとーといふことは」

「お、オゾジョ妖精だとーといふことは」

オコジヨ妖精・・・それは何時の頃からか人間の傍にいて、知らぬ間に人ととの契約を取り持つようになつた謎の多い妖精、オコジヨの刑と如何なる関係があるのだろうか。

オコジヨ妖精・・・最近の奴らの行動は目に余るものが多い、人の利権を狙つたり、強引なやり方で契約を勝ち取るやり方は強欲、一説によると男女の誓いのようにしたの彼らだといつ・・・。

「マウストウーマウス」

「やっぱりかつーーーというかつ、 いつだー答えるーーー」

「エヴァーが風邪で寝てたとき」

「あのときか！そろいえぱっ、貴様がいることに疑問があつたが花粉症が治つてどうでも良くなつてたが・・・私の・・・ファーストキスが・・・。」

あまりの出来事に膝を抱えて横たわるエヴァジエリン

「じゃあ、メンテが終わるまでゲームでもどうですか？」

「やる・・・ちくせつ、油断してた・・・ここまで用意周到だつたとは。」

「パニボンでいいですか？」

「やだ、だつてそれ運ゲージじゃないか・・・ホントに昔から私は運が悪くて、せめてぶよぶよにしないか？」

椅子に座つてテレビゲームにいそしむ一人《お茶　お主　茶の

湯の心 分かっるとるか？ なにに 分からぬとな これでも食らえ これでも喰らえ これでも食ひや ばたんきゅ～～》・・・ 方的にやられるエヴァンジエリンとニヤニヤと笑つて居るネギ。

「なあ。」

「ふふふ、なんですか」

「ほ、他のゲームをしないか？ほらもう飽きてきただらつ」

「しょうがないですね。」

その後のゲームもボッコボコにされてしまつかり不貞腐れてしまつた。エヴァンジエリンは近くにあつた漫画を手に取る。

・・・ここでエヴァンジエリンが違和感に気がつく。

「おい、なんで電氣がついてるんだ。メンテのはずだろ？」「

「学園長に頼んどきました。それでエバーはこれからどうするんですか？ボクに負けちゃったし」

「クソッ、ジジイめ、手を出さないことにあきながらこれか・・・ そつだなジジイの後頭部でもすつきつわせてくれるかな、あと某作戦部長みたいな言い方は止めろ」

すっかりヤル気のなくなつたエヴァンジエリンの封印をとき、ある提案をするためにみをのりだすネギ

「近いぞボーヤ、オマエもジジイの頭がどうなつてゐるのか気になるのか？」

「多分空っぽだと思いますよ。もしエヴァさんの呪いをボクが解くことが出来たら・・・何かれますか？」

「そうだな・・・私の処女でもなんでもくれてやるわ・・・60年とかヴィンテージつてレベルじゃないぞ、最早化石だろ・・・。」

自分で言つててスゴイ勢いで傷ついていたエヴァンジエリン、光の無い眼はとても背中をあわだたせるような威圧感を持っていた。そのままほつておいたら空鍋をしそうな勢いだつたので、ネギはサツサと呪いを解くこととした。

洗濯物をかける棒となつていた、ナギからの形見？を取り出し、財布の中に入れていた呪符を杖の先端につけ、その先端をエヴァンジエリンに押し付けて呪文を唱える。

「【彼のものの罪を赦さん今地獄から解き放たれよ】」

『パキンシ』

ガラスが罅割れた音と一緒にかつてのエヴァンジエリンの魔力が戻ってきた。

「おお、おおおおお・・・あれ？おい、少ししか戻つてないぞー！」

「だつて登校地獄とエヴァさんの魔力を抑えてるのは別物でしょ？今戻つてきたのは登校地獄を維持するのに使われていた分ですよ。」

「うん？・・・そつかつ、マホラから出る」とが出来るのか！」

「

最初はぬか喜びかと思ったエヴァンジエリンだが、ただ単にマホラから出れば魔力が戻ることに気がついてテンショングうなぎのぼりになつて、結局ネギの話を聞かず茶々丸にこの喜びを伝えるために夜の学校へ飛び出していった。

「・・・クフフ、まるで子供ですね。（やはり彼女も真の敵ではなかつたようですね。彼女は一度心を許した人には例え裏切られても憎んでも復讐をしないんですね。史上最悪の吸血鬼は天性の悪ではなく、偽悪でしたか・・・。）

にたりと不気味な笑いをした少年は静かに先をみていた。

化けの皮が剥がれ始めた今日この頃（後書き）

オコジョ 妖精ってナンなんですかね？ 実際、カモがナギつて噂が
流れた時があつたんですけど、ちょっとマジか！って思いましたよ。
結局、デマでしたけど。

そういう、アンケートしていいですか。この話しきを何処で終わら
せるかなんですけど

? 本編準拠で魔法世界まで行く

? マホラから出ないでグダグダ暮らしていく

? オリジナル展開突入

が候補なんですよ。?は原作が完結するまでこの話しきが続きます。

?は結構早めに最終回になるんで、次回どんな原作の一次がみた

いか書いて下さいね。

?はホントに自分でもどうなるか分からいんで、クソ展開にな
つても知りませんよ。

あと他にこんな終わりがいいんじゃないかつて人がいたら？つて
書いてくださいね

では期待して待つてます！アンケートはこの作品が修学旅行編に
入るまでです。それではさよなら。

油断していると酷い目に遭います、例えば事故とか

大晦日に発覚した（私的）大事件はウチのP S 2が壊れたこと、作者です。笑点風にやりましたが・・・ええ壊れました。小説の息抜きにゲームでもといそと起動したらディスクを読み込んでくれなくて・・・結構ゲーム詰んでたのにふざけんな！とこの話しき打ち始めましたよ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

1対4・・・おわかりいただけただろうか？この数字はこの室内の男女比である。

エヴァンジエリンの家、リビングに人が5人（+人形）一人は天井から吊るされ顔を歪めて苦しんでいる。三人はテレビを眺め、時折吊るされている人を見て笑っている。一人は静かに三人の傍に立つているがオロオロとどうしたらいいか戸惑っている。

『うわーいつ、あーにやだ！ね、ね、あそぼうよー』

「ネギ・・・あんたこんな趣味があつたなんて・・・。」

「んなわけあるかつ！大体なんでそんなものがあるんだよー。」

「ああ、萌えネギ研究会つてのがメルディアナにあつてそこで無料支給されてるわよ。」

「うふふ、ボーヤが・・・くく、腹が捩れるわっ」

「なん・・・だと!?」

吊られた男はびょんびょんしていたが、衝撃の事実を聞かされ絶望的な表情をしてきた。そしてブツブツと心当たりのあることを呟いていた。見事なレイプ目であった。ネギをほおって置いて三人は雑談を始め、アーニャは萌えネギ騒動の全容を語り、アスナが朝倉から聞いたネギについての噂を話す、それらを統合してエヴァがネギの正確を丸裸に、赤裸々に暴露していった。

「ちなみにマホラにも萌えネギ研究会の支部があるから、もう諦めたほうがいいわよ。あと女性魔法先生が中心になつて所属しているし、源先生にいたつてはドネットさんと親しいらしいわよ。」

「うぬぬ、しづね先生が歓迎会で俺の頭をいきなり撫でたのはそういうことなかつ、シャークティ先生が妙に宗教について語つたのはそのせいかつ」

「あ、マホラでの活動も記録されてるのね。」

「ひーーっ、買い物の材料で晩御飯の考察までされてるじゃないか、私を笑い殺しにするつもりか!」《バンバンっ》

「いっそ殺してくれっ――!」

ネギの恥ずかしくない筈なのに、恥ずかしくなる生活はその後も長く続いた。

+++++

またねー、と帰つていったアーニャとアスナを見送つて、すつかりいじけてしまつたネギの前にエヴァが座り込んだ。茶々丸は夕飯の準備をしているのでリビングにいないし、チャチャゼロはさつきまでネギの活躍やら醜態やら普段の生活が流れていたテレビでゲームをしている。

・・・大丈夫か？ネギのやつ、一時期の私より虫の息だぞ。といふか私でさえここまで精神攻めは始めてみるぞ。アーニャのやつめ、ネギが私と仮契約をしたからつて、ここまでやることはないだろうに、アスナもアスナだ。鋭く尖つたナイフのような切れ味のコメントをしあつて、その度にネギがびくんびくんなつてたじやないか。

「なあ、ネギよ。そう落ち込むな、こりくなつてはしようがないから開き直つたほうがいいぞ？今日はウチで晩御飯を食つていけ、茶々丸がお前を励まそうと頑張つてるからな。」

弱りきつたネギを見てちょっと心配になつて声をかけるエヴァ。

「そ、そりだ！ほら、昨日いつてたじやないかつ、私の呪いを解いたら何でもしてやるつてこいつやつつ、なにか言つてみるー何でもいいぞ～」

「そうですね、何がいいですかね。」

ふう、なんとか持ち直したようだな。しかし勢いでいつたしまつ

たものの、ホントに私の
身体を求めてきたらどうしたらよいのだつ

「じゃあ」

《アヘン》

「チャチャゼロ下さー」

《ズシャーーーーー》

求められなくて助かつたのか、自分の従者に負けて悔しいのか。
微妙なところだな・・・。

「なんでチャチャゼロなんだ?」

やはりネギもこんな幼児体系じや駄目なんだろうか。

「なんかあの無機質な目が爬虫類みたいでかわいいじゃないですか、それにあの憎まれ口も愛嬌があつていいと思いません?」

それははどうなんだ?なんか独身の〇しみたいなんだが、大体アイツといつもいふと気がめいるぞ。いつも刃物やら殺し合いの話しあかしないが・・・いや、最近はゲームの話しかして来ない気がするな。キリングドールとしてアイツはもう駄目かもしけんな。

+++++

一家団欒、これはそういうついでないのではないでしょうか。マスターがいて、ネギ先生がいて、姉さんがいて、私がいる。私が来た当初はマスターはとても荒れていて、今は比べ物にならないほどに家が散らかっていました。

初めて私がマスターの笑顔を見たのは、私がマスターの食事を作ったときです。私はガイノイドですので味見が出来ませんし、料理本やデータでは一人分を美味しいく作るにはかなりの時間が掛かりました。

初めて上手く作れたときのマスターの微笑みは私のデスクトップになっています。ですので食事というのはどうでも大事なものだと思います。

「茶々丸さんも食べなよ、この鍋美味しいよ。」

「ありがとうございます、しかし私はガイノイドですので食事は不要です。」

「茶々丸も食べるといい、フェイクでも雰囲気を味わうのはお前の成長にいいかもしだれんからな。」

今まではマスターの後ろから眺めていた食事、何気ない一人の気遣いが私の作った鍋よりもあつたかいです。

「「」んどチャオに茶々丸が食事できるようにしてもらひつか。」

「チャオさんってそんなことまで出来るの？」

「未来から来たのであれば、出来てもおかしくないな。ホムンク

ルスの素体を使えばアイツなら創れる……といいな。」

ネギ先生の赤面エピソードの上映のあと、ネギ先生の謎を徹底解明されたとき出てきたネギ先生の転生者といつ話。興味を持ったマスターは自分達の情報と交換で教えてもらひことにしました。その際話したのがチャオの話です。ネギ先生は元々知っていたようで、わざわざ秘密にする」ともないと判断したマスターが話しました。

「ケケケ、酒ガウメーヴ」

「チャチャチャゼロはもつと野菜を食べろ」

「そりにエヴァも由子食べてないでしょ。」

「私はいいんだよ。」

「マスター、食べてくれないのですか?」

「分かったからそんな目で見るんじゃない!」

まだまだネギ先生には秘密がありますが、私の秘密は全て知られ、私たちとの距離が縮まつたような気がします。できればこの時間がもっと続きますよ!!」。

油断しないで頑張って頑張っておまえ、例えば事故とか（後書き）

日本はオフacco・・・そう感じました。石原爆発しき
わくそんなことより今は大晦日です。次回の更新は年明けといつ
いとでやよいならー・・・・・・・・あとでこの話し改定しておこ

明けましておめでと「ひざこます！」メントでネギが極悪とは程遠いと言われたのです『ぐくネギのエピソード』が書きたくなりました。つまり今回はそーいうことです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

エヴァンジエリンの家から帰ってきたネギは不機嫌だった。主人公という存在の認識を誤っていた。まさかここまで他人に影響を与えてしまうとは予想を超えていた。

『チリン』

家の奥から猫が出てきた。ネギの傍によると「なー」とひと鳴きして擦り寄ってきた。ネギは猫を抱き上げ、ベットまで歩いていき猫を抱いたまま横になつた。

「ただいま・・・それでボクのことを監視していた人は分かつたかい？」

『先生の予想通り、しづな先生でしたよ。ネギ先生を見ながら、多分学園長と話してました。』

「・・・妖怪め、何を企んでるんだか・・・さよ よくやつたよ。

』

ここにまで来るのに少々予想外なことが多かつたが……面白い、この自分の思い通りにならない感じがボクの中にある記憶を刺激する。理不尽な現実に苦しまれてきた前世のボクじゃないボクの憎しみを感じる。まだまだ執念が足りないな、この程度の理不尽を退けないと宿敵と相対した時、潰されてしまうだらう。

ボクが現在の状況を楽しんでいると胸の中にいた猫、猫にとりついたさよがボクを見つめてくる。クフフ、微笑もうにも顔が歪んでしまうね。

『先生……なぜ先生は私たちにそこまで話して貰われるのですか？』

「そこまでって、何処までのこじと？」

『先生が転生者だつてことや能力のことです。』

「ボクにひとつそんなものはないつもりでいいんだよ。」

このやり取りも3回目かな？どうやらよは本当に疑問に思つてゐみたいだね。いいだろう納得するまで答えてあげようが、よは絶対にボクを裏切れないからね。

『あなたは何がしたいんですか？』

「前にもいつただろう、宿敵に勝つんだよ。」

『宿敵？』

「そう誰か判らないけど、候補ならいる。創造主と呼ばれる魔法

使いに英雄ナギスプリングフィールド、そして神楽坂アスナだ。』

『神楽坂さんが?』

『どうやら驚いてるみたいだね。でもボクには否定できない要素がある。今までの候補もボクと相性が悪いやつらばかりだった。アスナさんはボクの補助魔法を無効化できるし、原作でみせた動きは力ンカ法と合わせればボクの脅威足りえるだろう。ナギ・スプリングフィールドはバグのような存在だ。創造主は鍵があるし、ナギを追い詰めるほどの実力者だ。』

「かもしだれないね。でももしかしたら今回の世界にはいないかもしない。」

『・・・わかつていないんですか?』

「そうだね、本人にあつても殺されるまで気づかない時があつたからね。」

『あつたことがあるとこつことですか。』

「結果は惨敗続きだよ。良くて引き分けさ、だからボクの情報が洩れて殺されても関係ない勝つまで続くんだよ、ボクの人生はね。」

『どうして私に教えてくれるんです・・・。』

泣いている猫、シユールだね。彼女がなぜそんなにボクに執着するのか分からない・・・しかしそれを利用させて貰おうか。彼女の頭を撫でながら優しく語り掛ける。

「わよ、ボクはね。一度も【安心】したことが無いんだよ。」

『【安心】ですか?』

「そう【安心】だ、人はそれを本質的に求めるんだ、そして一度手に入れたら手放したくないんだよ。今のエヴァンジェリンを見てご覧、ボクみたいなものに不覚を取つたのは【安心】を得てしまつたからだ。15年前の彼女ならボクを迂闊に近づかせなかつたはずだ。」

『先生はどうやついたら【安心】できるんです。』

「ボクを脅かすものを排除したときだよ、人が歴史がボクと同じようなことをしている。さよ、人間は何かに執着していないと生きていけないんだ。そう君が60年亡靈だったのはこの世に執着していたからだよ。そして執着していたものが叶つてしまつたとき、君の身体は不安定になつてしまつた。猫の身体に入ったのは【安心】を手放したくなかったからだ。」

『私は今【安心】している・・・。』

「君の首についている【ルルイ工の館】はボクの我慢、【安心】したいといつう欲の現われだよ。ボクは君が欲しい、さよ分かつたかい?もうボクは疲れたから寝ようか。」

『お休みなさい、先生。(私は)の【安心】からは逃れられない・・・先生のために何が出来るのかな?』

どうやら今回の出来事はボクにかなりのストレスを『えた』ようだ。こんなに自分をさらけ出したのは、初めてかな?

+++++

深夜、体は寝ていたがボクの意識は目覚めていた。いつものように、情報をまとめて考える。さよ、彼女はボクに依存している。今はこれでいい、この前みたいにボクの情報を簡単に洩らしはしないだろう、誰しも独占良くはある。それに【ルルイエの館】がある誰かに精神を見られそうになつてもブロックする。

『ケケケ、ヨウ新シイ御主人元氣カイ?』

チャチャゼロから念話がきた、ビーッや、久しづりの外出に満悦のようだ。

『アア、報告シテオクコトガアッタゼ。明日朝一番ニ学園長ノ所二行力ナイトイケナイゼ?勿論予想済ミダロ?エヴァート一緒ニ、多分高畠ラヘンニ連行サレルゼ。』

学園長もエヴァンジエリンの呪いが解けたことに気づいたみたいだ。あとチャチャゼロがボクを御主人とよんだり、エヴァンジエリンを呼び捨てにしてるのは契約を変更したからだ。

『アト聞イテタゼ?サツキノ告白ヲヨ。オレモ忘レラレタラ困ルゼ、オマエガ其処マデイウ奴ナラ楽シミダ。』

頼もしい限りだ、アーティファクトの調子はどうだい?

『ケケ、ケケケケケ、絶好調ダゼー、誰デモイイカラ斬リ

テー
ナ。』

待つてくれよ、スグに斬り放題になるから そのときは思う存分振るってくれ。

『オレモ狂ツテルツテ、ヨク言ワレルガ御主人モ大概イカレテルゼ!』

ありがとうそれは褒め言葉だよ。チャチャゼロ、ボクの敵を全て切り裂いてくれよ。そのために君を得たんだからね、汚れ役を進んでやる君をね。

告白（後書き）

う～ん、あとなんか足りない気がしますが大体こんなもんでしょ！この話の受け止め方は人それぞれですが、伝えたいことは一つ主人公は逝っちゃってます。
それではさよなら

うへへ、いやー今回も面白かったですね。百舌谷さん、ええつご存じないのです蚊? 篠房六郎さんの『百舌谷さん逆上する』ですよ、アフタヌーンでやつてますから是非! · · · こんなもんですかね、誰か二次書いてくれないかな? チラシ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

レーベンスシュルト城、壁一面に納められた本、城の内部にある書庫には多少その道に携わっているものだつたら驚くほど貴重な書物があるのに気づくだろう。この城の主に合わされて造られた机には大量の禁忌とされる魔道書が積まれていた。

「う~む、無いな。【ルルイ工】といふ言葉すらないか···あれ程の強制力を持つ術だ、何処かの神や怪物を封印しているなどの由来がある言葉だと踏んだんだがな。···新しく創られたものか?」

新たに机の上に本をのせ唸るエヴァンジェリン。

『ケケケ、警告しておいたぜ』

「そつか! 苦労、それでボーヤはなんて言つてた?』

『何にも言わなかつたぜ。』

そりがそりが、なにも言わなかつたか。どうやらチャチャゼロと私が繋がつてることに気づいているのか、無言これほんは私に対するメッセージだな。

「他に何か言つてなかつたか？」

『スグー斬り放題になるつていつてたぜ。』

クク、斬り放題ねえ。今の自分の立場は理解しているくせに、面白いなボーヤは・・・私の呪いを解いた以上、ジジイは事態を収めねばならない。私は元賞金首の吸血鬼、ボーヤは英雄の子とはいへ、そのことはごく一部しか知らないからな。ジジイが本気なら揉み消しる、手札を切るつもりか・・・手札？ そりがジジイはボーヤが何処まで出来るか正確に分かつてないだろうな。精々近接に特化してることぐらいか。

「チャチャゼロ、アーティファクトの調子はどうだ。」

『絶好調、ダゼ――！ 今ナラ、エヴァをぼっこに出来るぜ？』

「フツ、いいだろう試し切りが終わつたら別荘に来い相手してやる。」

『ケケ、妖魔ジャ物足りなかつたとこダゼ。御主人には感謝するゼ、エヴァとやれるんでからナ。』

ホントに楽しそうだなチャチャゼロの奴、まあ無理も無いチャチャゼロのアーティファクト【二相の器】 液体と固体を自在に変換でき、質量や体積も込める魔力の量で調節できて、形状や色まで自由に出来る。それが百戦錬磨のチャチャゼロが持つてゐるんだ、並大

抵のやつじや相手にならんだろ？

だがこの15年で鈍ってしまった感を取り戻すには丁度いいだろう。ボーヤに教えられたからな、油断するとな。ジジイが私を連れてくるためにタカミチを寄越すだろ？ そうしたらボーヤの警戒が薄くなる。ならボーヤは私を嵌めたようにジジイを追い詰める、出来なかつたら・・・ボーヤを連れてまた逃亡生活だな。

『ソウソウ【ルルイエ】』何て単語は図書館島の検索にも引っ掛からなかつたぜ。』

「そりか・・・。」

【ルルイエ】という言葉は、存在しない？いやそれはないな、実際に喰らつた私が一番理解している。まさか・・・ここではない世界の言葉か？しかしボーヤが創れる様なそんな甘いものではない、ということは他にいるのか異世界の魔法使いが・・・フフフ、ボーヤはホントに面白いな。

『・・・ヒヴァア。』

「ん？なんだ、まだ何かあるのかチャチャゼロ。」

『羨ましい力？この俺が、御主人から、カードを受け取っている俺が羨ましい力！』

「ええい、何でそうなるんだ！？」

『アレ？ファーストキスが仮契約で、カードも貰えなかつたのを気にしてると思つたんだがナ。』

はうひー！へつチャチャチャゼロめ、『氣にしてたのに！氣にしない』ようにしてたのに！覚悟してろ、別荘に来たとき思い知らせてやるわー・

・私のアーティファクトって何だろ？

+++++

空が白む頃、ネギの住むアパートに近づく人達がいた。

「わよ、起きて。」

『ふええ？おふあよー』『わこます・・・なんですか、まだ六時前じやないです。』

「ボクはこの後、連れて行かれひつかから、わよたはアーニャにいつて欲しいんだ。ボクが学園長に首にされうつむか。」

『そうなんですか・・・ええつー！先生首になっちゃうんですか！？なんだどうしてー。』

「落ち着いて、さよそれはね。ボクがエヴァを助けたからだよ、いいかい？さよ、君はアーニャの所に駆け込んでボクが首になると、いつて欲しいんだ。ボクが首になるかどうかは君に懸かってる。」

『ネギ先生・・・分かりました。行つてきますー！』

猫なさよは、台所の窓からそろそろと辺りを窺いながら女子寮へと向かっていった。ネギはそのまま布団に戻り、迎えが来るのを

待つた。

『バギンツードタドター』

「な、何なんですか！一体！」

「ネギ・スプリングフィールド！貴様を学園長の所まで連れて行く、抵抗するなら容赦はしない！」

「は、離してくださいー！」

+++++

学園長室、その部屋の持ち主は重い溜め息をし、暗い顔で連絡を待っていた。どうしてこうなったのか？近右衛門は考える。

ワシの立場はマホラ学園の学園長、アジアでもっとも大きな影響力を持つ、それ故に責任は重い、此度のことが本国（魔法世界の元老院）に洩れれば、一気に力をもぎにぐるだらう。ワシをよく思っていない連中がこここの実権を握れば、西や他の術教会との関係が壊れてしまつだらう。

それだけは避けねばならない、日本が戦火に包まれるのはもう沢山じや。しかしどうすればいい？エヴァやネギを処分したとしても問題は残る、処分しなければ本国が介入していくじゃね？

「学園長、ネギ・スプリングフィールドとエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルを行しました！」

「ああ、入ってきなさい。」

「はつー。」

むむう、空気が重いわい、ネギ君とエヴァを囮むように「魔法先生が囮んでおる。特に高畠先生は一人の動きを注視しておる。ああ、来るのが早すぎるのう、結局徹夜して考えたのじゃが答へは見えん。

「よく来てくれた、二人には聞きたいことがあっての。」

「ほう、ジジイ耄碌したか？強制的に連れてきたくせにへ言つわー。」

「お、これ殺氣立つ出ない！全くエヴァも人がワルイわい、わざと煽るよつに言わんでいいじゃろうに、それにもネギ君がまるで子供のように怯えていて気味が悪いのう、女性の先生方も氣の毒に思つてみてる人もあるし、厄介じやのう。」

「ふむ、ネギ・スプリングフィールド君。きみはエヴァンジェリオンの封印をどうして解いたのじゃ？教えてくれるか。」

「は、はい！ボクが4歳くらいに父さんがやつて来てマクダウェルさんの呪いを解くようになつまされました。解く方法も父さんが教えてくれました。」

破れたパジャマに乱れた頭髪と相まって涙目の中身君が可哀相な子供に見えるが、わざとらしいわい高畠先生やエヴァなど、俯いて肩を震わしているわ。あー、明らかに同情する目が増えてきた・。こらー！連れてきたお前までそんな顔をするでない！

『バタバタバタバタ!!』

「学園長！ネギ先生がクビリでござる事、ありますか！」

「お嬢ちゃん、ちよいじ語りがあるんや」と

「お井をふくらむの、これでですか！」

《詩林》

「み、みなさん！？」

卷之二

あーどうしたもんかの、ネギ君のくさい演技で吹いてあるものもあるし、とりあえず出て行つてもらおうか。正直、本人達とだけで話したほうがよさそうじゃの。

「静まれ―――！高畠先生以外の先生は生徒達を外に出していく
れるかの、ネギ君、エヴァンジエリンはここに残るよう」

ふう、やつと騒がしくなくなつたわい。ふおふおふお、ネギ君そ
んなにいい笑顔でなにかいことでもあつたかの~。

「学園長へ、どうやら僕らの処分が決まつたようなのでちよつと相談したいことがあるんだけどいいかな?」

やれやれじやのう、元老院の工作員からですら同情をかつたり、一部の魔法先生からも人気も高く、生徒からも好かれてある。困つたのう、彼らを処分したら暴動が起きかねん。

「ジジイ、貴様もまんまとやられたな。」

「H・V・Aには言われたくないのう、ネギ君相談事とはなにかね？」

「クフフ、面白い」とですよ。貴方も厄介事もボクの目的も簡単ではないのですから、それではですね。相談事とは～～～」

+++++

クックック、ボーヤの仕組んだ茶番も終わり、ボーヤの本来の狙い？の学園長の引き込みを始めたか。やはり恐ろしいのはボーヤの駆け引きの上手さだな、あの立ち振る舞いはよく目立ち、人の記憶に残る。そこで印象を良くする行動をとれば自然と好意的にみられる。

ジジイや私のように最初から疑つてきてくるものには、本性を晒し【カリスマ】でもって人心を掌握するか。ナギのように無意識で人を惹き付けるのではなく、意識的に話しや動きの主導権を握つて自分を大きく見せる。ハッタリともいうが非常に効果的だな、実際ジジイも私もボーヤ魅せられてしまった。

「ふむ、なるほどのう。つまりお主はワシの人脈や地位を利用するわけか・・・。」

「ええ、まずボクを囮として邪魔者を排除しまじょうか。今回の修学旅行は京都でしそう？」

「未来の知識・・・やつぱりバレちよる？」

「クフ、ボクは気にしてませんよ。それより関西呪術協会の姐の掃除はボクに任せてもらいましょう、貴方と西には他にして貰いたいことがありますのでサポート程度で十分ですよ。」

どうやらボーヤの案に乗ることにしたようだな。元タジジイと詠春のは少し強引だったからな、ボーヤと近衛を餌に呪術協会ないの反乱分子を一掃するか・・・本部が手薄になるし、近衛を守り切れねば大きな問題になるな。

近衛の魔力量は異常なほど大きいから魔力タンクとして使えるだろうし、詠春やジジイへの牽制になる。それにだ、もし外部からの介入があればこの辺論みは水泡のように脆く崩れ去るだろう。

謀略フェイズ（後書き）

気がついたら五日になっていた、何をいつてるかわから(r_y
ボーッとしていたら更新が遅れてしまいました。すみません。
さて今回は学園長との密談やらエヴァの心の変化を書きましたが、
フラグです。なにフラグかというと秘密です。とりあえずチャチャ
ゼロのセリフが面倒すぎて結局語尾をカタカナにすることに、読み
ズラいんですよ。自分で見返して、?って思いました。それでは
わようなら。

早起きは三文の得 現在の貨幣価値にして100円――!

今日のチャチャゼロ！！

ヨウ、みんな元気にしてる力？作者のアイドル、チャチャゼロダゼ。今回からオレがここで作者が気になつたことを垂れ流していくから、気をつけて見てつくれヨ。あと興味の無いやつは飛ばしていいんだゼ、無理をしちゃ駄目なんだゼ。

ジャアまず最初は妖怪についてダ、まず自然に生まれた妖怪からイクゼ。コイツラは人々の噂話や神様への信仰が変化して生まれた連中ダ。山への畏敬やら夜道が怖いとかから生まれるんダゼ、つまり【恐怖の具現化】ということだ。山犬とか見越し入道とかダナ。

ちなみに作者的には人間の念と自然にあるエネルギー（マナとか）
が負の感情で混ざった・・・まあ NAND 酢と水と卵黄で出来たマヨ
ネーズみたいなもんだと思つてるぜ。
オドとか

まあ今回はこんなもんダ、次回は作られた妖怪ダゼ。

II II II II II II II II II II

京都、何処かの武家屋敷、夜の帳が下りて誰もが寝静まつていた。

「だ、誰ムグツ《プシユツ》」

「ケケケ、これで終わりダナ。」

「」の夜に複数の人物がこの世を去了た。」のことは関西呪術協会の反近衛派に緊張を走らせ彼らの過激派の動きを活発化させた。

+++++

朝のチャイムと共に騒がしい教室が段々と静かになつていく、教室の引き戸の音が響く、去年までの彼らとは比べ物にならないほど良くなつていた。

「おはようございます、皆さんいよいよ私たち3・Aが修学旅行に行きますけど準備は宜しいですか？来週に迫った修学旅行を有意義に過ごすため、現地の情報は集めたほうがいいですよ。私たちが行く京都・奈良は非常に見るべきところが多いですからね。」

「ネギは準備できてるの？」

「アスナさん、先生を付けて下さいね。そーですね、特別なにかを用意するつてことはありませんね。」

「じゃあついでに買い物に付き合こなさいよ。」

「な、アスナさん…ずるいですわっ、ネギ先生こんな乱暴な言葉遣いの方よりも私と行きませんか？」

「なんですってっ！」

「なにかつ…！」

「やれやれ——」「やつちやえつ、アスナ———」

皆さん元気ですね、でもまだホームルーム中なので静かにしない
といけませんね。やれやれ、修学旅行はこんなで大丈夫なんでしょう?

+++++

原宿、それは若者の集まる町で流行の発祥地とも言える場所。つまりだ、何回も転生しているボクは、見た目はともかく中身はおじいちゃんだからすごい場違いな印象を覚える。

「はつはつは、ボーヤー次はあそこのお店にいくぞっ！」

「お待ち下さい、マスターまだお昼前です。是非アルタ前に行きましょ。」

「茶々丸、お前もすっかりハシャイでるじゃないか。アルタ前は新宿だぞ?」

「そりう・・・なのですか。」

ボクの前を歩いてるのはエヴァと茶々丸さん、朝ボクが二度寝をしようと布団に飛び込んだらドアを吹き飛ばして茶々丸に連行されたのがつこつときだ。エヴァたちの買い物につき合わされるのはいいんだけど、先にいつて欲しかったよ。ボクの休日が……。

「アスナー、これはどーや?」

「ダンベル……しかも15キロまでの奴じゃない。」
「あんたは私を殴りたいのよ?」

「じゃあ殴りません!」

「ペアルックの服?」

「ほら、高畑さんと着ればいいじゃない。」

「た、高畑先生と……つてできるわけないじゃない!」

後ろは後ろで盛り上がっています。たしか4月21日がアスナさんの誕生日で今日、アスナさん、このかさん、アーニャで買いに来ているようです。なんかエヴァさんの吸血鬼騒動で仲良くなつたらしいですよ。

「ネギ先生、これはどうですか?それともこれ?」

『なるほどそうきましたか……私的にはフード付きカットソーがいいと思しますよネギ先生!』

「なんであやかさんの選ぶものには、猫耳やら尻尾がついてるんですか?」

「『かわいいからですよ……』」

「……そうですか。」

何でしおいしのシンクロは……せんとアヤカさんはちょ

ことが見えていないんでしょうがね。あれつ、他の人達もなんで近づいてくるんですか？いいからこれに着替えろって、これスカートじゃないですかっ！ちよ、やめっ。

+++++

いやー、一昨日は嫌な目に遭いましたね。偶然、あの時僕たちをストーキングしていた美沙さんたちがだしに逃げることが出来ましたけどね。それにしても教員よりも早く来る生徒たちってどれだけ楽しみにしてたんだって話ですよ。

「みなさん、おはようございます。本当に早いですね、何時くらいに着たんですか？」

「始発アルコッ…」

「落ち着かなくて早く来ちゃった！」

「クーさんも裕奈さんも元氣でいいですね、全員そろっていますか？」

「？」

『は〜〜〜〜〜〜』

うんうん、皆元気が宜しいですね。でも新田先生がこっちを見ているので声のトーンを下げるでしょうね。それでは出席を取つてと・ちゃんと班に分かれて並んでますね。1班が柿崎、椎名、釣宮、鳴滝姉妹ですね。2班はクーフェイ、超、葉加瀬、四葉、春日、長瀬ですね。3班は雪広、那波、村上、朝倉、レイニー・ディですね。

4班は佐々木、明石、大河内、龍宮、和泉ですね。5班は宮崎、綾瀬、早乙女、エヴァンジョン、絡繆ですね。6班が神楽坂、近衛、桜咲、アーニャ、長谷川とれよですか。

「長谷川さん。」

「え、ネギ先生なんですか？」

「アーニャから聞いてますよ、頑張って下さいね。」

「・・・ビームで？」

「長谷川さんがネット」「ストップー言つなよー誰にも言つなよー特に朝倉の奴にだけは絶対に言つなよー」「ふりですね、分かりますよ。」

「そういうのこりねえからーーー」

素直じゃありませんね。ああ、いつちゃったか・・・まあ、アナさんとかコノカさんなら彼女と上手くやれると思いますし大丈夫でしょう。それよりもこっちの方が気にしないといけませんね。

「刹那さん。」

「ネギ先生ですか・・・。」

「そんな顔をしているとコノカさんが心配しますよ、ボディガードなら護衛対象を不安にさせてはいけません。この旅行中彼女から決して離れてはいけませんよ、何かがあつてからじや遅いですからね。」

「それは分かつていますけど。」

「いいえ、貴方は分かつていません。刹那さん、貴方の役割は彼女の護衛です。さつき貴方はコノカさんに話しかけられた後、彼女から離れてしまいました。それはいけないことです、いいですか？貴方がすべきことはコノカさんの隣りに立つて彼女の身に降りかかる危険を全て排除もしくは避けることです・・・説教臭くていけませんね。」

「先生・・・。」

「刹那さん、ボクと話して余裕があつたらコノカさんと話して下さい。それとマイ・ボディガードとか見ることを推奨します。」

まだ辛氣くさい顔をしてますが前よりも良くなつたんぢやないでしょうか？あとは・・・皆つむさこぐらい楽しそうですから大丈夫ですかね。

それにしてもヒュアさんが子供のよつにキラキラした瞳で流れる景色を眺めるのはいいんですが、茶々丸さん・・・そんな食い入るよつに見なくともいいんじゃないですか？えつ、記録中なんですか。

早起きの文の筆 現在の貨幣価値にして一〇〇円---（後書き）

はい修学旅行篇はいました。

今回からはじまつたチャチャヤゼロ枠はまさに俺得コーナーなので私が飽きるまで続けて生きたいと思います。

四日から自動車学校が始まりましたので年末のような怒涛の連続投稿はできません楽しみにしている方たちすみません。

それと三日に一度はうろしたいと思いますでも来週から午前も午後も自学が入ってるんで遅くなりそうですが。

それではさようなら

赴任から2ヶ月余りではさすがに厳しいものがあります

『今日のチャチャゼロ！！』

ヨウ、全国のチャチャゼロファンの皆待たせたナ、チャチャゼロダゼ。

今日のテーマは作られた妖怪ダゼ、大きく分けて3パターンあるゼ。

その1、事実を都合よくするために創られたものダ。これは当時の日本が貴族制だったことや宗教や迷信で支配されていたことも理由ダゼ。権力者たちが自分の悪事を隠すためだつたり、自分を偉大に見せようとするためだつたり、侵攻後の後付の話だつたりとかナ。その代表的なのが鬼や土蜘蛛、天狗ダナ。

その2、絵や物語、作り話のために創作されたものダ。生活に密接したものや単なる噂話をもとに創られた妖怪ダゼ。有名な妖怪画家といえば鳥山石燕ダ、彼が描いた妖怪にはオリジナルの妖怪が多く描かれてるんダゼ。後は水木しげルダゼ、彼のことを描くにはベースが足りないゼ。マ、ゲゲゲの鬼太郎や畏悦録が代表作ダナ。

その3、閉鎖された空間を円滑に保つ為に創られたものダ。これはその1と似てるゼ、だがな権力者じやなくて当時、人口の割りを占めていた農民（一般市民）が作り出したところが違うんダゼ。先に言つとくけどナ、追放された人や旅人、獵師などは民俗学の用語で異人つて云つたんダゼ。妖怪が創られた理由としては村の口減らし（異人）、殺人（死んだのは異人）、（異人との子の）出生の隠蔽、村の近くに住むもの（異人）への差別ダゼ。

ケケケ、人間つてのは恐ろしいダロ？デモこれは人の一面でしかないからナ、あんまり気にして過ぎんナヨ。次回は妖怪になつた神様ダゼ、あとこれを参考にするくらいだつたら『ぬ～べ～』を読むことを推奨するゼ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ネギがエヴァを（狡い手で）華麗に撃退してスグのことだった。
オコジヨ 妖精用の刑務所

から一匹のオコジヨ 妖精が出所した。その妖精の名前はアルベル・カモミールという（千二百枚の）下着ドロであり、五年前にネギの熱心？な説得やネギと使い魔契約を結んだことで改心し模範囚人として服役し、この春刑期を終え釈放された。

「兄貴は俺が犯罪者だつて知つていて俺つちと使い魔契約をしてくれた・・・兄貴の経歷に傷をつけちまうのに、だから俺つちは報いねえといけねえ！」

志しを新たに決心したカモだつたがネギの家に行つても誰もいなく、情報を得るためにネギと親しくしていた人物に聞くことにした。

「クリスの爺さん！兄貴がどこに行つたかしらねえかっ！」

「なんだ同士じやないか、ネギなら修行の為に日本に行つたぞ。それでカモよ、出所祝いに日本に旅行しに行かないか？孫にも会いたいしな。」

「じいさん・・・あんたつて人は・・・。」

「うむ、ネギと契約してるカモなら彼を探せるだろうしな。あと秋葉原にも行きたいからな。」

「欲望が駄々漏れだぜ、じいさん。ま、渡りに船つて奴だな！」

この後、クリスとカモが日本に行くのだが（クリスが）秋葉原に嵌つてしまいネギのところに行くのが遅れてしまったのは全くの余談である。

+++++

京都、清水寺本堂『清水の舞台』。ふつ、いい景色ですね。でもどうせなら冬に来て、雪景色のお寺が見たかったですね。なんでウチの学校はこんな季節に修学旅行に行くんでしょうかね？

「ザ・京都っ！茶々丸！ちゃんと撮ったか！」

「抜かりありませんよ、マスター。」

「これが噂の飛び降りるアレか！」

「誰かッ、飛び降りれ！」

「私が行くアル！」

「いやいや、拙者が飛ぶでござるよ。」

「おやめなさい・・・。」

ホントにいい景色ですね・・・。新田先生分かってますよ。注意してきますからそんなに見ないで下さい。エヴァさん！他の人の迷

惑になりますから騒がないで！クーさんに楓さんも危険なことはしないで下さい！

「「」が清水寺の本堂ですね、いわゆる『清水の舞台』です。本来は～～～略～～～生存率は85・4パーセントと高く～～～略～～なぜ飛び降りるかといふと自殺ではなく願行つまり飛び降りて無事なら観音さまが願いを叶えてくれて死んでも成仏できるという～～～略～～～飛び下りは明治5（1872）年明治政府によって禁止され下火になつたそうです。」

「うおっ変な人がいる！」

「ユウは神社仏閣仏像マニアだから」

「マスター、駄目ですよ。」

「べ、別に飛び降りる気は無いぞ！」

あんなにそわそわしだしたら誰でも感づくと思いますけどね。それにしてもユウさんの眼があれほど開かれてのははじめてみますよ。

「そろそろここから先に行くと恋占いで女性に入気のある地主神社があるです。」

『えつ、恋占い』

「ちなみにこの石段を降りるとあそこにある『音羽の滝』に出来ます、あの三節の滝の水を飲むと右から健康・学業・縁結びが成就するとか・・・。」

『縁結び！それだ！』

ちよ、ユウさん！皆を煽らないで！駄目ですよ、走つては他の人達に迷惑ですから！

「・・・ま、これは観光客用の宣伝文句で、本当は『仏・法・僧

への帰依』とか『行動・言葉・心の三業の清浄』を表わしてゐるんで
すが・・・誰も聞いてませんね。』

+++++

なんていうことでじゅう・・・地主神社の落とし穴や音羽の滝の
ワナ（滝の水にお酒混ぜてある）を未然に防いだのに係わらずこの
疲効感は・・・というかお酒に酔わせたまゝが楽だったかもしけな
いですね。

「うーん、さすが京都ね。寺にある店でもうどんがおいしいわ。
」

「・・・」

「うーんで食べるからひとつもあるんじゃないかな？」

ああ、もう疲れましたよ。3・Aの皆さんのパワーは物凄いです
ね。ほう、千鶴さんに夏美さんそれにザジさんはお昼ですか、いい
ですね。えつ、ボクの分もあるって・・・あ、おいしそうなくて
！「・・・？」そんな顔をされても勝手に行動されるのは困ります
すからーちょっと、皆さんを呼んできます。

+++++

嵐山、今日からはここのお宿になるそうですが、色々迷惑
をかけそうで今から先が思いやられますね。

「ネギ先生、教員は生徒よりも早い入浴時間ですから気をつけ
くださいね。私たち女性教員の入浴時間がそろそろで終わりますので
ちゃんと入つてくださいね。」

「はい、わかりました。あとしづね先生、お風呂入るのを嫌がるほど子供ではあつませんよ。」

「うふふ、それでは失礼します。」

すっごい微笑ましいものを見るかのように颯爽と去つていったしづな先生、いやいにんだけどね、別に子供扱いされてもね。お風呂入るひと。

はい、入つてきましたよ。念を押しておいた御蔭で刹那さんが来ることもありませんでした。おやつ、これは……式神返しの札が貼られますね。刹那さんでしょうね、さてボクが外に出ない今天ヶ崎さんはどう動きますかね。正面から強引に？それはないでしょ。なら何とかして結界を誤魔化す？・・・クフフ、ボクはノロノロやつてきた所を潰させて貰いましょうか。先に認識阻害を使ってと。

「【シユブ・一グラ シュマ・ゴラス 永劫を経るものよ 墓碑の怪を統べし旧きものよ 生きとし生けるもの全てを映し出せ ナグの鏡】」

範囲を刹那さんの結界内に絞つてと・・・居ませんね。刹那さんはコノ力さんと話せるようですし、適度に緊張感を持つてこの分なら不覚は取らないでしょう。ふんふん？龍宮さんがこいつに手を振つてきた、流石に鋭いですね。

ちょっと範囲を広げましょーか、旅館の周囲には・・・あ、いた。

天ヶ崎さんが露天風呂に待機してますね、ほって置いても刹那さんが対処するでしょうからスルーですね。……多分天ヶ崎さんの様子を見てる人が居るはずなんですが・・・・・かなり離れたところにいますね。

「泳がせますか、でも【シユブ・ニグラ シュマ・ゴラス 彼方の闇より出でし暗きもののもど 旧き盟約に従い 仇なすものを我が使徒と為せ 黒き夢】先手は打たせて貰いますよ

ボクが反近衛派の工作員と思われる人物達（3人）の精神を操ることで相手の状況が筒抜けになり、不意を突かれる事は少なくなつた。この魔法は此方が命令するまで普段通りに動くので気づかれることは無いはず、気づかれたら他に手を打とう。

赴任から2ヶ月余りではありますがに厳しきものがあります（後書き）

自動車の運転は樂しいけど疲れる、作者です。私も修学旅行で清水寺に行きましたよ、地主神社は見ただけですが、音羽の滝は飲みました。健康の奴です。あと今回出てきたうどんですが、作者が食べて普通に美味しかったので書いちやいました。清水の舞台を見上げながら食べるのはいいですよ。それではよろしく

『今日のチャチャゼロ！』

オハコンバンチワーダゼ。ミンナ元氣力？オレは本編で出番が無いから暇ダゼ。

サテ今日の話題は『妖怪になつた神様』だつたナ。

昔、柳田國男つて人がいたんだぜ。この人は明治時代の学者で「日本人とはなにか」をテーマに、日本の民衆文化を研究する「民俗学」を確立した（一部で）結構有名な人ダゼ。柳田は妖怪をこう定義したんだ「かつて神だつた存在（地方神）が信仰されなくなり、低級（妖怪）になつたもの」

ここの説は間違つていないんだが、これじゃ説明できない妖怪が前に紹介した連中ダゼ。ソレト変化した例を挙げるなら、山姥（山の神またはそれに仕える巫女）とか海坊主（海の神や竜神伝承）ダナ。あいつらが幻想郷に来たのもこれが理由かもナ。

・・・チョット短い気がするから日本画の話をスルゼ。昔の日本画の女性つて基本的に「超長髪、麻呂眉、ふとましい」ダ。ナン力美人？つて感じだが、色々と意味があるんだぜ。ふとましいのは、当時それが富の象徴でふくよかなほうがいい子供を産むらしいという理由ガナ。

そんなことより作者がテレビを見ていたときのことダ。あるテレビ番組で「この絵は現在の漫画のようにデフォルトして描かれたも

のではないか?」「この話しされた時に作者に電流が走ったそうダゼ。

全てが繋がつた気がしたらしいゼ、最近の漫画つて超長髪キャラとかふと眉キヤラやら顔の輪郭線がもちつとしてるダロ?歴史は繰り返される、この言葉は真理ダゼ。

最後に漫画、アニメは日本の文化ダゼ。

=====

マホラ学園長室、カモとクリスがネギに会いに訪れた時、タッチの差で修学旅行に行ってしまっていて、カモは今すぐにネギのところに行こうとしたが、クリスは学園長に挨拶をしておいて損はしないと丸め込まれた。

「遠路はるばるマホラ学園まで、ようこそいらっしゃったお二人とも、ワシがマホラ学園学園長をしている、近衛近右衛門ですじや。」

「これはこれは!」丁寧に、ここで世話になつてているアンナ・ココロウアの祖父のクリスです。いつのオコジョ妖精がネギ・スプリングフィールドの使い魔のアルベル・カモミールですよ。」

「よろしく頼むぜ、学園長。ちよつと聞きたいんだが、兄貴はこっちでどんな感じなんだ?」

「ふあふあふあ、ネギ君かの?ようやつてあるよ、教師としても優秀じゃし、生徒とも上手く付き合つてある。ま、少々元気が良すぎるがの。」

「なんだネギの奴、楽しくやつてるみたいじゃないか、それよりうちのアーニャはどうですかな？」

「アーニャくんは…………。」

学園長の話を聞いたカモはこう考えた。

兄貴は生徒と上手くやつてる 教師なので生徒を守る 生徒が大事 関東魔法協会と関西呪術協会の不和 生徒を守るために兄貴が危険 味方が必要！

「兄貴…………！」

「…………どうしたんじや、これは？」

「ふむ、ほおって描こうじゃないか。それよりもだが、本気なのか？・ネギはウチのアーニャの婿だぞ。」

「ふおふおふお、まだ決まってないんじやろ？ならウチのコノ力が付け入る隙は十分にあるわい、それにウチのコノ力は器量よし、奥ゆかしくて気配りもきくいい子じや。」

二人の会話を聞いたカモはこう考えた。

自分だけでは力不足 兄貴には味方が必要 兄貴に相応しい嫁なら助けられる！？ アーニャは〇、コノ力は良く知らない 兄貴に相応しいか自分が見極めるべき 今すぐ行きますぜ、兄貴！－

カモの小さな脳は空回り気味だった。

+++++

・・・なにか嫌な予感がしましたね。それよりコノ力さん達ですね、ナグの鏡で見ていた所、式神のサルが攫いに来ましたが刹那さんが難なく撃退し、一緒に居たアスナさんやアーニャに事情を話したようです。

「つまりコノ力は、その立場と生まれ持つた魔力量故に狙われるわけね。（極東一の魔力って言われてもピンとこないわね。）」

「そうです、そのためにコノ力お嬢様の護衛として私がマホラに来たのですが・・・学園長も何故わざわざお嬢様を危険な目に遭わせるのかがわかりません。」

「桜咲さんを信頼してというわけでは無さそうね。・・・面倒だし、コノ力さんに魔法のこと言つたほうが安全じゃない？（ネギなら事態を全部把握してそうね、後で聞きたかったと。）」

「なつー。」

どうやら、学園長は刹那さんにそれほど事情を話していないようですね。それにしてもアーニャはスッパリと切れますね。狙われる本人に事情を話して危機感を持つて貰い、危険な行動を抑制できてる護衛もしやすい、その判断は間違いないですよ。

「長はお嬢様に魔法に係わらせたくない」と・・・。

「魔法に係わらせたくないってのは親の我がままでしょ？子供のためを思うならきちんと話して身を守る方法とかせめて護衛されて

るという意識を持つたほうが断然いいわよ。第一に係わる係わらな
いは「ノカさんが決めることよ。」

「そうですね・・・明日お嬢様に話したいと思います。」

およ?なんだか素直に受け入れましたね、刹那さんも話したほう
がいいと思ってたんですね。そんなことより結界に侵入されました
よ。そもそも、刹那さん達も気づきますかね?まったく新田先生も
タバコ吸うためにわざわざ外に行かなくてもいいと思うんですが・・
・刹那さんのお手並み拝見といきますか。

「そういえばノカは?」

「お嬢様ならトイレに・・・」の気配はつー・

「まさかっ!」ノカさん、開けてください!・

『入つりますえ~。』

「お札が喋つてる!」

「やられたっ!私は追います。神楽坂さんはネギ先生に連絡して
下さー!」

「私も行くわ!アスナはネギを探して置いてね!」

「ええ――――ちよつと待つてよ!」

おや、アスナさんが出遅れましたね。ほっとくのもなんですし、
持つて行きますか。サッサと一人を追わないといいところが見れな

いかな？クフフ、昔を思い出すよ。

「アスナさん、どうしたんですか？」

「あつ、いいとこーそれがコノカが誘拐されて大変なのよ。」

「そうですか。」

「うですかって、あんたねつ、キヤーなにすんのよー（ビリせ
されるんだつたら、高畠先生が良かつたー）」

みんな大好きお姫様抱っこですけど、ボクの身長じゃ不恰好です
ね。ま、いいです。それじゃ、窓から出て、空を走って急ぎましょ
うか。

「急ぎますから放さないでくださいね。それともここに残ります
？」

「それこそ冗談じゃないわ！・・・そこ窓なんだけどー！」

アスナさんを抱えたまま、虚空瞬動で空を駆けます。いやー、夜
風が気持ちいいですね。下のほうで刹那さんとアーニャが走つてま
すね、その先には駅に駆け込んだおサルのキグルミの姿が見えます。

よつと発進した電車の上に乗つてと、中の様子を窺うと《ゴパー
》冷たい！顔に水が・・・くつ、電車のドアの隙間から洩れ出た
水が勢いよくボクの顔にかかるきました。

ん？中から音が・・・うわあ、いいのかな。どうやら刹那さんが
おサルに水攻めをされたところ、斬空閃で巻き添えにしたようだ

ね。電車のドアから水がどんどん出てくるな。降りますよ、アスナさんって気絶してる？・・・ちょっと生身には虚空瞬動の動きは無理があつたようですね。

「ハアハア、み、見たかそこのデカ猿女。ケホッ、お嬢様を返せ！」

「なかなか、やりますなあ。しかしコノカお嬢様は返しませへんえ！」

「待てっ！」「アーニャアブウストオオナツ「オオオオオウ！…」つてえっ！」

「速いっ！善鬼！護鬼！（やばいやばい、間にあえ――――）」

アーニャの瞬動からの炎を纏つた重いの一を一人がかりで受け止めましたね。アーニャの瞬動はタカミチの居合い拳を潜るくらい早いんですけどね、あの人相当な実力を持つてますね。

「ふう、三枚目いきますえ？お札さん、お札さんウチを逃がしておくれやす。」

「わせるか！斬鉄閃！」

「無駄どす！【三枚符術京都大文字焼き】！」

刹那さんの螺旋をえがく氣の斬撃は強大な火の壁に遮られてしまつた。逃げながら足止めに符術を敷き、二対一でも有利に戦況を運ぶか。いい動きをしますね、でもアーニャに炎を使うのは悪手ですよ。

「あんたら邪魔よ！【フォルテス・ラ・ティウス リリス・リリオス 火精よ 集まり弾ける ブラストボム】！」

天ヶ崎さんの火炎がアーニャの頭上に集まり、幾つもの火球になり、善鬼護鬼そして天ヶ崎に向かつて打ち込まれた。アーニャの足止めをしていた善鬼護鬼はどちらもぶつとばされる。

「え～い、百花繚乱～～！」

しかし天ヶ崎に放たれた火球は突然乱入してきた少女に全て打ち落とされてしまった。身のこなし、技のキレ、刹那さんに劣らない腕の持ち主、確か彼女は月詠だったかな。あ、こっちを見た、手を振つておこづ。

「どうも～神鳴流です～、おはつに～～。（え～と、こっちを睨んでる人に、なんかきょろきょろしてる人、隠れて見てる人、全部敵ですか～？）」

「貴様が神鳴流だと・・・（見かけはこんなのが、動きは本物だ、それに持つてる武器は小回りの効く二刀か、厄介だな。）」

「見たところあなたは神鳴流の先輩さんみたいですね～～、でも護衛に雇われたからには本気でいかせてもらいますわ～。」

「しつ～斬岩剣！」

「斬～岩～剣～、あ～びっくりしたわ～。（久々に強い人ですわ～、でもこっちを見てるの方方が数段上です～。）」

刹那さんの恐ろしく速い踏み込みからの斬石剣は月詠の斬石剣で相殺された。明らかに月詠は人とやり慣れた動きをしている。言葉では驚いたといっているけど、眼は冷たく見据えている。

「（あつちの魔法を使う子や見てる人がきたら押さえ切れませんね。）千草さん、その子おいて引きますよ。」

「・・・なんでや？ここままなり逃げられるやろ。」

「こっちを見てる人があるんですね。」

「ちつ・ほんまやな？（見てる奴？敵か、それとも・・・。）」

「死にたいなら付き合います。（やつたら楽しそうですね。）」

「（月詠はんがそこまでいうなら引くしかあらへん！）しゃあないーお嬢さん方、ここは引かせて貰うわ！ほな、さこなら。」

「待て！・・・クソ逃げられたか。」

月詠が乱入してから沈黙状態だつた、アーニャがこっちを見た。多分、月詠がこっちを見たから気づいたのだろうね。とりあえずアスナさんを起こしてコノカさんの様子を見に行こうかな。

ニュースにて「 TPP加入のデメリット、（北海道の）農家の7割（三万戸）に影響します」

吹きました。幾らマイルドに言つても（嘘でも本当でも）デメリットがやばすぎでしょう。しかも北海道の話しかしてなかつたんで日本全体でどれだけなんだよ、農業以外は？とか考えてたら眠くなりました。

小休止

『今日のチャチャゼロ！！』

みんなオレダゼ！テンシヨン高けーナツテ？詳しくは本編デナ。サテ今日は「前鬼と後鬼」ダゼ、やつと本編に関係ある話題にナツテ良かつたぜ。マズ最初に陰陽術者が従えテタ「前鬼」と「後鬼」ダガ、実は、修験道の開祖とされている役小角えんのおづねの護法童子ダゼ。

護法童子ツテノハ、主人に仕えて身の回りの世話をする陰陽道の式神のような存在デ、密教や修験道では、陰陽道の式神が生まれる以前から活用されテタツテ話しだ。ちなみに、前鬼と後鬼は夫婦という設定で、前鬼が夫で、後鬼が妻ナンダゼ。この護法童子、元々は小角と同じ山岳修験者ダッタらしいゼ。

とまあコソナ感じダナ、役小角が修行してい夕所は葛城山は朝廷に敵対した土着民（土蜘蛛と呼ばれる）の本拠地として有名な場所だつたんダゼ。だから役小角を朝廷に敗れた土着民の象徴として自分達の開祖に持ち上げた結果、彼と共にいた仲間が鬼として扱われたようダゼ。

マ、うちの小説だと普通に妖怪又はモンスターだから気にしなくてテモ大丈夫ダゼ。ジャアアリー「デヴェルチ！」本編と「コーナー」に出ないといけないのがオレの辛いところダゼ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

現在、ボクはアスナさん達とロビーにいます。何故いるのかというとコノカさんに魔法バレをすると、ボクに事態の全容を聞くためです。つと今、刹那さんが話しあわったみたいですね。

「魔法・・・先生も使えるん?」

「まだまだ未熟ですけどね。」

「あんたが未熟なら私はひよこね。」

いやいや、そんなことないと思いませんよ。実際、基礎や応用こそ勝つてますけど、瞬間火力は遥かに負けていますし、ボクは強力な攻撃魔法を殆ど習得していませんからね。

「あれでひよっこ・・・世界は広いですね。私も頑張らねばなりませんね。」

「それでどうなつてんのよ。」

さてさて、どこまで話せばいいですかね。やつぱり大人の暗い話しそり、ボクが密書を関西の長に渡しに行くでいいですよ。ボクとコノカさんが囮でその隙に組織の清浄化を図るのは言わないでいいとして、少し相手の情報はいつておきましようか。

「それはですね、実はボク、学園長から関西呪術協会に密書を届ける任を与えられたんですよ。つまり相手はボクの密書とコノカさんの身柄を確保しようと動いてるんです。」

「密書ですか?」

「密書には関西と関東の仲を改善しようという公式な意味があります。しかし和解を良しとしない関西の過激派が妨害してきます、つまり敵は関西の過激派ですね。ボクが知つてるのは異常です。それでは明日も早いですから寝坊しないよう気をつけしてくださいね。」

「あ、うん お休み ネギ。」

「先生も寝坊したらあかんで！」

「・・・お休みなさい、ネギ先生。」

「アーニャちゃんどしたん？」

「なんでもないわ、お休み ネギ。」

アーニャが少し怪しんでますけど、彼女は思慮深いですから迂闊に不安を煽る真似はしないでしよう。でも刹那さんには相談するかな？刹那さんも何か考えてるみたいでしたし、自分の考えをまとめるために相談するのもいいでしょうね。うん、アーニャに刹那さんそれとアスナさんがいれば、コノカさんの守りは大体大丈夫ですね。

さてと明日は動きを見せますかね。

+++++

修学旅行一日目

クフフ、朝風呂はいいですね。露天でみる朝陽は格別、あくこの

体が子供のものでなかつたらと思つと悔しくてしょうがないです。残念ですが風呂上りの牛乳で勘弁してあげましょ。

わつわと着替えてと・・・まあ、朝はんですね。うんうん、皆さん揃つてますね。でも学年で集まるとウチのクラスは私語が多いですね。罰ゲームがまだぬるかつたみたいで、この修学旅行が終わつたら楽しみです。・・・なんか一気に静かになりましたね。

「それでは麻帆良中のみなさん！いただきます！」

『いただきまーす！！！』

うん、美味しい しかし一体どうやってこのカツオのタタキはこんなにあつさつとさせてるんでしょう？このアサリとワカメの味噌汁もいい塩梅で、煮物もお出汁がきいてたけのこの旨みが生きていますね。

「わつわちやーん！一緒に食べよー。」

「お、お嬢様 そんなにくつかなくともー。」

「あ、あの アスナさん！隣りいいですか。」

「えつ、いいけど。」

さすが京都、漬物が美味しいです。ただ残念なのはボクは京王生菜の浅漬けよりしば漬けの方が好きなんですよね。でも止められない美味しさです。

「やっぱ女子中だね、百合の香りが・・・。」

「のどか・・・（応援するですけど同性はどうかと思ひます。）」

「バカばつかだ。」

+++++

一日目の自由時間、ウチのクラスの生徒（まき絵さんやアヤカさん、エヴァ）と一緒に回らないかと声を掛けられましたが、一つのグループだけじゃなくて他も見回らないといけないといい華麗に口撃をスルーした後、チャチャゼロからの定時連絡を待つ。

『ケケケ、御主人 昨日の連中の親玉が分かつたぜ。ドウスルやつちまうカ？』

『いやいい、それは関西に任せることにする。さよの方はどうなつた？』

『つまんねえナ、さよナラヨ 人ひとり呪い殺せるくらいにはなつたぜ。御主人も大概ヒドイ奴ダゼ、自分を慕つてる奴を怨霊化させるなんてヨ。』

『クフ、ボクを慕つてるからこそだよ。ま、そう仕向けたのもボクだけだね。じゃあ、また次の報告まで待つてるよ。』

『チヨット待つた、酒買つていいカ？』

「・・・好きになよ。」

『ケケケ、マツテロヨ地酒！』

全く自分の欲望に忠実な奴だよ、さよも順調に育つてきてるみたいだね。やっぱりチャチャゼロに憑かせて正解だつたね、人の最後と強烈な負の感情がダイレクトで受けるからかな？

あとは学園長を経由して関西に情報を流したら観光でもしよう、勿論周りを警戒しながらだけね。

+++ +

おかしい！この写真もつ、この写真もあれもこれも、全部おかしい！なんで気づかなかつたんだろ？絡繆さんは明らかに口ボットだし、この中等部の後輩の子は空を飛んでる！麻帆良にいたときは全然これが変だと感じなかつたけど・・・絶対変！

「朝倉さん、行きますわよ？」

「分かつてゐつて！」

「・・・。」

メモメモつと、異常に気づかない異常つと、さてといいんちゅうにこれ以上どやされる前に行かないとな。いいんちょに近づくと奈良公園で村上が鹿に追いかけられていた。なにやつてんだか・・・とりあえずいい顔してるから撮ろ。」

「うわあー……鹿怖えー……」

「あらあら、夏美ちゃんはしたないわよ。」

「うひ、鹿せんべいを奪いにくるとか……。」

「あはは、災難だつたね。レイニー・ティさんは普通に手渡しで餌を渡してるけどね。」

「なんでー……グスン」

村上の時のように周囲を取り囲んで追い回さないで順番に並んで、鹿せんべいを貰ってる。絵になるからいいけど、これも少し変な光景だよね？周りの観光客も奪われてると、レイニー・ティさんにだけ大人しくなる鹿か……他にもなんなか探そうと。

なんだアレ？なんか落ち込んでる本屋ちゃんを慰めてる集団？なんかあつたのかな。

「のどか元気ですです。」

「そ、うそ、アスナが高畑先生が好きってのは公然の秘密だからさ。断られてもしようがないって！それよりネギ先生とかどう？結構、のどか話せるじゃん。」

「……うん。」

なにやら面白やうな雰囲気だね。那波さんも「ハハハ」と笑い、多少焚きつけでも大丈夫だよね。よしそうなつたら、引っ搔き回そう！大体、怪しいのよね。高畑先生つてよく出張するし、去年と

かなにもしてないのに吹っ飛んでる人みたしね。

「そんな本屋ちゃんに朗報だよ、」の前、源先生と食事してる高畠先生をみたよ。どうもアスナの恋は実りそつじゃないね。」

「（余計なことをするなですっー）」

「（くつ、いちいち本のネタになる話はやめて欲しい！描きたくないじゃない！でも友達の恋路を描くなんてこと・・・そんな最低なこと・・・外見を変えれば大丈夫？）」

「・・・私、もう一度アスナさんの所にいってくる。」

おー、走つてつたね。頑張れ恋する乙女、そして何か面白そうな展開にならないかな？さてと・・・うわお、那波さんが怖い。その笑顔が怖い。

「和美ちゃん、駄目よそんなことしちゃ。」

えつ、ま、待つて いやつ放して下さこいつちょっとあ――――。

+++++

ふう、チャチャゼロに食べさせたい鹿せんべい買つたら鹿が襲い掛かってきましたよ。奈良つてすごい所なんですね、おや？のどかさんが・・・横を走り去つていきましたね。どうしたんでしょう？ 次は千鶴にひきづられてる和美さんが居ますね。相変わらず3-Aの生徒は力オスです。

小休止（後書き）

さよ怨霊化！でも無差別に攻撃しないので祟り神？とかそんなかんじです。

ラブコメ（ラヴクラフト・コメディ）

『今日のチャチャゼロ！！』

ミンナ久しぶりだな！いつもの二倍遅れたケド、二倍書いたから
ユルセ。

ジャア、今回の話は「クトゥルー神話」ダゼ

クトゥルー神話の始まりは、20世紀初頭の、米国、プロヴィデンス出身の怪奇小説作家、ハワード・フィリップス・ラヴクラフトダゼ。彼は自分の一連の作品（短編集になっているぜ）中で、極めて独創的で魅力的な設定、背景を使用する事により、宇宙全体に於ける、人類の慾望を示す一つの世界を創り出したこれが全ての元凶ダゼ。

彼とその友人、彼に影響された作家達により、悠久の太古より存在する禁断の存在、外宇宙や地底、深海に蠢く奇怪な種族、復活を待ち望む異質で強大な邪神達やその崇拜者等を擁する背景世界が出来ていったダゼ。

デモナ ラヴクラフトの死後、これらの作品は急速に衰退していったダゼ。忘れ去られようとしていた神話に救つたのがラヴクラフトの弟子であつたオーガスト・ダーレス ダゼ。ダーレスは出版社「アーカム・ハウス」を設立し、生前はほとんど出版されなかつたラヴクラフトの作品の単行本を出版すると共に、新しい作品を書いていった。新たな神話創造の際に、彼は神話体系の変革を行つたんだゼ。

ラヴクラフトの創つた神話は非常に謎めいた部分、不明瞭な部分

が多く、登場する神格についても明確な位置づけがなされていないものが多々テナ。ダーレスは、登場する邪神を「旧支配者（Great Old Ones）」として、人類や現在の宇宙に敵対する存在とし、原初の宇宙の創造者であり、人類に友好的な立場にある神々を「旧神（Elder Gods）」として、「旧支配者」の創造者であり敵対者であると位置づけた。

要するに、ラヴクラフトの神話を、人間の観点から善悪二元論で捉え直した訳だ。他にも属性ごとに旧支配者たちを体系化したりしたんだぜ。

ラヴクラフトの神話を書き換えたということで、一部のクトゥル・ファンの間ではダーレスは受けが悪いが、デモ、クトゥル・神話をここまで広めたのは彼の功績だシリ、この「クトゥル・神話」の形態も既に多くの作品に持ち込まれてカラ、一方的に悪いとは言えないぜ。

現在はこのクトゥルーの設定を使つたりしたゲーム、漫画、小説が出てるぜ、少し疑問があるんだが、イカ娘は見ようによつてはクトゥルー系に分類できそつじやないか？

ソレジヤ、またナ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

クックック、見つけた。これが大仏が金ぴかだったときの名残か、前にテレビで見てから気になっていたんだ。本来の色は全身金色で

髪が青か・・・派手だな、仮の癖に。全くワジサビといつのが分かつてないな、やっぱり東山文化からだな。

『ゼー』

「なんだチャチャゼロか、今忙しいから手短にな。」

『ドウヤラ、ご主人は関西には興味ないらしいぞ。あとサヨに氣をつけた方がイイぜ。』

「前は分かるが後ろはどういうことだ? 所詮ただの浮幽靈じゃないか。」

『ケケケ、これが傑作デヨ。御主人はサヨを祟り神にでもするつもりダゼ、しかもだサヨが貰つた契約カードは【憑キ御靈ノ石】っていうゼ。』

「能力は分かるか?」

『アア、効果能力は魂の操作ダツテ言つてたゼ』

「そうか・・・ふむ、他になにがあるか?」

『ゼー。』

無いのか、それにしても魂の操作か・・・偶然にしても出来すぎているな、幽靈にその能力 誰かに成り代わつてもおかしくはあるまい、チャチャゼロにこの情報を与えたということは私を敵に回す気は毛ほどもないわけか。しかしな畢竟神は貴様に御しきれるかな?

+++++

三日田の朝、昨日の夜は畠さんが枕投げやら猥談をしていた所、騒ぎを聞きつけた新田先生に怒られていきました。ボクはもつときちゃんと指導するよつ言われてしました。それ以外はたいして問題はありませんでした。和美さんは サイフが寒くなつたとか嘆いていましたけど、無駄遣いは感心しませんね。

「ネギ先生、おはようございます。」

「おはようござります、刹那さん昨日は大変そうでしたね。」

「ええ、このちやーーーお嬢様に強引に連れまわされてしまつてしまつして」

口では困つた感じですけど、頬が緩んでいますよ。

「それで何か御用ですか？」

「オンー。」

「じゃんーちびせつなですー。」

「これは式神ですね。いやはや、じんな元マムな刹那さんですか。」

「・・・・もしも時の連絡用に渡そつと思こまつて

「ええ、わかりました。では問題が起きましたら連絡してくださいね。」

「なんですか？本体のその眼は…！」

「コノカさんの護衛気をつけてくださいね。アーニャがついて行くと思つので多分大丈夫でしょうけど。」

「ネギ先生も油断なさらないよ！」

「無視ですか！」

わざと西の廊のところに行つて、刹那さんたちが来るのを待ちましょうか。

+++++

わたし、ひびせつなは、ねぎ先生と関西呪術協会の本拠地に向かっているのですが、どうも先生は通り道をしながら行くみたいです。速く向かわなくていいのでしょうか？

「はい、これじゃも。」

「あ、あつがとうござりますーーこれ鹿せんべいじゃないですか！」

「クフフ、『めぐ』めぐ。はー、ひづりあげるよ。」

「これはみたらし団子……もつちもつち、美味しいです。それでも本体の方はこのちやんに迫られて？あたふたしてますね。だからわたしの操作をしていないためにわたしは自律状態で活動します。

「刹那さんたちの様子はどうですか？」

「うーん、楽しそうですね。今、ゲームセンターでアスナさんについてきた畠崎さんたちとカードゲームをしています……このちやんとプリクラですか、羨ましいです。」

「そうですか、それは良かつた。でも周りに敵影はありませんか？視線を感じたり、不審な人物を見かけたり。」

「うーん、今のところは無いですね。」

はう、ねぎ先生の顔があの時（春休み中にネギにボロられた）の顔になつてます。怖いです ガタガタ

・・・はう！わたしは何を・・・あれ？もつこじまで来たんですねが、じゃあ千本鳥居までスグですね。ムニシ

「はひやうー。」

「くえー、「やめうー」人と同じで柔らかいんですね。なるほどなるほど、「くださつー」この術式はこうなつて、ほうほう・・・・・・「はふう・・・・」いやーこの協力ありがとうございました、ちびせつなさん。」

「何をするんですか！！」

「クフフ、まあいいじゃないですか。もつ着いたみたいですよ。」

「むむむ、まあ、みたらしに免じて見逃してあげます。・・・懐かしいですね、この千本鳥居。あれ?なんか変ですね。こんなに道が長かつたですかね・・・もしやワナ!?

「那儿の人出でんなさい、そもそもこと制圧しますよ。」

「え、えーですかー?」

「ひゅー、こいつちに氣づくとせば流石やな。でもこいつは通とくんで、ネギ・スプリングファイールド。」

「御託はいいの掛かってきてくれ。」

ねぎ先生を知ってる?とこいつとは単に西の過激派だけが敵じゃないようですね。この小学生くらいの少年が刺客ですか、足止めといつたところでしょうが、姿を現すのは如何なものでしょう。

「じゃあ、こいつへー!」

速いつ一動きもなんですが手数も多いです。仄で引っ搔くように手を振るつてきますね。あの年でこれほどの身のこなしですか、間違いなく才能は一流です。

「当たらへん! (クソッ、何でやー! 狹つたといひ腕がついたかくんー。)」

「ひうや! あの少年は誰かに歸事したことは無いみたいですね。ね

ぎ先生の構え、あの左手を突き出す格好が彼の攻めを受け流します。あの少年同様に気を腕に籠める少しだけ相手の攻撃を弾くくらいの気・・・それと後は純粋な技術で無力化しています。

「いれならびやつ！斬狼拳！」

「へえ」

なんとかねぎ先生の後ろを取った少年が鬪氣を纏った腕を振ると、その腕から黒い影のような狼が先生に襲いかかりました。確かに近距離で人よりも大きく速い気での攻撃なら並みの人なら避けきれず、その一撃で勝つたかもしれません。

「虚空閃」

しかし気の練りが足らず、粗が目立ちます。ねぎ先生の余つていた方の手から出てきた鋭い気弾が狼の構成の薄い箇所に当たり、霧散させてしました。

「GYAAA！！」

「千草の姉ちゃんの式神！？」

「おや？硬いですね。」

少年に当たるかと思つた気弾は上から降つてきた大きな蜘蛛の式神が身代わりとなり、少年に当たることはありませんでした。ねぎ先生が驚いている隙に少年が距離を取りました。

「そや、オレは足止めや。遊んでる場合ぢやう、全力で行くでっ

！狗族獣化、疾空黒狼牙！」

「狗族！？先生、気をつけてください！彼は人狼の血を引くものです！」

不味い狼、いや狗神の群れに混じり獣化した少年が姿を消す、ねぎ先生を取り囲んだ狗神はほぼ同時に四方八方から襲い掛かる。ねぎ先生は絶妙な身のこなしで狗神たちの中を動き、一匹一匹仕留めていきます。

「群狼旋空拳！」

狗神の群れに紛れ、低い体勢から群れと一緒に少年が突撃してきました。ですがねぎ先生には・・・分身！？狗神たちの影から五人の少年が飛び掛かる！

しかしねぎ先生は全く動じず、次々に沈めていきます。三、四・・・五体目！これも分身、本物は何処に！？

「（静かに影を使ってネギの背後に転移して・・・貰ひうたでっ！狼牙双掌牙！）」

「ねぎ先生！…」

ねぎ先生の背後の影からスッと出てきた少年が両手に狗神を宿して、両手からの氣弾を放つてきました。危な・・・い？攻撃したはずの少年が宙に浮いて、ねぎ先生の頭上に

「クフフ、君は中々優秀な戦士でしたよ。君に敬意を払ってボクのオリジナルで倒してあげましょ。」

「か、体がうごか・・へんつ。」

「【シユブニ・グラ シュマ・ゴラス 吹き荒ぶ風 間に吼える
獣 天を裂き地を削りし颶風 666の牙で食い破れ 間の慟哭】」

これはっ！？冥い竜巻が少年を飲み込んで・・・いや弾かれた！
結界の術式が軋む音がする、先生の狙いは結界か！？あわわ！吸い
込まれるう。

『ガキイン』

甲高い金属音のようなものが響くと同時に、結界が破壊され元の
場所に戻る。

「・・・うん！我ながら絶妙な手加減でしたね。」

「何処がですかつ！わたしは死にかけたんですよ！」

「大丈夫ですよ、ほらモロに喰らつたこの人も多少裂傷はありますけど死んでないでしょ？それに結界も一緒に壊せたしね。」

そういう問題じゃつ！つう 本体からの気が途絶える！？このま
まじや、先生に文句が言えない！

「おやおや、勝手に消えちゃいけませんよ。えい！」

「ええ！何をしたんですかつ？」

「ちびせつなさんが存在するための気をボクが貯つただけですよ。」

さつき式神の術式は見させて貰いましたから、このへりこなら即興でできます。」

はあ、普通は他人の式の術式を固定するのは難しいと「うか、そんな発想はありませんでしたよ。やっぱり、すこい人なんですね。

「それじゃ、サッサといつて密書を渡してきましょうか。

「はい！行きましょう。」

「あ、ちょっとその前に・・・オン！」

先生は髪を数本抜くと呪文を唱え、ポンッという軽い音と一緒にちっちゃいねぎ先生が現れました。これは式神、しかもですよ。札を用いずに造るなんて、羨ましいです。わたしはそんなに陰陽術は得意ではないので札を補助に使わないとできませんからね。でも髪を取られて呪われても知りませんよ？

「じゃ、君は刹那さんたちの様子を見てきてね。」

「了解。」

「口調が全然違います！」

わたしの言葉は一人に無視されて、ちびねぎ先生はかなりの速さで飛んでいきました。

「それでは関西の長のところに行きましょつか。」

「は、はい行きましょう。」

久方ぶりの協会の総本山はとぎがとまつたように変わりないようであったが、いつもなら詰めているはずの人が出払っているみたいでした。

巫女服の女性に連れられて着いた先は、広い座敷でどうやら少し長を待たねばいけないようです。

「お待たせいたしました、関東魔法協会からの使者殿、私が関西呪術協会の長を勤めています。近衛詠瞬です。」

「い」れば丁寧に麻帆良学園教師をしていました。ネギ・スプリングフィールドです。早速ですが、これをどうぞ。」

「東からの親書ですね、わかりました。では私は仕事が立て込んでおりますので、案内には そこの刹那くんの式神をつけますのでゆづくじしていってください。」

「わたしがですか、分かりました。ねぎ先生こっちです。」

長と先生の用は数分で終わってしまい、わたしはねぎ先生をこの総本山を案内するように命じられてしまいました。どこに案内すればいいのでしょうか？

「あのねぎ先生、どこにいつて見たいですか？あ、でも書庫は無理ですし、長の執務室や術師の部屋も立ち入りはできませんよ。」

「そうですね、お風呂でも入りましょうか。」

「へえ？」

+++++

ミッション開始、任務内容はターゲット桜咲刹那及びその他の人
物のところに行くこと。現在、時速60キロのペースで移動中、タ
ーゲットがいると思われるシネマ村までおよそ35分。

見えました、ターゲット桜咲刹那、神楽坂アスナ、近衛コノカ、
アンナ・ココロウア他数名を確認。現在戦闘中の模様・・・ミッシ
ョンの更新を確認しました。ミッション・ターゲットの安全確保。

桜咲刹那と月詠の戦闘は拮抗、アンナ、アスナの両名は敵の式神
の排除をしている模様。近衛コノカは式神を排除している一人に挿
まれるように守られている。この状況から見て起こるえる事象は
1、こここの従業員の介入による決着 2、敵増援の参入 3、第三
者の介入の三種に設定、現状維持を選択。

魔力反応を感じ、位置は近衛コノカの半径1M、予測番号2番に
絞りこみターゲットの安全確保を行います。

「さて一緒に来てもらひつよ。」

「ほえ？」

「手伝つてあげましょつか？ただし真つ一一つです。」

近衛コノ力に接触しようとした白髪の少年、フェイト・アーウェルンクスと目される人物を排除します。本体からの魔力供給を増加戦闘モードに移行します。なお一般人の目がある為視認し難い魔法を選択、風属性魔法【碧き疾風】を無詠唱で発動、本来の出力の40パーセントを確認、敵対象が回避に移行しました。上空に上がった敵を追撃します。

魔力の物質化により近接戦闘を可能にし、白兵戦に持ち込みます。数え抜き手4321、敵対象に無力化されました。対象の動きの癖から八卦掌の使い手と予想し、攻撃に対応します。

「つ！？ボクの技が効かないっ、ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト【石の息吹】！」

石の息吹の発動の確認、式神であるため効果無しと判断します。さらに魔法供給の増加、風精召喚及び精靈の取り込みによる一時的速度の上昇を確認、下腿部に魔力を集中し、虚空瞬動の使用を準備します。

「君は式かつ！？」

敵対象の防御体勢への移行を確認、敵対象の障壁の出力が140パーセント上昇、上級魔法以下の出力では突破不可能と判断します。羅刹拳を選択、虚空瞬動を発動、障壁をブチ破ります。

「不味いっ！？【石の楯】！」

敵対象の障壁、魔法作用による魔物質の盾を貫通、対象にダメージを与えました。しかし致命傷では無かつたらしく撤退していきます。

戦闘モードを終了します。ミッションコンプリート、帰還します。

「ちよつとそこちよつさいネギ！降りてきなさい！」

「了解、何か御用ですか。」

ミッションを更新します。

ターゲットアスナはなにやら言葉に詰まつた様子、此方に近づいてきた刹那に視点を変えます。

「現在、この身には認識阻害が掛かっていますので、人影の無い所を進めます。」

「え、ああ、そうですね。アスナさん、お嬢様、アーニャさん行きましょう。」

人気のないところへ誘導します。ターゲット「ノ力の興味の視線を認識、無視します。ターゲットたちの様子から現在の状況、本体の居場所、これから活動を提案させていただきます。

「現在敵勢力を4人確認しました（他の西の過激派は関西が相手をするようなので除外）陰陽術師、神鳴流剣士、狗族戦士、八卦掌の術者です。次に本体の現在地を報告します。現在、関西呪術協会総本山にあります。次に貴方達のこれから行動についてですが、本体との合流、麻帆良への帰還をお勧めします。」

「あんたはネギのえつと・・・式神なのよね？」

「その通りです、アンナ。」

「刹那さん、ネギと合流しましょ。」

「そうですね、先生も田町を黙たして狙われないでしょ。」
「以上は対処しきれません。一旦合流した方がいいですね、関西との協力も期待出来そうです。」

ミッションを更新します。ターゲットの護衛、目的地は本体の場所まで。

「それではネギ先生に連絡を・・・あつあつ」

「じうしたの刹那さんー！」

「わっしゃん、どしたん？」

「いや、神とリンクしたよつですが、なにか問題があつたんでしょう？」

ひたすら旗が立つ話

『今日のチャチャゼロ！…！』

ミンナ、オレダゼ。今回は前回に引き続きクトウルフ系で行くぜ。今日は「ツアトウグア」ダゼ！エッ、ソコハ「クトゥル」だろ」Kつて？一番好きな旧神だからショウガナイゼ。

クトゥルー神話中で一定の地位を占めるこの神ハナ、クラーク・アーシュトン・スミスによつて創作された奴ダゼ。スミスはツアトウグアの生い立ち等の細かい設定作りや肉付けまで行つてるぜ。

アザトース（創造神）の子であるクグサクスクルス（アザトースの分裂繁殖体 両性具有）より生み出されたギズグス（クトゥルー、フジウルクオイグムンズハーと兄弟）と、分裂繁殖する生物イクナグニーススズより生まれたズズトルゼームグニ（女性格）の間に生まれた子がツアトウグアである。つまりクトゥルーの甥でアザトースの曾孫ダナ、スゲエゼ。

彼らは一族で遙かな宇宙の彼方から太陽系に飛来してユゴス（冥王星）に移り住んダゼ。しかし、クグサクスクルスは人肉嗜食（多分、自分と同じ神性をもつ者ダロウナ）の性質を持つていたため、フジウルクオイグムンズハー（叔父）は惑星ヤクシユ（海王星）、次いでサイクラノーシュ（土星）に移り住み、ツアトウグアは両親と共に、クグサクスクルスの破壊を免れた洞窟に長きに渡つて潜んダゼ。つまりだ、祖父に喰われないように逃げたつてことナシダゼ。

クグサクスクルスはユゴスに住み続けたが、やがてツアトウグア

はフジウルクオイグムンズハーのずっと後にサイクラノーシュ（土星）に渡り、地球が出来た頃に別次元を経由して暗黒の地下世界、ンカイに現れた（別次元を通るには闇が必要らしいぜ、エヴァの影を媒体とする転移魔法みたいな感じだナ）。

地球上に居を移したツアトウグアは、ンカイの上にある赤く輝く地下世界ヨトの『ヨト写本』に言及され、青く輝く地下世界クン・ヤンで崇拜されタゼ。

北極に古代文明ヒュー・ペルボリアが栄えていた頃は地表近くまで移動し、首都コモリオムに程近いエイグロフ山脈、ヴーアミタドレス山の地下の洞窟に棲んで、ヴーアミ族や一部の人間に崇拜されていたヒュー・ペルボリアに於いては邪教として禁止されていたにも関わらず、末期にはツアトウグア崇拜が大流行する。

ツアトウグアの崇拜者であつた魔導師エイボンの遺した『エイボンの書』はもちろん、ロマールの『ナコト写本』などでもツアトウグアのことが語られてルゼ。

やがて氷河期が訪れ、ヒュー・ペルボリアは滅亡し、ツアトウグアは再びンカイに戻った。

シャタク（妻）という来歴不明の神性との間にズグUILポググーラという子を設けており、その子スファティクルルブがヴーアミとの間に産み落としたのがクニガテイン・ザウムともいわれている。見事にリア充ダゼ。

ツアトウグアは不定形で可塑性の体を持つと言われてルゼ。人間には全身を覆う柔毛に、蝙蝠に似た顔、ナマケモノを思わせる胴体、細い目を持つ太鼓腹の蝦蟇に似た姿をしてるらしいぜ。

人間には怠惰とも思える行動原理に従つていて、空腹の時でもじつと動かずに獲物、あるいは生贊を待ち続けルゼ。満腹の時は人間

と出合つても穏やかで中立的な態度を取るから話せば、分かるぞ。

クハ――――！ イイゼ―カワイイゼ―なんというか、オレの萌え
ポイントのど真ん中ダゼ―ジャア、また今度ナ！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

兄貴を探して京都にやつて来たのはいいんだが、クリスの爺さんが京土産を買いたいつって一日がおわっちまつた。んでだ、兄貴の宿泊先に着いたんだが、もう出ちまつてよ。クリスの爺さんはまた夜にでも行こうつづらんだがよ。

「（やつぱり兄貴の嫁候補は見ておかないとなつ―）」

「なーにを言つてるんだか・・・。」

「（クリスの爺さんもお孫さんに会いたいだろ？ そしたらやつぱ兄貴と一緒にいるに決まつてるぜー）」

「・・・ま、好きにしたらいじだらう、それでカモよ。ネギたちの居場所は分かつてるんだる？」

うへへん、二箇所に兄貴の魔力反応があるんだが・・・あつ、この魔力に敏感なのはオゴジョ妖精特有のスキルだからその辺の魔法使いじや真似できねえぜ。こつちの近い方から行くとするか。えつと、太秦だったかな？

+++++

シネマ村、わざわまでの喧騒が嘘のよつこいつもの穏やかな空氣に満たされていた。

「カモよ、どひじや？」

「（うん、近いぜ！兄貴は田立つからその辺の人へ聞いたら誰か知つてると思ひや。）」

「しあがない……どれ、そこのお嬢さん方、ちょっと人を探しているんだが……。」

「（「クリッ、一切の躊躇無く話しかけにいつたな、流石はクリスの爺さんだ、伊達にウェールズの怪人呼ばわりされてねえや。）」

なにやら相談している修学旅行生らしき女子達に話しかけるクリスの爺さん、どうやらこの女子達は兄貴の知り合いらしく、ネギ先生と呼んでいた。

「ふつふつふ、実はアスナの鞄のポケットにGPS付きの携帯を仕込んでおいたのさつ。」

「流石だつ、朝倉最低だつ！」

「そんなに褒めないでおくれよ。」

う~む、この朝倉とかいう女は人としては間違ってるがこっちとしては助かるな、ある程度近づけば、詳細な場所が分かるからそれまで、一緒に向かうほうがいいな。それにしてもこの朝倉って奴は

常に周りを意識して、人の様子を窺つてゐるな。だから咄嗟に判断で
きると見た。

「なかなかいい根性をしているな、君の友達は。」

「恥ずかしいです。それで朝倉は私に何を見てもらいたいんです
か？」

「あつそうとう、これだよ、前にゆえつちがなにやら私に噂とか
聞いてきたじゃない？あの時は大したことは分からなかつたんだけ
ど、この写真・・・この隅のほうで人が飛んでるよう見えないか
な。」

あぢやー、ドジな奴もいたもんだな。一般人にバツチリ撮られて
るじゃねえか、マホラつて所は結構そういうとこ緩いな。「この才
ゴジヨ、冬毛なんですね。」「ウェールズはまだ結構寒かつたから
ね。」「うう、そんなにつつかないでくれ、意外と痛いんだからな。」

「・・・・・確かに人が杖に乗つて飛んでいますね。」

「うわっ、ホントだ！でも朝倉ならこれくらい合成できそうだけ
どね。」

「失敬な！でも不思議なことにこれに気づいたのは修学旅行に來
てからなんだよね。昨日の気分転換に新聞のネタをまとめてたら見
つけてさ。」

「（よく撮れてるじゃないか、ちょっとピンボケしてるが、個人
の特定は可能だな。）（どう場合はどうしたものか、カモはどう思
う？）」

「（うーん、兄貴の生徒だから危ない目に遭わせるわけにはいかねえ、でもこれはマホラの落ち度だからこっちで判断するもの不味いし、やっぱ関係者の兄貴に相談したほうがいいと思つぜ。）」

クリスの爺さん、オレっちは聞いといて無視すんなよ。駄目だ、あの顔はなにか企んでる時の顔だ。すまねえ、兄貴なにも出来ないオレっちを許してくれ。

「あれ？ アスナの動きが止まつたみたい。」

「気づかれたかもしれないな。（力モ位置は大体把握できる位置まで近づけたか？）」

「（バツチリだ！ 兄貴の近くに馬鹿でかい魔力があつていい目印になつてるぜ。）」

「うつそー？ アスナのくせに気づいたのー？」

「ぬつふつふ、大丈夫だ、私の孫センサーがビンビンに感じるからな！ ついて来い！（力モ、道案内は任せたぞ。）」

+++++

うー、まだ頭がじつちゃになつてん。えーっとなーうちの実家の近衛家は代々陰陽師の家系で、何度も呪術協会の長になるくらいの名家だつたみたいや。そんでな、ウチのお祖父ちゃんは関東魔法協

会の理事でかなり偉いなんて、お父様も関西呪術協会の長や、しかもウチは極東一、下手したら世界で一番の魔力量持つててん、だから誘拐されかけたらしいで。

しかも誘拐しはった人は呪術協会の幹部らしくてな、色々複雑なんやで。

「ミッション更新しました、神楽坂アスナの所持品の中の追跡媒体をココに置いていきます。」

「えつ？ なにこの携帯……。」

「のちいさいネギ先生は陰陽道の式神なんやけど、なんで西洋魔法使いのネギ先生がつかえるのん？ それにしてもさっきの動きはすごかつたなー、いきなり後ろから出てきた白髪の少年を撃退してな、よう分からんうちに終わってしもたけど、カッコよかつたえ？ 本人じゃないけどな。」

「そういうえばネギ先生少し聞きたいんやけどな。」

「何でじょうか。」

「なんでせつちゃんとかネギ先生が居るのに、今すぐ合流せえへんとあかんの？」

「それは次は守り切れないからです。さっき凌げたのも此方に地の利があつたのと、この僕が相手の不意をついたからです。一般觀衆の目があることにより相手は派手な立ち回りが出来ませんでした。次は人払いもしてくるでしょうし、このボディは本体の40%ほどの出力しか出せません、もし本体でしたらあそこでアイツを仕留め

ていたでしょが、僕では手傷を「える」としかできませんでした。

」

「それに次やつたら確実に封殺されるでしょう、それほどの力を
アイツは持っています。だから・・・戦闘モードに移行します。」

小さいネギ先生がまた大きくなつた、あれ?せつちゃんとかアーニャちゃんも構えたつてことはまたさつきの人達?先生が消え「【セルフバーニング】」わわつ、すごい速さでこっちに来た人にブツかつて弾かれてもーたけど、一緒に火が纏わりついてるな。

「これはマズッ「ヌハハツ遅いぞ!【フレア】」

ボン!つて爆発して・・・ネギ先生!ネギ先生が・・・つて式神やつたつけ、見事に灰だけになつてん、これつてピンチ?せつちゃんが背後から切りかかるけど、デジヤブ?

「貴様ツ!斬がつ」

「なんだ偽者だったのか、詰まらん【セルフバーニング】」

あかん!?せつちゃんが灰だけになつてまつ!あつあー、火が纏わりついて!

「【アーニャ・タイラントエッジ】ー!」

「【セルフバーニング】」

ふう、アーニャちゃんが白髪のお爺さんに攻撃してくれて助かってわ、でもそれって火が無くなつたらただの飛び蹴りとちやうん?

さつさから見てて思つたけど、肉弾戦がやがひんか？魔法使いつて格闘家なん？

「助かりました。」

「別にいいわよ、あとなんかつむのお祖父ちゃんがすみませんでした。ほらお祖父ちゃんも言い訳してよー！」

「ぬふ、いや久しぶりにネギと遊ぼうと思ったら、前より全然弱くて、ぬはははっ！」「

なんか個性的なお爺さんやね、みんなポカんとしとる。ん？あつちから走つてくるのは、コ工達や。なんや和美が家政婦は見た！ばりの表情してるで、もしかしてさつきの見えてたん？アーニャちゃんのお爺さん、魔法使いは魔法を隠さないとあかんとけりやつ？

「ぬつはつはーべりかせり見られてしまつたよつだね。じょうがないから魔法使いである君たちの担任のネギ先生に相談しないといけないね！」

「えつーーネギ先生つて魔法使いなのー？」

「はあ、このクソ祖父は何考えてるんだか・・・。」

せつちやーーん！そんなに落ち込まんといつーきっと先生がなんとかしてくれるので、えと先生に迷惑をかけちゃつ」と落ち込んでるつて？そ、それはフォローできひんわ。

「何も出来なかつた、オレっちを許してくれ兄貴・・・。」

オコジョが喋ってるのにみんなスルーする奴や、混乱した奴や。
あかんで私もどうかしそうや。

ひたすら旗が立つ話（後書き）

お久しぶりです、前回が22日ですので八日ぶりですね。
やっとテストが終わったので更新しましたよ。久々だと中々上手
く進みませんね、でも修学旅行篇もあと3話くらいで終わりの予定
ですので、期待しないで待ってください。

深淵を覗き「むじや

『今日のチャチャゼローーー！』

ミンナ！待たせたナ！・・・待つてないなんてつれないこと言わ
ないでクレヨナ。

サテ、こんな遅れた理由ダガ、大したことはないぜ。自動車の仮
免許とつて、漢検受けて、3rdプレイしたり、チャチャゼロのM
USIC入りを目指してたりしてたダケダゼ。

アヘ、オレもモンスター狩りテーナ。マツ、作者も一ヶ月で20
0時間以上もやれば、気が済んでこれから更新していくけど期待ス
ンナヨ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

関西呪術協会、本拠地（コノカさんの実家で、今絶賛関西から
の覗きにあつてます。）のお風呂に入らせていただいてます。何故、
こんな昼間つから湯に使つてるかというと、原作でもこのお風呂場
でコノカさんが誘拐されたんで、あらかじめ術式を張つておこうと
思いましてね。勿論、発動まではれないよう隠蔽を重ねてます。

「ねぎ先生何してるんですか？」

「んー、式神と視覚を共有してるんだよ。」

「へー、今おじょう様たちばかりうなつてるんですか。」

「戦つてる。」

「へ、だ、大丈夫なんですか！？誰か怪我とかしてませんか！？」

「大丈夫みたいですよ。」

あつちは大変そうですね。お、どうやらフュイト君も出張つてゐみたいで・・・このチリチリとした感覚、もしかして彼が宿敵？・・・違いますね。今までの彼らより薄いです、ということはフュイト君の親玉さんですかね。

とりあえずコノカさんを守つつつ、フュイト君の力を計つてください。

「ねぎ先生の笑顔が怖いです・・・。」

「何かいいましたか？」

「いえ！なんでもないです！」

あら？思つたより反応が鈍いですね。街中というのも考慮しても・・・このフュイト君は戦闘経験が少ないみたいですね。この性格からみても騙まし討ちに弱そうですね。うーーん、計画変更ですね。本当は月詠さんを捕まえて獅子身中の蛆にするつもりでしたけど・・・。

「それじゃ、上がりましょうか？」

「はい……。」

「……？ 上がらないのですか？」

「はうひ……。」

なんか寝てしましましたね。のぼせましたか？・・・ん~、あれですね。9歳なのにこの筋肉だと身長の成長が阻害されそうですが、これくらい無いと普段の鍛錬すらままなりませんから170cmまで伸びればいいほうです。いやでも・・・いま150近くありますし、さつといけます。

「はつー私は何をつて、これ最近多いです。」

「気に入らぬ田ですよ。あつ・・・ちつ、クソジジイがつ

「ひい、ねぎ先生びひしたんですか・・・？」

クリスさん、やつてくれましたね。その人式神だつてわかつてて攻撃しましたね。はあ、しょうがないですね。彼は昔から自分が良ければ全てよし、丑つ他人の不幸は蜜の味を地でいつてましたから。

「ちよつと長て客が増えることを云えないといけませんね。」

「えつ？」

「ああ、行きますよ ちびせつなさん。」

「ちよつと待つてくださいよーー色々と何が起こってるんですか
～！」

計画変更、さよとチャチャゼロを呼ばないといけません、今夜は忙しくなりそうです。

+++++

ネギ・スプリングフィールド・・・か、式神でアレくらい本体はどれくらい？
どうやら瞞めてかかつたひじがやられてしまつね。

「新入り、傷の具合はどうや～？」

「別に問題ないよ。」

そう問題はない、確かに人間ならアバラが折れて肺に突き刺さるような強烈な一打だつたけど、僕は人形だからね。【再生】を使えば殆ど直るし、最悪部品を換えればそれで済むから何も問題は無い。

「そりいえば、小太郎君はどうしたんですか？」

「小太郎はわき上から連絡があつてな、捕まつたらしいで」

「ふーん。」

天ヶ崎さんは頭を抱えているけど、月詠はたいして気にしてない

みたいだね。僕としては、天ヶ崎さんには悪いけど、極東の霸権争いや彼女の復讐には興味ないんだよね。目的の月詠の勧誘にネギ・スプリングフィールドの観察も大体済んだし、そろそろサヨナラかな。きっとスクナは関西かネギに潰されると思つしね。

「どうするんですかー？」

「・・・予定通りに今夜も仕掛けます。新入り、いけるんやな?」

「問題ないよ、昼間は手加減をしてたし、人の前だつたからね。」

手加減していたのは事実、でも予想よりネギが強いのも事実、ふう、さつさと終わらせてコーヒーが飲みたいね。

+++ +

修学旅行初日、ネギ先生の挨拶や学年主任に新田先生の注意が終わり、新幹線に乗った私たちに妙な事が起こりました。

添乗員から買ったお菓子（正確にはそのものではなく箱から出できたが適切です。）がカエルに変わってしまいました。多少の混乱（源先生や長瀬さんが気絶していました。）があつたものの收まりました。このへんから嫌な予感はしていました。

その切つ掛けはのどかでした。のどかが神楽坂さんに告白して玉砕それまではよかつたんですが、朝倉が余計なことをして（多分）かなわぬ恋が再燃、お友達から宣言をして、翌日神楽坂さん達を追

つて自然な感じを装いつつ、接近することになりました。

「ユエ、私諦めない！まずはお友達から。」

「え、諦めて欲しいです。神楽坂さんは好きな人（公然の秘密つて奴で高畠先生です。）がいますので厳しいです。ちなみに朝倉の所持金の半分は私たちの食費に消えていきました。」

『ユエってや、オカルトとか詳しかったよね？』

『まあ、そういうものも読みますので。』

『じゃあ、見て欲しいものがあるから、明日合流出来ない？』

一日目の深夜、突然朝倉から掛かってきた電話は、どうやら私は見せたい物があり、それに対する意見を貰いたいというものでした。朝倉の声のトーンは彼女らしくない自身のないもので、確証のないもしくは信じたくないものを見つけたような様子を窺わせました。

三日目、班で自由行動の私たちは適当なところで神楽坂さんたち6班と合流（あの時の神楽坂さんの引きついた顔には同情してしまいました。）し、朝倉たちの目的地であるシネマ村に向かうことになりました。

シネマ村で待っていたのは、コノカを狙つた騒動でした。貸衣装に着替えた私たちの前に現れたのは、ドレスを着た女性で桜咲さんに決闘を挑み、去っていきました。ここまでは良いのですが、問題はその女性と桜咲さんが真剣だったとことです。

彼女達の戦いは非現実的なもので、周りの人は見世物だと思ったみたいですが、明らかに常軌を逸脱したものでした。自らを神鳴流と語った女性、月詠の呼び出した【百鬼夜行】というものは、更に私を混乱させるものでした。小さく可愛らしいおびただしい量のヌイグルミのようなものが群れてやつてくるのを見て、怯えてしまいました。

それと同時に理解してしまいました。これを見世物として面白がっている大衆、真剣な姿で茶番を繰り広げ非常識的な動きの出来る桜咲さんたち、との温度差、隔たりを感じました。

「お嬢様はっ！私が守るっ！」

「せんぱーい、もっと楽しみましょー！」

この唐突な事態に冷静に対処できる彼女たちは、私の知らない世界を知っている。私の知識欲が首をもたげましたが、思い留める。戦っている桜咲さんの叫びは私を平静にし、あまりのショックに思考が暴走していた私に強い衝撃を与えるました。

桜咲さんの強い意志と思いまは、私に現実感を持たせ、私にすべきことを認識させました。事態の收拾やコノカについては彼女達に任せ、周りの人をどうにかして避難させようと思いました。

「さて一緒に来てもうつよ。」

「ほえ？」

「手伝つてあげましょーつか？ただし真つ二つです。」

しかし私が行動を起こす前に事態は急展開を迎きました。突如、

コノカの背後に現れた少年を空から降ってきたネギ先生が強襲し、激しい接近戦になり、深手を負った誘拐犯は退いていきました。

騒ぎが収まると急速にいつもの喧騒に戻りました。不気味なほど、異常なまでにです。

私が先ほどの戦いに気を取られると見知らぬお爺さんが話しかけてきました。どうやらネギ先生を探しているようで、私たちがネギ先生のクラスの生徒と知ると、含み笑いをしました。

私はこの顔を知っているです。私のお祖父さんも私に問題を出してよくこの表情をしたです。・・・でも何故でしょうか？流れる汗が冷たいです。

私はこの人から離れようと朝倉に話しかけました。朝倉が取り出したのは数枚の写真、少しピンボケしていましたが、被写体の後ろに写っている空にいる人、連續して撮られた写真には空を飛ぶかのようになに移動している人が克明に写り込んでいました。

「・・・・・確かに人が杖に乗つて飛んでいますね。」

この杖に乗つている少女は確かに・・・図書館島でよく見る人です。しかしこのような杖を持つてるのは見たことないです。隠しているのでしょうか？でも朝倉の写真に写っている。そういうえば学園の噂にも『空飛ぶ人』というものがあつたです。やはり魔法使いは実^ゼ

「本当に人が飛んでるみたいだね。」

「ですよね！」

私の後ろからお爺さんが話しへ入ってきました。その際、小さく折られた紙が手渡されたです。心臓が痛いほど鼓動しています。

渡された紙に書かれていた言葉は私を搔き乱してすっかり冷静さを奪い去つていったです。

深淵を覗き「むとき（後書き）

お久しぶりです。およそ一ヶ月ぶりの更新です。
筆不精にも程度がありますね、申し訳ない、頭の中で話しが出来て
いるんですが、文にならなくて困りました。
それではさよなら

ジョインジョインゴー

『今日のチャチャゼローーー』

オッスオスオス、チャチャゼロダゼ。今更ダガ、この小説が参考にしているモノを説明してみるぜ。まず主人公のネギ、コイツハ簡単ダゼ、『グラッブラー刃牙』の郭海皇 + ダゼ。

サブタイトルとかも元ネタがアルゼ、別に解説はしないけどナ。前作やバル様を見た人なら分かると思うけど、かなり雑にネタを盛り込んでるぜ。○○ガシタカツタダケー、とはよく言つたものダゼ。

それとちょいちょい出でてくる『真の天才』ってフレーズも引用ダゼ。『スレイヤーズ』に出てくる魔王シャブラニグドウが主人公をそう表現したところからダゼ。オリジナル魔法や技も元ネタがあるけど、突っ込まれると作者の中二病がこじれるから簡便ナ。

本来なら作者は主人公に重破斬をさせたかったみたいダゼ。じゃ、マタナ！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

初めはなんだつただろつか？

子供の頃から本を読むことが好きだった私はいつしか知識を求める探求者となつた。

肉親を失くした私は魔道士に引き取られ、そこで魔術や学問を学んだ。

悲劇的な事件の後、私は放浪の旅に出た。

旅の果てに辿り着いたのは、深淵、地底の奥底、ン＝カイ。私はそこで大いなるモノにであつた。私は大いなるツアトウグアに真の叡智を授けられ、崇拜するよくなつた。

『世界を知るものは世界の所有者である』

私は知の信望者であり、学者であり、魔道士だった。

『無知であることは罪である』

深淵の知識を使い宇宙を彷徨い、新たな知識を蒐集する。無知な私はひたすら貪欲に求めた。幾多の生を貪り、時には愚かしいことをした。

『しかし知を持つことも罪である』

私には唯一の友がいた。互いを憎み、羨み、ときとして互いに刃を突きたてた。私は彼の精神の高貴さに、彼は私の才を羨んで。

『知識を求めるものよ、心するがいい、その先に果ては無い』

友よ、願わくば幼き幻影に導きの手を。

友よ、貴様の苦労する姿が何よりの愉しみだ。

+++++

お爺さんに渡された紙にはこう書かれていたです。

『世界を知るものは世界の所有者である
無知であることは罪である
しかし知を持つことも罪である
知識を求めるものよ、心するがいい、その先に果ては無い』

世界・・・状況から見て魔法又はそれに準ずるもののことじょううか？なら所有者とは、魔法使いのこと。

無知は罪・・・知らないことが何故悪いことなんでしょう？それに知っているといつことが罪なんでしょう？わかりません・・・。

知識を求める人、これは私？終わりが無い、どうこうことじょううか？

「ユエー、どうしたのー！」
「ユエー早く来ないと置いてくよー」

私がお爺さんの意図を読み取つてゐる内に置いてかれそうになつてました。急いでのどか達に追いつかないと！

「今いくです！」

追いついてみるとお爺さんがいませんでした。どうやら先に一いつ
たようなんですが……速すぎですね。やはり……魔法……？

『・・・ズズズ・・・』

「うーんちみたい！」

い、石畳がつーじゃなくてつーいきなり何が起つてるんです！
先ほどの人たちが来たにしては、和やかですが……燃えた紙に
・・。

「ぬふ、いや久しぶりにネギと遊ぼうと思つたら、前より全然弱
くて、ぬはははつ！」

此方を見て愉快そうなお爺さん、魔法つて隠さないといけないん
じやないのですか？

「い、今のつて魔法なの！？」
「お爺さん…どうなの！？」

いや、朝倉にパルもそんな直球に聞いても……。

「ぬつはつはーじつやじり見られてしまつたよつだね。しょうがな
いから魔法使いである君たちの担任のネギ先生に相談しないといけ
ないね！」

バラしたーーーつ！！

「えつ！ネギ先生って魔法使いなの！？」

「はあ、このクソ祖父は何考へてるんだか……。」

しかもネギ先生のことも……あれ？ネギ先生が居ませんね。

「……はあ、みなさん落ち着いて下さい。私が説明いたしますので、アーニャさんそちらの『』老人は任せましたよ。」

「わかったー！一度とこんなこと出来なによつにしてやるわー！」

説明してくれるのはいいのですが、桜咲さん頬が引きつりますよ。『』口ロウアさんは、物騒すぎませんか？

+++++

「とにかくことで私達はネギ先生に合流するためにお嬢様の『』実家に向かつていふところです。」

「話して大丈夫なの？」

アスナさんの言つとおりですが、お爺さんのせいで手遅れかと。口ロウアさんとお爺さんの鬼いつこもまだ続いてますしね（魔法を使いまくってるのです）。

「ええ……ネギ先生になんとかしてもらいましょう。クリスマスさんは、ネギ先生と知り合いみたいですし……。」

いわゆる丸投げとこつやつです。

「はあはあ！」

「ぬつはつはーアーニャもこい動きするよつになつたなー！」

「クリスの爺さん……あんたすげータフだな。」

終わったみたいで。……」これはすゞいつ、千本鳥居というやつですか……? ……このかが俯いてますがどうしたんだじょう。

「このか、どうしたです？体調でも悪いですか？」

「ん……あんな私の家みても引かんといてな……。」

「……何がですか……なるほど大きい屋敷ですね。でもこのメンバーで引くような人はいませんね、純粋に驚いてたり、感動します。このかの心配は無用だったです。」

「ぬつはつは！絶景かなつ！」

「あのうちのクソジジイが色々とすみません、ちょっと旅行で浮かれてるみたいで、いつもはもつと落ち着きがあるんです……。」

「このおじいさんは全く自重しませんね。あつ、いいんですよ。口口ウアさんが謝ることは無いです。それにのどかが迷惑を掛けないですか？神楽坂さん関係で。」

「…………。」

「おかげり、コノカ。」

「お父様っ！」

「ひさしぶりだね、大きくなつて……。」

「お父様……少し瘦せたん？」

親子で感動的な再開を邪魔しないように大きいやのから出てきた

巫女さん達に連れられて広間にやつてきましたです。

「広間でこのかのお父さんから挨拶やらがありましたけど、割愛するです。それよりもひつそりどこかに行ってしまったお爺さんと『』にいるはずのネギ先生を探していると一人は何かを話しているようでした。

「どうやら隨分と使つたようだな、ネギよ。」

「五回・・・いや六回かな、あと何回くらい使える?..?」

「・・・? 何の話でしょうか、文脈からいつて身体に負荷の掛かることをしているようですが・・・やはり魔法ことですかね、それも禁忌と呼ばれる。」

「時間を空ければ・・・そうだな十回はいけるか? しかしなネギ、短時間で連續で使うとすぐに進行するぞ。第一媒体も無しに生身の貴様が扱うこと事態が間違ってるからな。」

「クフフ、前世ではこの力で好き放題してたじゃないですか。ねえ、エイボン?」

「エイボン? お爺さんの名前はクリスのはずでは、それに前世ってなんの話ですか?」

「モルギ、懐かしいな。一人で旅した時が・・・。」

「クフフ、あの時邪魔が入らなければ、君を殺せたのにね・・・。・・まつ、悪く無かつたよ。」

「・・・・・見つけたのか? アーニャや貴様の教え子はどうするつもりだ。」

「置いて行くさ、それが僕の存在意義だからね。」

「そうか・・。」

置いていく？単にマホラから出て行くなどの話ではなきれいですが、それにまた新しい名前が出てきました。・・・前世？ネギ先生達は生まれる前の記憶があるのですか？

「タイムリミットは2012年だつたな、あらかた準備は出来ているぞ。いつ使うかは貴様が決める、マホラの長には計画の詳細を話したのだろう？ぼやいていたぞ、露骨に脅されたとな。」

「いやはや喰えない爺さんだね、どうせ笑いながら言つてたんでしょう？まあ、あの人の人脈があれば問題なく進みそうですよ。それじゃあ、西の長によろしくお願ひしますね。」

「・・・ああ、貴様の教え子達は任せとおけ。」

まず一つ、急いで離れないと…

このこと Malone たちに相談するべきですかね？

ジョインジョインゴー（後書き）

クソッ！おわんねえ！・・・」ほん、失礼。
でも長いです。これ以上飛び飛びにすると自分でさえ、理解でき
なくなるので我慢です。

次からは戦闘パートなのでサクサク？行きたいところですが、前
作同様長くなる気がしないでもない。
今更ですが、感想をみてもらうと表現しようとしていたものが、
分かつて分かりやすくなるかも？
それではさようなら

全てを置き去りにして

『今日のチャチャゼローーー!』

ケケケ、コツチは何時もドーリ平常運転ダゼ。今回の題は「ヤシマ作戦」ダゼ。

新世紀エヴァンゲリオン第六話において行われた、第5使徒ラミエル殲滅作戦の名称で、作戦立案者で実施責任者の葛城ミサト一尉によつて命名サレタ。

強固なA・T・フィールド、強力な荷電粒子ビームを持つ空中要塞と比喩された第5使徒に対して、使徒の射程外から陽電子砲による超長距離狙撃を行なう作戦で作戦の成功率は8・7%。

という内容ダゼ、今なんでヤシマ作戦（節電）って言われてるかというトナ、エヴァのヤシマ作戦は日本全国の電力を全て徴発して実施（その時は、皆が節電といつか電気が使えなかつた）されたことに掛けてるんダゼ。

正直ピンときついに、まあ節電自体はいいことダゼ。ジャアナ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

静まり返つた本拠地内、廊下を足早に去つていく足音を見つめな

がら、次の場面に行くために下に下りていく

「綾瀬ユエに話を傍聴させたのは何故だ」

「クリスお爺さんが原因なんだけどね・・・聞きたい？」

「言ひ氣が無いくせに訊くな、お前の秘密主義は今にはじまつたことでもないからな」

まずそのニヤついた顔をぶん殴りたくなつたが、それよりも優先しなければならないことがある。ぼくは浴場に急ぐことにした

行く先々でここの人達が石化している、フエイトがやつたようだ。浴場からはこのかさん達のはしゃぎ声が聞こえる、さてどちらに引っかかるかな？

「シユブニ・グラ シュマ・ゴラス 劫初に語られし蛇の神よ
狡猾で赦し難い咎人に黒き蛇の牙を イグの呪い」

この小さな黒い蛇に噛まれた人は寝てしまう、ただそれだけの良心的な呪法だ。中にいる生徒達には眠つてもらつて、フェイトを待つとしようかな

+++ +

まいったね、呪術協会の人間を一気に制圧してターゲットを誘拐するつもりだつたんだけど、罠にかかりてしまうとはね。近衛このいる所に行くと浴場で数人寝ているのを見てしまつた！と思つたときにはもう遅かつた

「どうですか？ルルイエの館の効力は、人形・・・魔力が主な抗生物質の人工生命体には効果抜群でしょう」

「小太郎は僕が襲撃するとは聞いていないはずなんだけど、どうして的確に罠を設置できたんだい？」

「気にしないで、僕は気にしないから。さよ、やっていいよ」

『来たれ 憲キ御靈ノ石 魂換え 対象は私と彼』

「なに！？これは・・・猫と体が入れ替わった？」

「首輪しないとね」

「これはどういうことなんだろう、ぼくが猫になつた？ネギに抱きかかえられた僕は、自分がどれほど危険な状況か、理解できないほど混乱のきわみにある。

「記憶の伝達は成功したか？フェイト君あなたのお名前は？」

「テルティウムだよ、完全なる世界のね、もつともこの名前は嫌いだけどね」

『成り代わりか・・・』

「『』明察、さ僕達の出番はまだ先だからまつてようか、さよ頼んだよ」

「おまかせあれ」

彼女？は僕を殺意たっぷり目で殺すといわんばかりに睨んできた。身体は猫、魔力は使えないし、喋れもしない、そしてこの首輪はきっと僕の邪魔をするだろうから、詰んだ状態だ・・・すまない僕はここで退場のようだ

+++++

「さよは上手くやつてるみたいですね、アーニャ達がコノカさん

を助けるために追いかけます。」

今回は今までと少し違つ、自分が強い影響を持つてゐるものあるがやはり思惑が成功したようだ。

僕達が苦労してきた歴史の修正力といつのは歪みを戻そとする力だ、例えば予知能力を持つた人が事故を未然に防いだとする、するとだ他の事故が防いだ事故の分だけ修正されることがある。つまり歴史は歪んだまま修正される、悪い方向に

「エヴァンジエリンさん、頼みますよ」

『ふん、これで借りはキャラだからな』

「別に貸しとは思つてないんですけど・・・」

『私が気にしてるだけだ』

「じゃあ、お気をつけて」

そこでじつ考えた、その力を誘導できないか?と・・・そのためにアーニャを育て、アスナさんを弱体化、保険として桜咲さんを用意する。

これで上手くいったら確証が持てる

「わてアーニャを助けに行きましょつか

アーニャは割りと広域魔法が得意なので、足止め用の鬼を相手にしてるでしょう。ですが流石にアーニャといえば、そこに月詠が加勢するとなると厳しいかな、だから僕の代わりにスクナと遊んでもらいますよ。

いました、アーニャの魔法は派手なのですが何処にいるかわから

りますね。『いつやつひ円詠が出てきて少し膠着してゐるみたいですね。

「「」ですか【よのかぜ】

風精を召喚して小規模な龍巻を発生させる

「ネギ!? 遅いわよ……」

「アーニャ、先に行つて「」は僕が引き取けるから

「わかつたわ! あんたもサシサと来なさいー」

結構あつたり行きましたね、よのかぜで進行方向に六ができたし、問題ありませんね。それで当面の問題はこの無駄にうじゅうじゅう鬼どもですね。

「来ると思つてましたよー、それでは一ヤリまじょうがー（おねえさんともやりたかったですけどねー）」

「来なよ、神鳴流」

「あれれー? 口調がちがいますよー（気配がおかしい?）」

「」の子はぼやぼやしてゐるけど、太刀筋は一流だ。動きのキレ、気の使い方も天性の物をもつてる

「ゼーんがーんけーん（半歩動くだけで避けられました）」

「「」センスだ」

「ゼんぐーせーん……あたりませんねー（「」を予測したみたいな足捌きですねー、昔みた青山の人みたいです）」

「」の動き初めをけん制して動き終わりを狙う、「」の年でよくここまで練り上げてあります

「ふふつ、当たらなさすぎて楽しくなつてきましたよー（届かな

い！ わたしよりも段違いに強い、でも）「

「戦うことが楽しい？」

「楽しいですよー（あの綺麗な肌を切り裂きたい！）」

鬪気が膨らんできた、戦いの中に生を見いだす動の氣を持つもの、戦闘狂だね。より苛烈に激しい剣舞、見てみたかったな、君の完成、でも

「考え方してる場合ですかー、斬魔剣（変ですねー、彼のいないほうへ剣先がいきますよ）」

「おつと

「一の太刀（死角からの攻撃を避けられた、もう笑うしかないですよ）」

必要無いんだよ、君は。だから最後に見せてあげよう一つの武の極み

「・・・・・どういうことなんですかそれ（気が高まり続けてる）」

「六面八臂、内側から開放する動の氣と外側から押さえつける静の氣を扱うことによつて生まれる波動だよ」

「あはははー本当に人間ですかー 雷鳴けーーん」

少しも動搖を見せないその搖ぎ無い精神に敬意を表して、せめて奥義で葬ろう。彼女の心臓にミリ単位の誤差なく、打ち込む・・・角度よし

「菩薩拳」

「ー?・・・・」

「也許なら・・・気がついたら鬼も皆消えちゃつたな、僕達の戦いの余波かな」

月詠は心臓が止まつてもうすぐ立つたまま死ぬ、まあチャチャゼ
口がいるからいらないからね。あとはスクナでも見に行くかな

+++++

「オイオイ、ご主人はあんな化け物だったのカヨ。タカミチのカン
力法涙目ナ純度の氣ダゼ、まさに歩く氣脈ダナ。
いいもんが見れたらぜ、さよのお守りが終わつて暇してたら

「ケケケ、立ちながら死んでるアホがイルゼ。アア、まだ生きて
るんダッケナ？元氣力？」

「・・・・・」

「オイオイ、聞かれたら答えるもんダゼ」

『ドカツ』ン、いい音がシタナ、いい蹴り具合ダゼ

「ゴホッ、ひゅーうひゅーう・・・あ・・・」

「見てたゼ？同類、ケケツ！ドウダ？」

「・・・・・はつ・・・・ははつ・・・」

「ケケケツ、ウレシソウダナ、解るゼ。オレタチは戦うことでし
か生きてることを感じれない、ソウダロ？」

「・・・うふふ・・・まだ足りませんよ・・・お兄様・・・」

丁度いい玩具が転がつてんだからヨ、暇つぶしには持つて来いダ
ゼ。ご主人、オレタチはまだまだヤリ足りネーヨ、命令が無くとも
やつちまつざ?

+++++

ああ、羨ましいなー、ネギ先生にだっこして貰つてさ。私はこれから先生と離れ離れになっちゃうのに・・・なのに私はこの人達と遊んでないといけないのかあ

「もう終わりかい？」

「冗談にしては笑えないわよっ！タイラントフレイム！」

「やれやれ」

ココロウアさんの業炎を石柱で遮る、私では目で追えないけどこの体が迎撃する。女に近衛さんが捕まつっていて、桜咲さんが助けようとしている。のためにココロウアさんが私をスクナから引き離そうとしていることは分かつてるし、邪魔するつもりは全く無い。だって私が頼まれたのは、ココロウアさんと桜咲さんに戦闘経験を積ませることと神楽坂さんに決断させるために材料を与えること

「アンタ、手加減してるわね！」

「・・・彼女のは翼は綺麗だね」

「こっちを見なさいよ！」

神楽坂さんが何処に首を突っ込もうが構わないけど、彼女が説得しなくとも桜咲さんは空を飛んだだろうし、身を守れない彼女が何でここにいるのかな？まあ、頼まれごとの中には彼女たちのサポートが含まれてるからそれとなく守つてるけれどね

「おい、クラスメイトが世話になつたな・・・返すぞ」

わー、すごい飛んだ。先生からマクダウェルさんが乱入してくる

』とは聞いてたけど、簡単に殴られちゃった。最後に先生からの命令はアデアット』

「契約に従い 我に従え 氷の女王 来たれ とこしえのやみ
えいえんのひょうが 全ての命ある者に等しき死を 其れは安らぎ
也【おわるせ「魂吸い 対象はリヨウメンスクナノカミ」つな!】
「じゃあね」

「貴様あ！私の見せ場を返せ！」

祟り神となつたスクナの魂を奪うこと、つまりマクダウェルさんがスクナを捕らえた時、身動きの取れない哀れな荒御靈を私のアーティファクトで横取りして離脱、そのまま私は完全なる世界に怪しまれないように潜入する・・・のかあ、いやだなー先生と離れるの

全てを置き去りにして（後書き）

ギャグ系は結構楽なんですが、シリアルにいくと唸ってしまいます

あとお久しぶりの更新です

同じ日本人なのに話しが通じない人達がいるんですが、彼らがこの先生きてけるか心配です、まあ捕まつたら「いつかやるんじゃないかって思つてました」つていいますけどね

おわりに向けて

『今日のチャチャゼローーー。』

ケケケツ前回は月詠とかいうガキをボコボコニシテ楽しかつたぜ。今回は『祟り神』についてダゼ、もっと早くこれについてヤルつもりだつたんだが、タイミングがナ。

御靈信仰ごりょうしんこうにオケル荒御靈あらみたまデ、畏怖・忌避される奴らダガ、手厚く祀りあげることで強力な守護神となると信仰される神々らしいぜ。それに、恩恵を受けるも災厄が降りかかるも信仰次第とされ、すなわち御靈信仰である。その性質から総じて信仰は手厚く大きなものとなる傾向があつてダナ、創建された分社も数多いんダゼ。

ソレデダ御靈信仰ていうのは人々を脅かすような天災や疫病の発生を、人間の”怨靈”のしわざと見なして、これを鎮めて”御靈”とすることによりたたりを免れ、平穏と繁栄を実現しようとする日本信仰ダゼ

有名どころをあげてみると日本三大怨靈の菅原道真(すがわら のみちざね)、平将門(たいら のまさかど)、崇德天皇や崇道天皇(早良親王)、伊予親王、藤原吉子、橘逸勢、文室宮田麻呂、菅原道真、吉備真備、井上皇后(井上内親王)の、御靈を総して八所御靈(はつしょみたま)といった人達ダナ、各所でたたり神として祀られてるぜ。いづれも政争の果て非業の死を遂げてるみたいダゼ。

一部重複しているのは気にしなくともイインダゼ、じゃあ、さよなライオン!

さよです・・・。レジで私から見た前回までの-airushijiにいきます。

ある日、やつてきた子供先生にメロメロにされた私は子供先生の都合のいい女として調教されてしましました。先生の隣りで寝る生活・・・幸せだったのでしょうか・・・そして彼がいきなり現れた。憎い・・・フェイトという男が憎い・・・と思つていたら

「祟り神になつていましてですね」

『…………まあ、いいです。予定変更です、わたくしは学園に戻って

で喜んで戻ってきたわけなんですが・・・なぜ私の体に捕縛魔法がされてるんでしょうか。それに学園長や見知らぬ偉そうな人（黒服に囲まれた）に角の生えた女性などなど、私をまじまじと見つめられる。い、今から何が起こるんですか？ドキドキ

「あらすじ終わり」

だつてこの会議室空気が重すぎますよ~

+ + + + +

修学旅行が終わり、旅行の振り替え休日明け、学園最強頭脳こと私、超鈴音はネギ先生に呼び出された。休み中ネギ先生の戦力分析をしたり、あれ？ネギ先生つてこんな強いの？や普通に人を殺した・・とか驚いていたところだったから冷や汗が止まらなかつた

「チャオさん、おはようございます。朝早くから呼び出してしまいますみません、放課後に会議室まで来てくださいね」

「・・・わかったヨ」

話しあは放課後にあるみたい・・・無駄にドキドキして授業なんて聞いていられないヨ！

で放課後、会議室に入ると結界が張つてあつたようでパリッとした間隔の後、見たことのある人達が座つていた。

「あつ、チャオさんこっちですよ、僕の隣です」

「ええ、わ、わかったヨ」

会議室にいるメンバーは私、ネギ先生、フェイト？に学園長、フードを被つた男、ヘラス帝国第3皇女テオドラ、元老院主席外交官リカード、アリアドネー魔法騎士団総長セラス、オステイア総督クラト・ゲーデルが円卓を囲んでいる

「みんなに集まつてもらつたのには大きな理由があります、それは来るべき魔法世界の崩壊についてです。」

どうやらネギ先生が話を進めるみたいね

「2012年・・・これがタイムリミットです。魔法世界の崩壊の原因とは魔力の枯渇であり、遙か昔に創造主といわれる魔法使いが繋いだ、地球と火星間に繋がれた魔力の管から流れてくる魔力の減退にあります」

「みなさんはご存知でしょう、魔法世界の住人の体は魔力から出来ており、崩壊が始まることには殆どの人達が行動不能でしょう。仮にこちらの世界の魔法使いがいたとしても魔力がない場所には精霊はいませんので、魔法は殆ど使えないでしょう。」

「混血のものがいたら体を維持するために多くの魔力を使い、使える魔力が全く無いもしくは使うと命に係わる、そのような世界になると予想されます。」

そして崩壊した世界で生き抜くため旧世界との生存競争が始まる。

「僕の隣のフェイトから聞きだしたところ、完全なる世界の目的は魔法世界の救済らしいです。その計画の内容とは、完全なる世界コスモ・エンタレケイアという【各人にとって最良の可能世界へ各人を移行させる】魔法を使用するらしいです」

「一見凄くいい魔法にも思えます、しかし不審な点が見られます。各人つまり魔法世界の住人、確認されているだけでも6700万人、これだけの数の人に使用できるのか?という点

「各人にとっての最良、ここも不審なところです。なにを基準に

最良と判断するのか、最良とは何か、ところづ点」

「可能世界への移行、現在の世界からありえたであらう世界へ、過去から未来、全宇宙を包括するすべての時間空間における世界すべてを対象とするようですが、そもそも可能なのか?といつ点」

「そして魔力の枯渇した世界でそのような大掛かりな魔法が使えるのかといつ点です」

「うーん、聞いた限りだと限りなく不可能に近いヨ、大体それができるなら私はここにいないネ。まったく最良の世界なんて夢のよくな話ネ・・・ああ、なるほどネ

「実際はそんなたいそつなものじやないよ、滅び行く人々に安らかな夢をあげるだけれど・・・」

みんな呆れたような顔をしているネ、だつて今まで悩まされた最大の敵の目的がこんなものなんて考えもしなかつたんじゃない力?私もずっと謎だつたことが解消されてスッキリしたヨ

「なんとも、まあ」

「はあ・・・・そんなことでアリカ様が・・・・」

「フフフ、アッハツハツハツゲホゲホツ・・・馬鹿かつ」

一斉に愚痴り始めたけど、何も言わない学園長が気になるネ。私がここにいる理由はきっと私の目的とその計画のことなんだらうけど、どこで流れたんだろうか?

「次はチャオさんの計画ですが、それにはまず彼女の紹介をしないといけないですね。彼女は100年後の魔法世界からやってきた未来人で僕の子孫です（はい、チャオさん自己紹介よろしく）」

「お目にかかるて光栄です。紹介にあがりました、超鈴音といいます（あの～、なんで知ってるか後で聞かせてもらえる力ナ）」

「彼女は実際に崩壊した魔法世界からやつてきた、生き証人です（別にかまいませんよ）」

+++++

252

「・・・なるほど方法はともかくいい考え方だな」「いまのうちに動き始めればなんとかなりそうね」「問題は完全なる世界だが、拠点の情報はあるから一気に潰すこともできるな。まずは牽制して時間を稼ぐか」「そうですね、完全なる世界の目的はともかく彼らの情報を正確に得られたのは大きいですね」

洗いざらい吐いたわけだけど、ネギ先生が計画やら私の身の上を話し始めたときの周りの顔が子供を見る親のようになつてきてスゴク恥ずかしかったヨ

「チャオさん、みんなの邪魔しちゃ悪いですし、出ましょうか

さてネギ先生は何を語ってくれるのかナ

おわづか回廿七（後書き）

作者は原作を27巻までしか読んでないので
今回の話は友達から聞いた内容（あいつの妄想を含む）を参考に
しているのでオリ設定です、ええ確實に

この先はオリ展開しかありませんよ たぶん

思考する非思索家（前書き）

お久しぶりです。シコマです、やつとネット環境が整いました。
じゃ、じゃ

思考する似非思索家

『今日のチャチャゼロ！…』

ヨウ！オレダ、チャチャゼロダゼ。なんか最終回が近くなつてきたくさいので、チョットダケ多めダゼ。題は『英雄』ダゼ

英雄、勇者、救世主、英傑、ヒーローやらと云われる存在。神話・民話・歴史において、すぐれた知恵、武力などで魔物を退治したり、困難な課題を解決したり、人びとのために行動する人物に付隨していく記号。

英語のHEROの語には「神人」という意味も含まれてるらしいぜ。マア、神話でよくある神の血を引く英雄ということダナ。多少の失敗をしたり、父子の対決、超人的な身体能力、強靭な精神なんてのは共通してるナ。どこの場所でも人間は変わらネーナ

地位の格差の理由付けや災害の苦しみ、生への苦痛、そうしたあら種の望みから造られる理想像それが英雄ダ。決してなるうと思つてなれるもんじやない、なるうと足搔けば足搔くほど、人の目には滑稽に見えるだろうナ。

それで世界中には様々な英雄譚があるわけだが、それとセットで歴史に残る言葉なんかもアルナ。偉人の名言だけじゃなく、こうであつて欲しいという民衆の願いも残るぜ。その例が【英雄色を好む】ダナ

別にオレはホルモンがどーたらとかの講釈は垂れねーゼ、男なら誰でもそういうモンだからナ。おつと、話しがズレたな、続キダ。英雄つてのは望まれて造られるわけだからそこに個人なんざイラネー、お偉いさんはいうことのきく駒、民衆は自分たちにお優しい都合のいい人物であればいいわけダ。

【英雄色を好む】のは、別に性欲が強いとかじゃなくて、自分たちの特別だからこそ、英雄が勝手に特別な人物をつくってしまうと、もしかして自分たちが裏切られるんじゃないかっていう自己保身がそこにあるとオレは思うゼ

結論をいうと博愛精神（上っ面でも）がないと英雄にはなれないところ」とダナ

南瓜鍊は面白いぜ、ジャアナ。マタ逢つ口までダゼ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

魔法世界のお偉いさんとの会談が終わり、僕はチャオさんを連れて生活指導室に向かつた。まだ部活の勧誘ポスターが貼られている廊下を一人で歩く、廊下にはまだ下校していない生徒たちがまばらにいた。

挨拶してきた生徒たちに手をふり、進路指導室に入る。そこには魔法を知っている生徒。つまり神楽坂、近衛、朝倉、富崎、早乙女、綾瀬、桜咲そしてなぜかいるマクダウエル、部屋を見渡し全員に話しかける。

「皆さん、おそろいのようで、では始めましょうか

「あの先生、なんでチャオさんもいるですか？」

「ああ、この子は関係者ですが、別件です。では質問があります

たらどうづか」

皆の質問に答えていく。魔法とは何か、その危険性について、各国に置かれている魔法組織、魔法を使った犯罪者とそれを取り締まる組織、魔法使いを育成する機関、魔法世界とその情勢に魔法に対する見識の違いや身分や制度、事細かに答える。

魔法とは願いを叶える都合のいいものではなく、法則や原理に縛られる技術であり本来誰にでも使える汎用性の高い事象であること。基本的に精靈と呼ばれる魔法原理生命体（元は意思を持たぬ自然そのもの）を回路として魔力と引き換えに起される現象である」と

「でも本当にそこまで考えて魔法といつのは使つててるのですか？」

綾瀬の指摘したことは、自転車に乗つてゐる人に自転車に乗るとき、

自転車にどのように力が働いているかを聞くようなことである。実際、この魔法の原理について研究されたのは近年に入つてからだ、それまではそれが当然であつたために研究されることはなかつた。

そして魔法の危険性について、魔法は環境や術者の状態に左右されやすく、精靈の多寡や術者の精神状態や肉体状態に大きく影響を受ける。その影響が魔法の想定以上の威力があり、爆発を招く恐れがあること。自分のような幼い術者でも人を殺傷できる魔法を使うことができる」と

各国に置かれた魔法機関は具体的に述べるとここ麻帆良学園や関西呪術協会、ウェールズの魔法学校、アメリカのジョンソン魔法学校などの表には出ないもしくは隠されていて、多くは教育機関であつたり、研究機関である。また魔法のその性質から軍事利用の難しさから国家機関であることが少ないことが多いこと

その後も質問に答えていたのですが、魔法世界の情勢を語ついくうちにみんながだれてきたのでこの辺でお開きにまだ聞きたい人はここに残るようつ告げました。

「残つたのはユエさんにチャオさんですか」

「おい」

「では質問をどうぞ」

+++++

ネギ先生の会話を盗み聞きした後、私はこのことを伝えるべく皆のところに向かいました。別に先生が魔法を使いすぎて死のうと何を企もうと知ったこっちゃありませんが、会話の内容はかなり重要な情報なので、一考に値すると思うです。

「…」

石像が置いてありました。非常に精巧にできた、まるで生きているかのような。注意深く見ていくうちに気づきました。この石像は私たちを広間に案内してくれた女性だと、思わず悲鳴が漏れてしまふところでした。近くにまだこれを作った人がいるかもしれない、そう頭によぎる」とで声を殺すことが出来ました。

実際は近くに私以外の人はいなかつたのですが、そんなことを知らない私は音を立てないように皆と合流するため、そろりと歩いていきました。

不気味な静かさ、音のない廊下は生き物を感じさせず息が詰まりそうなほど空気が重く感じられました。確かに感じる生活観が逆に私に恐怖を植え付けました。まるで私だけが置いていかれたように

「あつ・・・・のどかあ」

なんとかたどり着いた部屋にあったのは、かつての親友たちの置物、石像の近くに置かれたタオルなどは私が戻るのを待っていたのでしょうか？

呆然と立ち尽くす私、どれほどの時間がたつたのでしょうか。震える手でのどかに触れようとしたとき、静止の声が私に掛けました

「触らないほうがいいぞ、壊れたら元に戻れなくなる

背後から現れたのはクリスお爺さん、飄々としたようすで私を見ていきました。私は彼に対面し、両手を広げました。彼に泣いてすがりつくでもなく、理不尽に対し怒りをぶつけるでもなく、のどか達を守るために威嚇するように手を広げました。このときの私は誰が敵で味方なのか判断できませんでした。

この石化している人の中でいつもおりの彼が疑わしかったから、でも唯一ここで話せる人物だから、頭と心の矛盾が生じる。目の前にいる彼に怯えている私と彼の言葉に反応した私。

「戻れなくなるとは、つまり元に戻すことができるんですね

「可能だ」

「なら今すぐ元に戻してください。」

「駄目だ」

情報を引き出すための会話は相手のペースに乗せられ、のまれた。せめて治すという言質を取りたかったができなかつた。なぜならお爺さんの背後の窓から日に入った光景、光る巨人を目にしてしまつたから

「あ、あれば」

「あればスクナ、リョウメンスクナノカミ。そんなことより落ち着きたまえ、こんなときだからこそ冷静にならなくてはいけない。」「宿儺？・・・つてそれよりも早くのどかを元に戻してください！」

「それ呼ばわりとはスクナも憐れなものだな、元に戻してやつてもいいがネギが戻つてくるまで待て、それまではそいつらが倒れないうに気を付けるんだな。」

言われなくとも気を付けてるです。なんとか言質はとつたです。でももともと元に戻すつもりのようでしたし、心配しなくてもよかつたかもしませんね。

窓の向こうの巨人が暴れている、どうやら巨人は自分の足元に攻撃を加えていくようだ。戦いの音がぼやけて響いてくる、窓越しに感じるそれは、私たちと彼らを分ける決定的な違いに感じた。

私がぼんやりとしているとお爺さんが突拍子もないことを言つてきた。

「ユエ、君は魔法を知りたくないかな？」

驚きと困惑に包まれた私を愉快そうにみながら、語り続ける。

「君は今なぜ自分なのか不思議に思っている。」

「なぜネギやアーニャ、他の魔法使いじゃなく一般人の自分の何か困惑している。」

「でも魔法とこうものにとても興味のある君は驚きと喜びを感じている。」

「しかし魔法といつものに触れてしまえば、日常が壊れてしまうと理性が押し留めている。君の後ろにいる子達との日常を」

「だが君は気づいているはずだ。その子達はもう魔法から離れることはないことを。恋に、好奇心に、欲求に任せ彼女たちは非日常へ踏み込むことを。仮に今、彼女たちを説得できたとしても学園に戻れば魔法にかかる可能性が高いことにも君は理解している。」

分かっていた。もう避けえない事実、一度接点ができてしまえばまた顔を見せることに。自分はそれを望んでいた、自分は仕方がないと、魔法にかかりてしまつのが仕方がないことだと、逃げ道を作るために。

でもこのおじこさんは自分に選ばせよつとする。自分で魔法を得るよつに仕向けている。わたしは

「私は「おひとびひや」のネギが戻ってきたよつだ、続ければまた今度聞かせてくれ。」・・・・のじかを元に戻してください」

「いいだひひ」

+++++

ネギ先生に聞きたいことは一つだけ

「ネギ先生はこれからびひあるですか?」

ネギ先生以外の人たちは意味が分からぬ顔をしている。当たり前です、きっとわたしの意図がわかるのはネギ先生とおじいさんだけでしょう。

ネギ先生はわたしをまじまじと見た後、微笑んで一言だけ言つた。

「クリスなら世界樹を調査しているよ、ぼくはいつも通りに

ただ前を向く

僕の返答を聞いた彼女はスッキリした表情で部屋から出て行った。
さつとクリス爺さんのところに向かうのだろう、答えを出しに

「ネギ先生？ 今のは一体なに力ナ」

「わあね」

「・・・・おい、ネギ」「ればばつこいつ」とだ

疑惑の目を向けるチャオと睨みつけてくるエヴァンジェリン、どうやらエヴァは念話であることを聞いたようだ。僕がわざわざいいのよつの場を設けた理由を

「エヴァンジェリン？」

「あの人形が逃げたそうだ、貴様が逃がしたのか！」

「なつ！？」

僕をはかりかねているチャオは驚き、ある程度僕を知るエヴァは僕が手引きしたと断定した。その考えはあたつていて、でもなぜそんなことをしたかわからず問い合わせだしてきました。

「フェイトが逃げた？ いつたいどうやつて？ フェイトに掛けられた術は僕のだけでなく麻帆良の術者の中も掛けられているのに？ 誰がそんなことを？ 彼の仲間が潜入しているのか？ ……わからぬことばかりだね。」

「ふん！ ……じじいが連れてこいつってやるぞ

「じゃあ行きましょうか、それじゃチャオさん。話はまた今度

もう会うこともないけどね。

+++++

エヴァとは特に会話もなく、学園長室に着いた。

向かう途中、僕と直接の面識のない魔法先生たちが慌ただしく動いているのが手に取るように分かり、思惑通りにいったようだ。

僕の目的は造物主 ライフメーカー ただ一人、今は彼を倒すことにだけを考えている。彼の情報は少ない、とおい昔に見た漫画の内容、フェイトから得た記憶、そして自分の推測だけだ。

彼は隠れているが、僕は隠れていない。彼は僕を知っているが、

僕は彼を知らない。彼は強者で、僕は弱者。彼らはそう思っている。僕を取るに足らない虫けらのように、見下している。

僕を地べたに這いずり回る蟻のように全く意識していない、そう嘗められているのだ僕たちは。僕たちは彼らを本当の意味で敗北させなければならない、もはや自分が誰なのかわからないほど、僕たちはまじりあっている。

だから余計な邪魔が入らないように、細工をした。今、旧世界は団結し始めている、敵の完全なる世界がいるから。完全なる世界は復活まじか、でも完全じゃない。完全なる世界は9年かけて計画を進めている、多少の邪魔が入っても旧世界なら問題なく計画は遂行される。

旧世界の大物に完全なる世界の所在や情報を与えたのは、身内から膽を出し、完全なる世界と向き合つてもらつため。フェイトを逃がしたのはどちらも情報を持つことで、膠着状態にするため。つまり僕にかかる暇はないということだ。

正直なところ穴だらけだが、僕は気にしないもう我慢できないからだ。フェイトを見たあの時から、誰が彼らかに気づいた時から、殺せと僕たちが囁いてくる。フェイトから造物主の場所は分かつている、そして造物主はそれを気にしないことを僕は知っている。

+++++

「『苦労じやつたエヴァンジヨリン、ネギ先生に話があるから下
がつてくれんかの。』

「なつー・じじい、貴様！」

「頼むエヴァンジヨリン、後でわけを話そう

来て早々、儂はエヴァを下がらせた。儂を忌々しげに睨んだ後、
ネギ君を見つめ部屋から出て行つた。すまんのう、じやが聞かせる
わけにはいかん、ネギ君は間違いなく壊れているからの。」

「さてネギ先生、大体の事情はクリスから聞いてあるから今から
するのは確認だけじゃ。」

「助かります。」

クリスとは昔からの知人で彼の変化には驚いたもんじや。他の誰
も気づかないだろうが、儂は気づいた。彼は昔から嘘をつくと左手
の小指がピンと伸びる、しかし今の彼は伸びていなかつた。偽者か
と思いもしたが、全く変わりはないよじやつた。

だからクリスからの便りがきてその中にネギ君の名前がちらつと出てきたとき、彼が係わっている氣がしてならなかつた。そして先日その疑問をぶつけたところ、ネギ君の素性や目的をまるで物語をつづるように聞かせてもらつた。

「ネギ先生はこれから死地に赴くらしいが生きて帰る算段はあるのかのう?」

「ああ? やつてみなければ、わかりませんよ。」

「ここのでネギ君の代わりはないと説教してもいいんじゃが、あいにく彼には代わりがいる。彼の近くにいたアンナ君はネギ君が殺されたら、造物主を恨むじやうつ。クリスのもとに綾瀬君が弟子入りした、彼女なら旧世界の根本的問題を解決する知恵をクリスから授かるじやうつ。今日はチャオ君のように非常に稀有な存在を巻き込んだし、先日の修学旅行で魔法に係わった生徒にも種を蒔いたようじや。

つまり自分の代わりにことを成す人物を見つけてから、ネギ君は行動に出るじやい。それは、前からのことじやいの。

ならば儂の感知することではない、木乃香の婿にできないのは残念じやが他にも候補はいくつでもいる。代わりはいるのじや。

「ふむ、あいわかつた。すまなかつたのう

「いえ、後これをお願いしますね。」

ネギ君から渡されたのは、退職願。

これから彼はおそらくあらわれることはないのか、万が一帰つてくればただの病氣で終わることができるの。

ネギ君は一度と儂のことを思い出すことなどないじやうぶ。

+++++

修学旅行から帰つて二日間で描き上げた転移魔方陣、試運転を終えたチヤチヤゼロとスクナを食らい切つたさよを抱いて転移する準備をする。誰かに別れをいうなんてことはない、僕は僕しかみていないから。

「チヤチヤゼロ、準備はいいかい?」

「マカセロ! 邪魔するヤツはぶつた切ればいいんダロ! 得意ダゼ、ケケケ。」

「わよ、僕のために死んでくれるかい？」

「はい！一度死んだ身ですから、でもすぐここに来てくださいね？来ないと祟り殺しますよ。」

頼もしい限りだ。

転移先は彼らの本拠地の奥深く、旧世界の靈脈の一つで造物主が潜む、歴史の空白地帯。

ただ前を向く（後書き）

別に飽きたわけじゃないですよ。ただシナリオの進行上、ネギくんは誰かとなれ合ってはいけないんです。

極悪は孤独でないといけない

桜手元勝つとこハラヒ（繪書モ）

「でもシユマです。昨日は自分が亡くなる夢を見ました。

みなさん、一つ名メークーって存知ですか？

実はうちの主人公のもとの名前をそれでやつた時に『希死神経』といつ一つ名を貰いました。希死とは無意識に死を望むことです。

ちなみに自分の本名でやつたら『脳髄計画』といつ悪役っぽいのが出ました。

あと身内です、兄が『二番田の少年』フュイト・みたいなのや、祖父の『逢魔刻』が非常にラスボスっぽかったです。

相手に勝つところ

仄暗い大きな部屋、部屋の中央には石のよつなものがそこを中心として魔力が放出されている。

唯一の光源は足元から放出されている魔力の光のみ、僕らの前に佇むのは

「あなたが造物主ですね」

『・・・ネギ・スプリングフィールドか』

「チャチャゼロおおー！【青く輝く世界にて崇められし悍ましき神よ】

「アイサ ゴ主人、アテアット」

これ以上の会話は必要なかつた、僕はチャチャゼロに合図をし、術の準備をする。チャチャゼロはアーティファクト【二相の器】を呼び出し、液状になつた物体で僕たちを守るように戻開する。

同時に造物主の【造物主の撃】が発動し、絶大な威力の衝撃波が僕らを襲うもなんとか防ぎきる。液状化した【二相の器】は衝撃を吸収し、僕の魔力を引き出して大きさを増す。

「【赤く輝く世界にて畏れられし偉大なる神よ】」

「最初カラ、クライマックスダゼ。モード・ゴリアテ！」

【一相の器】は次々とチャチャゼロに纏わりつき姿を変える、チャチャゼロを核とした大きな器 うつわ はチャチャゼロをそのまま大きくし、その両手には大きくなつたチャチャゼロを超える長大な剣を携えていた。

「イツチマイナ！」

ゴリアテモードから繰り出される一の太刀は、轟音を響かせながら造物主を押しつぶさんと振り下ろされる。

だが造物主の前面に複数の魔法陣が展開され、【造物主の撃】が発動し、一瞬の拮抗のあと、ゴリアテモードのチャチャゼロをブツ飛ばした。

「【暗澹たる暗黒の世界に在られます大いなる叡智の神よ】」

さつきの液状化した盾のときは違い、明瞭な形を持つゴリアテモードは硬質化おり、【造物主の撃】の衝撃波を吸収することができずに飛ばされてしまった。しかしである、歴戦の猛者であるチャチャゼロは咄嗟に自分の周りの【一相の器】を液状化させることでダメージを受けることを回避していた。

「【その御力を御貸し下せ!】」

【造物主の撻】は精靈の力を借りない魔法である、簡単に言つて普通の魔法は自分が行いたいことを呪文によつて精靈に伝え、その対価として自らの持つ魔力と交換して魔法という現象を起こしてもらつている、つまりほとんど自動、オートだ。

交渉する精靈の量、その場の環境、消費する魔力の調整など魔法使いが行つ作業もあるにはあるが、そんなもの言い訳に過ぎない、ただ魔法を使えるだけだ。

でも造物主は違う、現在の魔法の根幹を成す、精靈に命ずる呪文を編み出し、数々の基礎となる魔法を生み出し、この魔法世界を創り上げた。始祖の魔法使いの名に相応しい人物だろう、彼にとつてみれば2600年の間の魔法の成長・研究など蟻の行軍とかわりないだろう。

話は逸れてしまつたが、精靈の力を借りないといふことは、すべての工程を自らだけで行つのだ。一体僕がどれほど研究すれば実現できるのか？100年？1000年？それほどのことをいとも簡単に行つている。

「いあ いあ つあとうぐあ ぞたくあ そだぐるい しゃ
たくう
なぐる ふぐたん」

【造物主の撻】は単なる魔力の塊の衝撃波に過ぎないがその威力は破格だ。そして【造物主の撻】のもつとも恐ろしいのは

「御主人、ナンデオレハ腕ガナインダ?」

完全にマニュアルだからこそ非常に応用が利くといつことだ。

「知るか。だが時間稼ぎ】苦労、作戦通りにな【暗黒世界ン・カイ】」

僕の足元から一切の明かりのない黒が広がる。造物主が【造物主の撃】で打ち破ろうとするも全て飲み込んでいく、見えるか造物主、僕たちの墓場が。

『我とは違う魔法体系・・・ネギ・スプリングフィールド、貴様はいつたい何者だ。』

「六面八臂。いまさらそんなこと聞いてどうする、造物主お前は僕と心中するんだよ。」

『断る、貴様を殺して戻らせてもらおう』

なにも起こらない、このなにも見えない空間では相手の位置を知るには声を辿るしかない。造物主がいるであろう場所は一切の光が起こらず、沈黙したままだ。

「無駄だよ、ここでは一切の魔力行使ができない。どんどん力が

奪われていくだろ？怖いか造物主、始まりの魔法使いが魔法を取り上げられてさ。」

『2600年・・・2600年だ、私は世界を救うことを考えていた。』

「・・・・・。」

『なのに貴様はつーこのまま我になにもできぬまま終われというのか！』

「きなり子供のように癪癩を起し始めた造物主、やつぱりそういうことなのか。」

「ねえ、オリジナルはいつ死んだの？2600年前？」

『貴様なにを言つて・・・』

「フェイト・アーウェルンクス、運命に災いを幸いに変える神の名前。つまりオリジナルは知っていたんだね、魔法世界がやがて崩壊してしまうことを。だから魔法世界という災いを防いで欲しいといつ願いを込めて君にその名前を付けたんだろう。フェイト？」

無言か。まあ、どうせ僕が解除の呪文を言わなければ二人ともやがてお陀仏だ。彼が僕を殺しても引き分け、負けはあり得ない。チヤチャゼロが仕事をし終えるまで、暇つぶしに話してみようかな。

「異端は嫌われる、だから造物主は魔法世界を創った。自分に優しい世界を」

「最初は良かつた世界の崩壊なんて知らなかつたから、でもなんかの切つ掛けで気づいてしまつた、魔法世界の欠陥に。造物主は焦つたんじゃないかな、老いと崩壊に」

「いくら造物主とはいえ不死は叶わなかつた。いやもしかしたら完成させていたのかもしけない、でも不死にはならなかつた。自分が魔法世界を構成する鍵だつたから、彼自身が地球と火星を結ぶ重要なパイプだから」

「君を創つたのは自分が亡き後、魔法世界を管理してもらうため。そして造物主は自らを靈脈に作り替えた、そしてあの部屋の魔法陣になつた。」

『いつ気が付いたんだい？』

フェイトが造物主を型どつた姿を脱ぎ、彼の姿が露わとなつた。他のフェイトと同じように銀髪に淡い青の目をしていた。違うのは凄い髪が長いことかな、地面に髪がついて引きずつてゐる。

なんでわかるかつて？来てるからさつきまで存在しなかつた光源が。

「君はゼロ番のフェイトだろ？つまりオリジナルのフェイトだ、

三番目 テイルティウム は自分の三番つて名前が嫌つていってたよ。人間臭いよね、親から貰つた名前が嫌いだなんてさ、だから思つたんだよ彼を作つたのは造物主じやないってさ。」

『惜しいね、ゼロ番じやなくてフィリウス 息子 サ。たぶん三番つて名前が嫌いなのは、自分が量産されたのを意識させられるからじやないかな。・・・それであればなんなんだい?』

「偉大なるツアトゥグアだよ、気にしなくて何もしてこないさ。今機嫌がいいからね。」

生贊を三人ほどね。ほんとは冗談も生贊にしようと思つたのに、チャチャゼロのヤツがどこかにやつてしまつたからね。全くあの任せたは助けるじやなくて始末しどけだつたのにな。

「話を続けよう、君の役目は魔法世界を存続させる」と。それは今も変わらない?」

『変わらない、例え魔法世界を一回壊しても存続させてみせる。だから元に戻してくれないかな?』

「もう君の体が持ちそつにないから手短にしよう。実はいまの姿のまま魔法世界を存続させる愚かな方法があるんだが、乗るかい?」

『・・・聞かせてくれ』

+++++

御主人と造物主は黒い物体のなかに飲み込まれてしまった。残されたオレの役目はこの部屋に近づくものの排除とさよの護衛だ。厄介なことを頼まれたもんだ、さっきの戦闘の続きと今の状況はどうちがやべーのかわからないな。

「タマラネエナ。ドンドン獲物力増エテルジャネーカ、皆殺シ確定ダゼ！」

「造物主はどこだー答えひー。」

ひい、ふう、みい・・・おつと、数てる暇はねえな。ゴリアテモードのオレを押しつぶさんとする水の奔流を持つてる獲物でぶつた切る。

ふるうだけで巻き起こる斬撃が水を割る。さながらモーゼの奇跡か？

割れた水の間から炎の渦がオレ焼き尽くさんと迫りくる。結構な熱だが周りの水を蒸発しながら来ているせいいかこっちに来るまでに少し弱くなってしまっている。こいつらはチームプレーってのを知らねーらしいな。

「ケケケ、ソノ程度力ヨ。ソシナンジヤ、肉モ焼ケネエーゾ！」

「防がれた！？」

「退け私がヤル」

大規模な稻妻が四方八方から襲いくる。

が、オレは動かずには避雷針のように地面に電気を受け流した。当然まだ地面は濡れており、電気は拡散する。

オレの【二相の器】は液体の金属だ、沸点・融点は2000近くある。だから簡単には溶けないんだが、さっきの炎でちょっと蒸発しちまつたな。まあ、オレが有利になるだけなんだがな。

『はつ・・・ぐつ』

次々に巻き添えになつた雑魚どもが消えていく、水に巻き込まれ、炎に焼かれて、感電死つてな。憐れなもんだな、同士討ちつてのはよ。

「ザマアネーナ、モウ三人シカ残ツテナイノカヨ。正直期待外れダゼ。」

「「「貴様あ！」」

スタンドプレーつてのは一種のチームプレーなんだが、こいつらのはただの足の引っ張りあいだ。三人いっぺんに攻撃したらいいつてもんじゃねーゼ？ そんなの小学生でもわかることだぜ

稻妻が大量の水を分解し、酸素と水素に、それに火がつけば

「大爆発ダゼ」

屋内での爆発は想像を絶するものがあつたな、ゴリアテモードのオレと黒いなんか以外全部ぶつ飛んじまつた。

造物主の根城は現在進行形で崩落中だ、オレは黒い物体を包むよう【二相の器】をドーム状に展開させた。

「コノ黒イノ・・・・確力、他ノ世界ノゲートダツタヨナ。オレモ入ツチャダメカ?」

十分ほど黒い物体を眺めていると変化があつた。黒いなにかが揺らめいて小さくなつて、人の形が浮かび上がってきた。

「チャチャゼロ、一二一二?」

「ケケケケケケケケ」

「いや答えるよ。じゃ早速、えい。」

「ケツ?」

隣にいた男とさよを重力魔法で赤い液体に変えてしまつた、見事に液状になつてゐる。その男とさよを使って御主人は地面に描かれ

た魔法陣を上書きするように新しく魔法陣を描きはじめた。

「 ～～ ～～」

鼻歌交じりで魔法陣を構築していく、御主人・・・・やつぱりあんたはイカレテル。最高に狂つちまってるぜ、人間の絵の具で魔法陣を描くなんて、人間には到底できない。殺す段階で、ぐちゃぐちやにするときに、人間の絵の具の色や臭いに発狂するはずだ。

でももともと狂つてんなら問題ねえ、しかもいままで見た狂人のなかでもピカイチだ。まえの御主人・・・エヴァなんて比じやないぜ。

「 ここをこうじてと・・・」

大体御主人の使う怪しい魔法もそうだ、人間じゃ正氣でいられないほどの狂気が使うたびに溢れてるんだぜ？御主人気づいてるか、造物主よりよっぽどあなたのほうがバケモンだぜ？

+++++

僕の考えた方法は簡単だ、魔法世界を旧世界のようにしてしまえばいい、自分で魔力を供給できるように活性化させるというものだ。

活性化させるのにはそれこそ膨大な量のエネルギーが必要だ、今以上の地球以上の力が・・・そんなのどこにあるかというと、今はい。

だから作り出すしかない、僕の手で。

活性化させるための魔法陣を描くにはフェイトの血だけでは足りないので、さよの仮の体も借りる。なぜ血かというと血・体液というのは魔力を通す上でもっとも伝導がいいからだ、人道的に問題はあるかもしれないが誰でもやることだ。

魔法陣を描いたらさよに魂の操作をして貰つて、フェイトの魔力とさよのスクナの力と自分の気のエネルギーを混ぜ合わせていく。

つまり感卦法や六面八臂と同じやり方だ。

魔法陣の真ん中で力を制御するために集中する。

いつも道理に力を練り合わせていく、体から破裂しそうなほどに張りつめた純粹なエネルギーが溢れてくる。一瞬でも集中をとじせたら、爆死死体ができるがるだろう。

つ危ないこんなこと考えるな、ただ力を制御するだけでいい、安定するまで集中・・・。

来たつ！体を包む全能感！漏れ出る力だけで体が浮き上がる！

「クフフ、【シュブニ・グラ シュマ・ゴラス 全てに繋がりし
力の根源よ】」

僕が詠唱を始めると魔法陣が僕の力を根こそぎ奪つてくる、本来の僕ならものの数秒で死に至る量を吸われても全然減つた気がしない！いいぞっ！すごい！最高にハイツてやつだ！

「【闇よりもなお深きものよ 光よりもなお映きものよ】

魔法陣から周りを判別できないほど魔力光がはじける。

「【原初の海にたゆたわん わが魂に眠りしその力】」

魔法陣が地面を這つてこの星を覆い尽くさんとするのが手に取るよつにわかる。

「【母成りしものへと 姿を変えよ】」

火星全体が魔法陣に覆われる、枯れ果てた靈脈に僕の力が流し込まれる。

「【古き星の系譜に従い 我が身に集いて形をなさよ】」

留まることを知らない極大のエネルギーは、大地に生命の息吹を

吹き込む。

「【滅びた姿を呼び戻し今帰らん 正しき流れ あるべき姿に】」

魔法世界中に光が溢れ、人々はその光景に目を奪われる。

「【生命回帰】」

最後の一小節を詠み終えると魔法が完成し、星は鼓動を開始する。

そして僕はこの奇跡ともいえる魔法の余韻に浸つて

弾けた。

相手に勝つところ（後書き）

主人公、爆殺！

超展開故に致し方なし

やつぱうちの子は運がドジッコですね～

あつ、次回最終話です

「ケケー！ ケケケケ？ —— ケケケケケケ！！」

イキナリ目の前で起こったことに思わず嗤ってしまった。さつきの馬鹿な連中の爆発とは全然違う種類の爆発、まるで内側から壊れるように、小さな光点が御主人・・・。

いやネギの体中を包み、刹那の時に、消えて無くなってしまった。

「オイオイ！ ソリヤネーゼ！ テメーハ水ノ泡力ヨ！」

そこまで言つてあることに気づいた。ネギが死んだということは、契約が途切れたということだ。つまり【二相の器】は消え去り、支えるものがなくなつた。この地下組織は崩壊するということだ。

崩壊する地下遺跡の中をひた走る。ゴロゴロと転がる巨石を乗り越え、墜ちてくる瓦礫に飛び乗り上を日指す。

ネギが何をしたかったのか、何を成したのか、何も感慨も興味も一片も湧かないがこれだけはわかる。この世界に溢れる魔力は、ネギの仕業だと。

まるでエヴァの別荘のようだ、魔力に溢れた世界が、チャチャゼ

ロの「」とを歓迎するかのようだ、ただの人形である「」の身に魔力が注ぎこまれる。

「ナンダガワカラネーガ、ネギハ死ンジマッタゼ」

『そ、うか・・・・それでチャチャゼロはこいつちに戻つてくるのか?
?』

「イヤ、ココニイルゼ。折角自由ナンダカラナ。」

エヴァはそ、うかといつて念話を切つた。どうせ戻つてもあの動けない日々に逆戻りなだけだ。それに今のエヴァには茶々丸もいるし、友?もできた。

殺すことしかできないオレじや、ただ迷惑を掛けるだけだ。それだったらこっちで悠々自適の殺戮の旅に出るのも悪くない。あとのことはネギの関係者がなんとかするだろ?。

今、オレがすべきことは、ネギの墓場に近づくコモの処理だ。

「片腕ダト、不便ダナー。」

「」の身が尽きるまで、御主人の命令は遵守する。それがオレの存在意義だぜ。

+++++

あれから一月ばかり経つた、完全なる世界は少しの残党を残して滅びた。ショーガネーよな、中心人物がほとんど死んだんだからな。

ネギの仕出かしたことは『世界新生』とかいわれてるも、大体的一般人にとってはちょっと呼吸が楽かな程度にしか感じられないらしい。

それにあれを仕出かしたのをネギだとは分からず、一部では神が降臨したとかいつてるみたいだな。実際、魔法世界中に魔法陣が敷かれたときの混乱は凄かつたらしいしな。

「【プラクテ・ビギナル アールデスカット】 オオー、ツイタツイタ。」

まあ、終わつたことだしな。どうでもいいか、それよりオレモ魔法が使えたことのほうがすゞぐね？

そういえばエヴァのヤツ『チャチャゼロ、その・・・なんだ・・・私のネギとの仮契約カードをしらないか？』とか、いってたな。ネギの葬式の日に。

「ケケケ」

ああ、なにやらネギのファンクラブでも葬式してたつけな。麻帆

良学園では一部の生徒（ファンクラブや魔法関係者）を除いてほとんど忘れてるってのにな、どうやってあの結界の呪いに抵抗してんだか。

「誰モ知ラネエ」

これもいらねえから燃やすか

+++++

突如、魔法世界に起きた。惑星大活性、世界の新生と呼ばれた謎の現象は、魔法世界中に波紋を生じさせた。

世界中の学者や魔法使い、果ては旧世界の魔法関係者にもこの現象が研究され、そしてありえない現象であると結論付けられた。

なぜならあの魔法陣に注ぎ込まれた魔力の量が多すぎたからだ。明らかに人が御しきれる力ではない、もしあの力を使えるものがいたらそれは神と呼ばれる。

人に使えないなら星自らが行つたのではないか、という意見も出たが、それもありえないとされた。

英雄と災厄の間に生まれた、救世主は誰にも知られず忘れられていた。

} } E N D { }

無の教主（後書き）

しゃーあいがとうございました。
といふことにヒロインはチャチャゼロでしたー。アーニャは身代わりです。

エヴァの仮契約カードは闇に包まれました。こんな黙文でしたが、
あと誰かが三次創作でアレンジしてくれるでしょう。

それではまた逢つ日までー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2055p/>

転生人生 【極悪の葱】

2011年5月4日21時05分発行